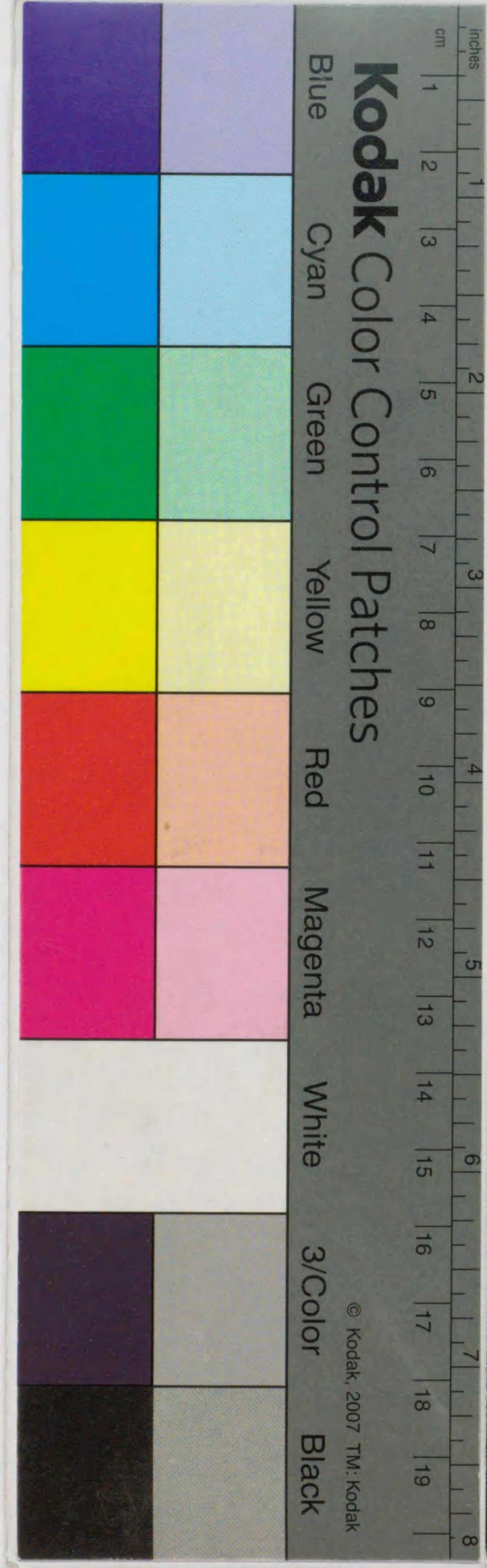


**Kodak** Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



**Kodak** Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



585  
99

24. 10. 26



298

58  
95

ブレイク論稿

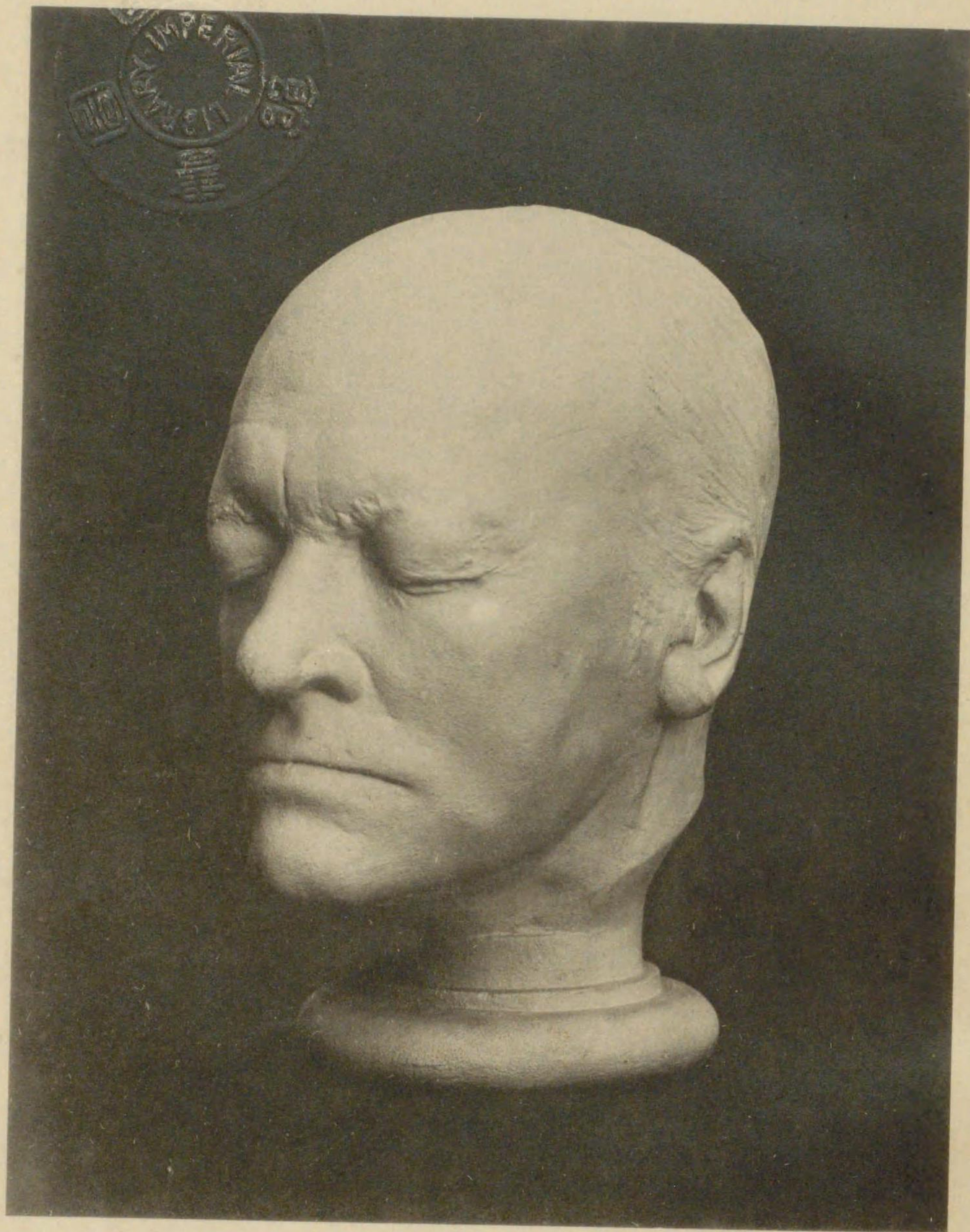


58  
9





58  
95



ブレイク論稿

山宮允著

THE MASK OF BLAKE, by Deville.  
1807年人相學者DevilleのつくたBlakeの正面石膏像.

東京・大塚

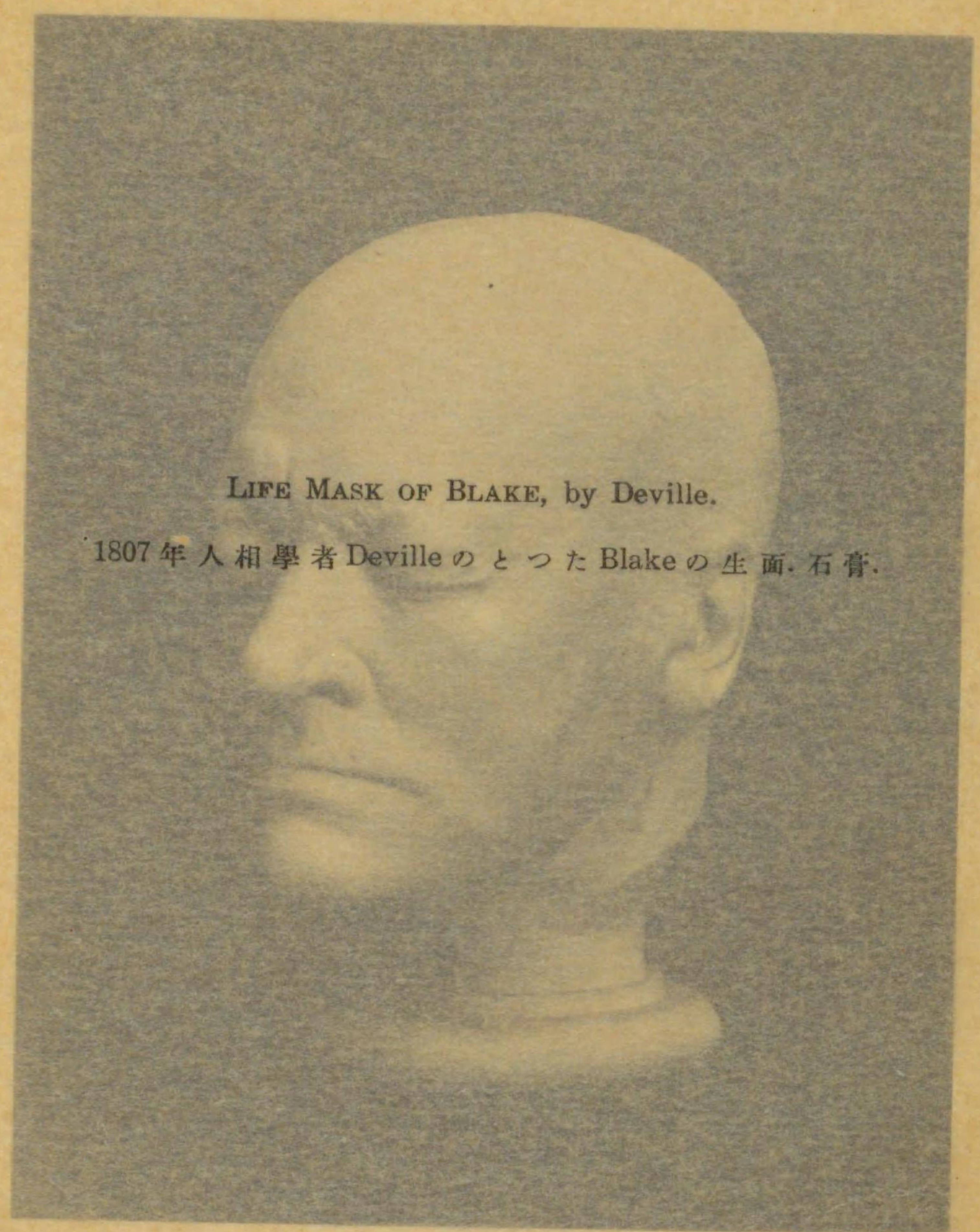
書堂

1929





58  
95



LIFE MASK OF BLAKE, by Deville.

1807年人相學者DevilleのとつたBlakeの生面.石膏.



ブレイク論稿

山宮 允 著

東京・大阪

三省堂

1929





58  
95

TO  
LAURENCE BINYON



585-99

## 序

本書に收めた文章は予が曩に書冊の形で發表し、乃至は又隨時諸種の刊行物に寄稿したブレイクに関する評論や隨筆である。今是を輯録上梓するに當り予はブレイクに親しむ年所の永かつたに拘らずその結實の質量共に貧薄なるを顧て内心愧怍たるものがある。而も予は是等貧薄零細の文章も、榮養の乏しい嗜好品と同じく尙且存在の價値を認められるであらうことを期待する。若しこの期待にして謬らず、輓近勃興の機運に會し今後愈々旺盛に赴くべき吾邦のブレイク學、乃至一般英文學の研究に對し本書が一種のアベリティブとして役立つ、後進好學の士の手引ともならば、そは嘗に著者の愉悅に止らぬであらう。

1929年9月

著者識



58  
9

### 感 謝

著者は登載原稿の再録を快諾された「新潮」  
「近代風景」  
「英語青年」  
「英語研究」  
「英語と英文學」  
「英文學研究」等の諸雑誌の經營者並に「英文學  
叢書」  
「詩岳に登る」及び「ブレイク選集」の出版者  
である「研究社」  
「大雄閣」  
「アルス」三書肆の好意に  
對つて感謝する。尙本書原稿の整理並に出版  
に就き多大の助力配慮を賜つた酒井善孝、岸野  
知雄兩氏の勞を謝し、日本來遊の機會に本書を  
予の敬愛する詩人並に美術批評家ロレンス・  
ビニヨン氏に献ずることを得たるを喜ぶ。

### 目 次

序	ix
感 謝	x
○ブレイクの生涯及び思想	1
ブレイクの繪に就て	67
○ブレイクの片影	86
ブレイクの影響	107
ブレイク研究圖書解題	116
英國で相見たブレイク學者の思ひ出	133
ベルジエー教授訪問記	160
日本ブレイク學回顧	169
索 引	241



58  
9

## 圖版目次

LIFE MASK OF BLAKE, by Deville.	Frontispiece
THE MARRIAGE OF HEAVEN AND HELL, by Blake の扉.	Facing page 66
THE BOOK OF THEL, by Blake の扉.	” 66
FACSIMILE PAGE FROM JERUSALEM, by Blake.	” 66
PITY, by Blake.	” 66
ELIJAH ABOUT TO ASCEND IN THE CHARIOT OF FIRE, by Blake.	” 66
THE ANCIENT OF DAYS, by Blake.	” 66
GLAD DAY, by Blake.	” 66
THE MAN WHO BUILT THE PYRAMIDS, by Blake.	” 88
JOSEPH OF ARIMATHEA AMONG THE ROCKS OF ALBION, by Blake.	” 132
FOR THE SEXES THE GATES OF PARADISE, by Blake : i. Air. ii. Earth. iii. Fire. iv. Water.	” 132
AN AWESTRUCK GROUP STANDING ON A ROCK BY THE SEA, by Blake.	” 132
TWO ENGRAVED DESIGNS, by Blake : i. The Man Sweeping the Interpreter's Parlour. ii. Little Tom the Sailor.	” 132

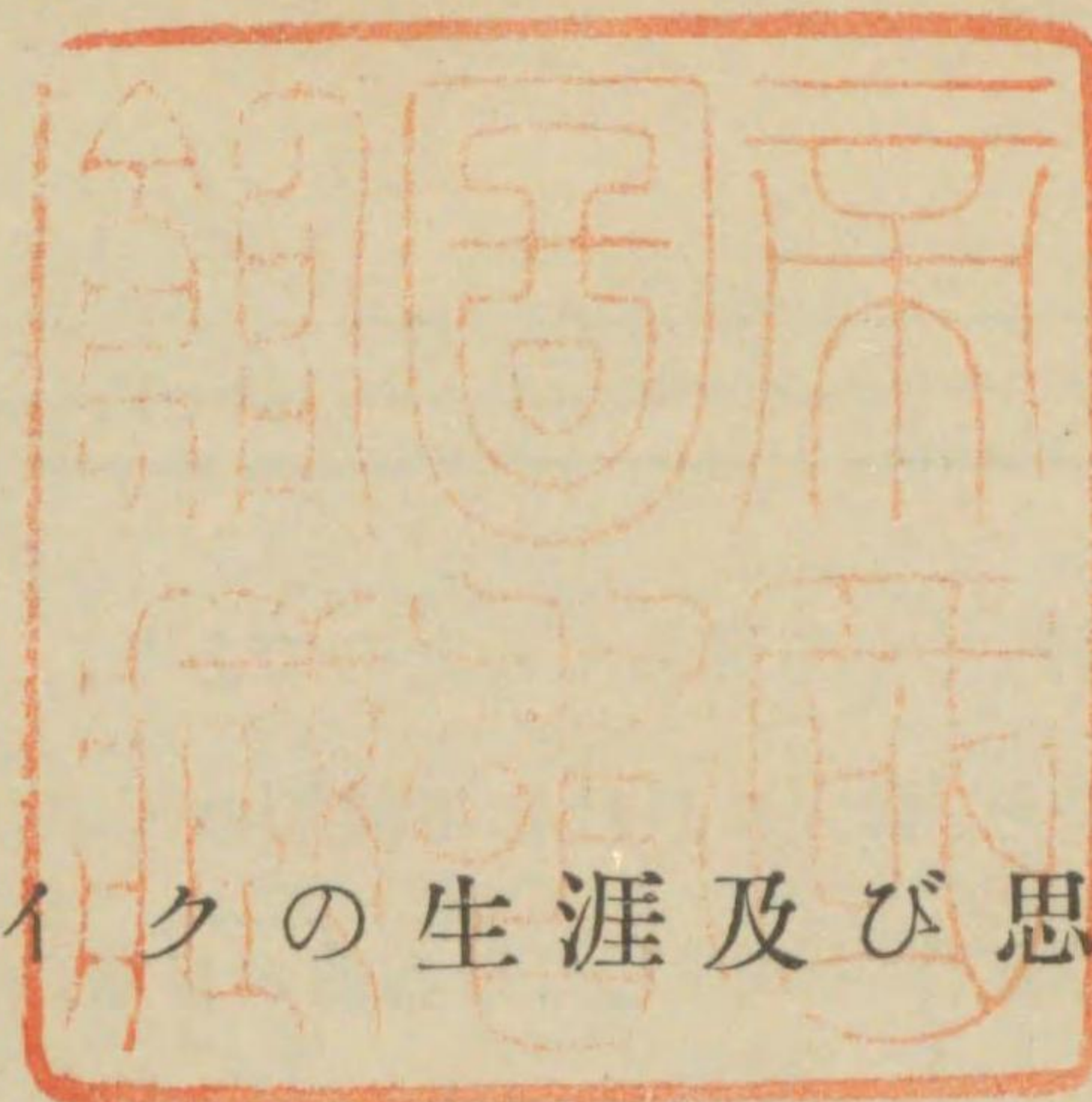


THE SOUL HOVERING OVER THE BODY RELUCTANTLY PARTING WITH LIFE, by Blake and Schiavonetti. Facing page	132
THE REUNION OF THE SOUL AND THE BODY, by Blake and Schiavonetti.	132
“WHAT IS MAN THAT THOU SHOULDEST TRY HIM EVERY MOMENT,” by Blake.	132
“WHEN THE MORNING STARS SANG TOGETHER, & ALL THE SONS OF GOD SHOUTED FOR JOY,” by Blake.	132
EVE TEMPTED BY THE SERPENT, by Blake.	154
SONGS OF INNOCENCE AND OF EXPERIENCE より.	212

Basire の落款があるか恐らく Blake の作であらうと云 はれてゐる Westminster Abbey の繪の模寫.	Page 5
Blake, by Flaxman. Mrs. Blake, by Blake.	9
James Basire, by J. Nichols. John Flaxman, by J. Jackson.	15
William Hayley, by Romney. John Linnel, artist unknown	17
ブレイク作ミルトン像.	21
1804 年 1 月國事犯事件の裁判の行はれた Chichester の Guildhall.	23
Blake and Varley Talking, by Linnel.	31

<i>Poetical Sketches</i> (1783) の扉.	Page 41
<i>Poetical Sketches</i> (1783), 第 18 頁.	43
Blake, by Linnel. Mrs. Blake, by Tatham.	57
<i>Plucking the Flower of Joy</i> , by Blake.	75
From <i>XVII Designs to Thorton's Virgil</i> , by Blake:	
i. The Blasted Tree.	
ii. “A Rolling Stone,” etc.	
iii. “For him our yearly wakes and feasts we hold.”	79
<i>Creation of Light</i> , by George Richmond.	111





## ブレイクの生涯及び思想

### I. BLAKE の生涯

Blake の生涯は外面的には極めて事件に乏しい、平凡単調なものであつた。彼の短からぬ七十年の生涯には何等世人の注意を牽くやうな目覺しい事件は無かつた。少数の知人以外の人々は彼を畫家のやうな、又職人のやうな、そして時々詩を書く、無名貧困な一個の平凡な彫版師としか思つてゐなかつた。實際彼は、普通の職人と同じやうに徒弟の修業を了へた後、永い間窮迫不如意の生活を續けたのであるが、その間數次居を移し保護者や依頼人が代つただけで、一般世人の眼には何等奇もなく、變化もない生涯を送つたのであつた。彼の生涯は一見何等録するに足ることなき常凡の士の最も常凡なる生涯に過ぎなかつた。

併しながら彼に接し、彼の言行に親炙した人々は決してさうは思はなかつた。彼の異常な性格は彼に接近した總ゆる人々に深甚の感化感銘を與へ、直に彼を非凡の天才と信ぜしめたのであつた。外的生活が平凡單調であつたのと正反對に彼の内心は全く異常であり、



變化に富み、靈感に充ち満ちてゐたのである。彼は接近するに随つて益々興味を覚え、偉大に思はれる種類の天才の一人であつた。Gilchrist 其他の傳記作者の録してゐる彼の日常の言行にも、彼の作物と同じく、洵に非凡の天才が現れてゐる。而も彼が存命中竝に死後永い間多數人士に一個の狂人と見做されてゐたのも、はた又彼の聲譽の確立した今日尙彼の作物が多數人士に理解されないのも、彼が常人の追隨を許さぬ奇異非凡の天才であつたがために他ならない。

英吉利の嘗て産した最も偉大な神祕主義者、精神的、象徴的詩人竝に畫家 William Blake は 1757 年 London に呱呱の聲を擧げた。それは實に他の一人の偉大な藝術家 Canova が歐洲の他の空の下に初めて日の目を見た銘記すべき年であり、又 Sweden の神祕思想家 Swedenborg が世界の更改の行はれると豫言した年——その豫言は Blake に於て實現されたと云へないであらうか——であつた。Blake の系圖は明かでないが、父の James Blake は愛蘭系の O'Neil 家の出であつた。Blake の祖父の一人は負債のために家名を傷け、Ellen Blake と云ふ婦人と結婚してその姓を冒したのであつた。James Blake と妻の Catherine とは當時は可成り繁華な街であつた Golden Square の今は無くなつた Carnaby Market の Broad Street 二十八番に居をとし、~~小さな靴下店~~を開いてゐた。彼等の性格乃至生涯に就ては殆ど何も知られてゐないが、父 James は非國教派の信者で

あつた。さうして Blake の才能を認め、彼に適當の教育を施したのを見ると相當譯の分つた男であつたらしい。子供が六人あつた。長子は James と云つて商人となつて成功し、實際問題に就て時々 William の相談相手になつた。二子は John と云つたが小さい中に病歿した。三子は William、四子は John で、これは一番の秘藏兒であつたが、甘やかされ過ぎたために不良になり、William に 'the Evil one' (「惡魔」)と呼ばれてゐたが、軍籍に入つて早世した。五子は Robert と云ひ、William の一番愛してゐた兄弟であるが、これも早く世を去つた。六子は女で Catherine Elizabeth と云つて、相當長生をしたが、最後まで結婚しなかつた。

Blake は上記の父の家で十一月二十八日と云ふに生れ、同じく十二月十一日に St. James's Palace の Palladian Church で洗禮を受けた。彼の受けた教育は極めて不十分で、読み書き算數を僅か許り習つただけであつた。他の子供のやうに散歩や遠足などは好まなかつたが、早くから畫才を示し、十歳の時に立派な畫を描き、十一二歳の頃早くも見られるやうな詩を書いた。1767 年彼は Mr. Pars の開いてゐた Strand の畫學校に入つて正式に畫を習ふことになり、頻りに古畫の臨寫をした。その頃彼は當時人氣の無かつた Raphael や、Michelangelo や、Dürer や、Hemskerk などの版畫のいゝのを安い値で多く買ひ集めた。彼の天才乃至眼識は既に此頃から顯著であつ



て、時代の好尚に左右されるやうなことはなかつたのである。かくて彼は painter たるべき天分を具へてゐたのであるが、父が充分の學資を彼に給し得なかつたため 1771 年十四の歳に James Basire と云ふ第一流の engraver (彫版師) に弟子入りして engraving (彫版術) を習ふことになつた。Basire は堅い、情味の乏しい作風であつたが、Blake の畫風には明かに彼の影響と見るべきものがあるやうである。Blake は正直で親切な Basire の指導の下に満足して畫道にいそしんでゐたが、三年の後新に入門した二人の年上の悪い徒弟に教唆されて師匠の云ふことを聽かなくなつたので、Basire は Blake を彼等から引離すために Blake を Westminster Abbey 其他の London の寺院にやつて、或る好古家に頼まれてゐた古碑の寫しを作らせることにした。Blake の Gothic 趣味は主としてこの時に養はれたのであつた。さうした Gothic 趣味を養つてくれたことに對して彼は Basire に感謝してゐたやうである。Gilchrist の傳記にも複製の出でゐる 'Joseph of Arimathea among the Rocks of Albion' (「アルビオンの岩間立てるアリマシアのジョウゼフ」)(1773) は彼が Basire の許で作つた版畫中今日に傳つてゐる唯一のものであるが、ここにも Gothic 建築や Michelangelo の影響が明かに見られる。彼はまたその頃、發表の意志はなかつたが、時々詩も書いてゐた。



i



ii

Basire の落款があるが恐らく Blake の作であらうと云はれてゐる Westminster Abbey の繪の模寫、i は恐らく King Sebert, ii は恐らく Henry III.



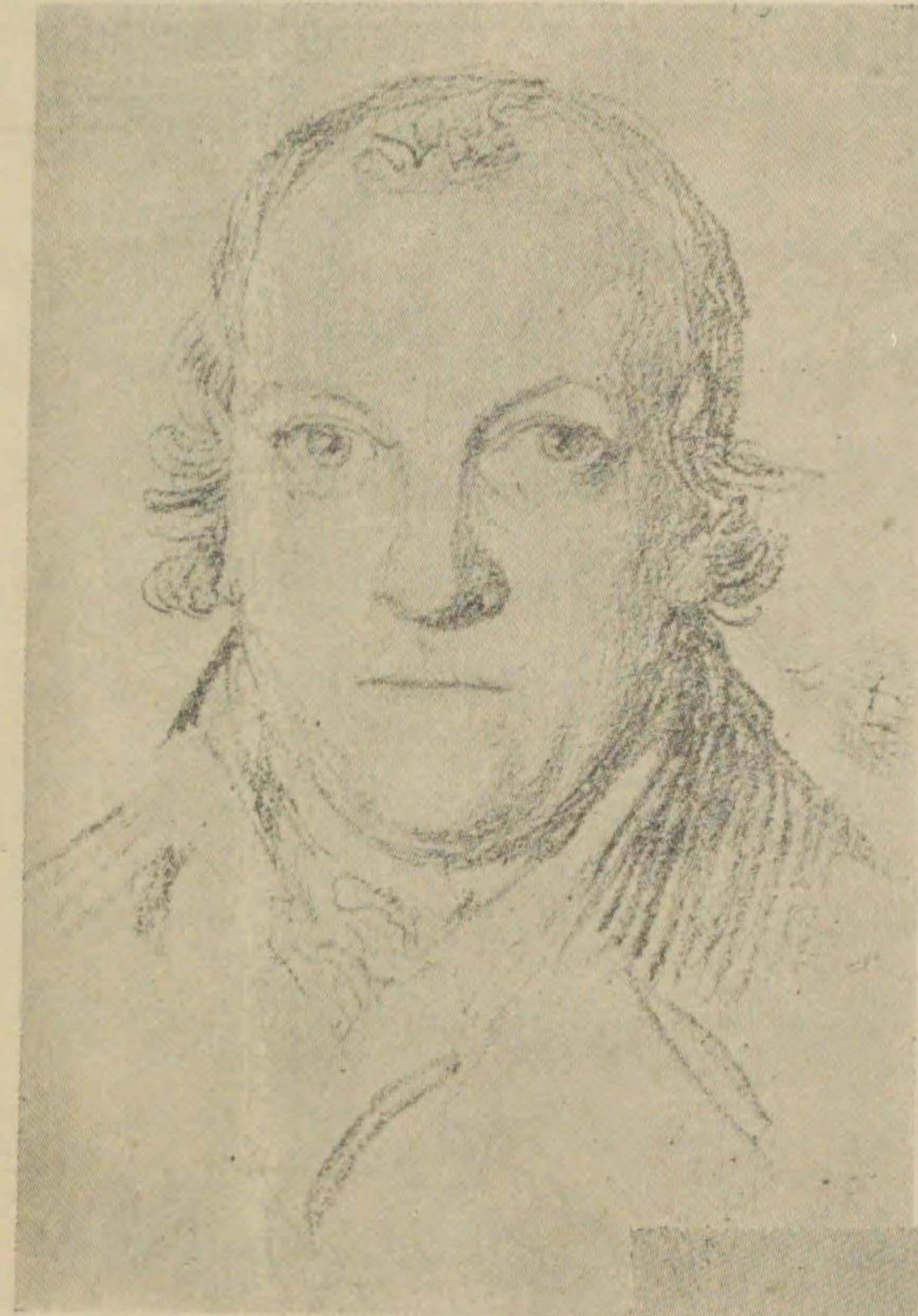
1778年 Blake は Basire の許を辭し、Royal Academy の畫學校に入つた。そこで彼は暫しが間古畫の研究を續けた後、全然學生生活を廢して畫家として立つことになつたが、在學中校長の Moser が Raphael や Michelangelo を貶して Rubens や Lebrun を賞揚したとき、Blake は憤激して、“These things ~~that~~ you call finished are not even begun; how can they be finished?” (『貴方が出来上つた作と云はれる是等の繪はまだ描き始めとも云へません、どうして出来上つた作と云へませう』) と抗辯したと云ふ (Gilchrist, Chap. v.). 又彼が自作の繪を携へて當時第一流の畫家と仰がれ、人氣作者でもあつたが、彼と全然畫風の違ふ Reynolds を訪れ、奇矯の風を矯めよと云はれていく憤激したのもこの頃のことであつた。Royal Academy を廢めた後彼は父の家で師匠を離れて製作をすることになり、書肆の依頼を受けて時々雑誌の挿畫なども描いてゐた。彼が生涯の伴侶となつた盟友 Flaxman や, Stothard や, Fuseli 等を識つたのは此頃のことである。

1780年 Blake は初めて Royal Academy の展覧會に ‘Death of Earl Goodwin’ と題する作 (恐らく drawing) を出陳した。爾後 1808 年に至る迄に更に五回程同じ展覧會に出品したことがある。恰度その頃彼は Polly (or Clara) Wood と云ふ快活な少女に戀してゐたが、其少女はつひに彼の戀に報いなかつた。彼はいたく失望し、



心の傷手を癒すために植木屋の Boucher と云ふものの家に寄寓することにした。偶々彼が Catherine と云ふその家の娘に悲しい失戀の話をして聞かせた時、Catherine は “I pity you from my heart” (『心からお氣の毒に思ひますわ』)と云つた。Blake が “Do you pity me?” (『氣の毒と思ひますか』)と訊ねると、娘は “Yes, I do most sincerely” (『ええ、ほんとにお氣の毒に思ひます』)と云つたので Blake は喜んで “Then I love you for that” (『そんなら私は貴方が好きです』)と云つた (Gilchrist, Chap. v.). かくして二人は戀仲となり、七八二年八月十八日と云ふに Catherine Sophia Boucher は二十一で Blake に嫁いたのであつた。

Catherine は教育の無い女だつたので結婚後 Blake は読み書きを教へ、又彫版術や彩色の仕方や、繪の書き方も教へ、後には Blake の製作の手助けをするやうになつた。彼女は Blake を愛すると云ふよりは崇拜してゐたが、常に唯々として彼の命に服し、又聽て彼の異常な性格の影響さへ受けるやうになつた。彼女は Blake と一緒に三四十哩の徒歩旅行をすることが出来る程強健な婦人であつたが、よく苦しい家計を處理し、殆ど毎夜のやうに烈しい靈感の發作に襲はれる Blake をば畏怖の眼を瞠つてじつと傍で見てゐるのであつた。彼女は貞淑温良な夫人の生涯を全うし、Blake よりも四年後れて 1831 年に死んだ。



i



ii

i. Blake, by Flaxman.

ii. Mrs. Blake, by Blake.



尤も結婚後間もなく Blake 夫妻の間が、夫人の嫉妬から、否 Blake が夫人の嫉妬の種を作つたがために、一時圓滿を缺いたことがあつたと云ふ。さうしたことは自由戀愛を主張した Blake にあり得ぬことではない。Blake は第二夫人を迎へようと云ひ出したことがあるとも云はれてゐるが、Blake の品行が悪かつたと云ふことはどの傳記にも見えない。彼は家庭の人としても、又社會の人としても 方正な生活を送つた、さうしてこの夫婦間の感情の疎隔もやがて全然無くなり、兩人は眞實の愛を以て永い、幸福な結婚生活を全うしたのであつた。併し兩人の間に子供は一人も生れなかつた。

Blake 夫婦は No. 23, Green Street, Leicester Fields に一家を構へ、新家庭を造つた。其後程なく Blake は Flaxman の紹介で Mrs. Matthew を識り、Mrs. Matthew の開いてゐた青踏派 (The Blue-Stockings) の談話會 (conversazione) に出で交際社會の人達に接觸するやうになつた。さうしてその會合の席上で自作の詩を朗讀したり、自作の詩を自作の曲に合はせて歌つたりしてゐた。彼は何等音樂の知識を持つてゐなかつたが、彼の朗讀も吟詠は非常によかつたので會衆の喝采を博し、専門の音樂家が彼の作曲を書きとめてゐたと傳へられてゐる。

1874 年 Blake の父が死んで兄の James が後を嗣ぎ、靴下店を續けてやることになつたが、Blake はその隣に舊(?)の相弟子の



Parker と云ふ男と共同で 'Parker and Blake' と云ふ版畫店を開いた。James と Blake とは、恐らく氣質の相違から、のちには仲違ひになり互に口も利かぬやうになつたが、弟の Robert はよく Blake の店に来て繪や彫版術などを Blake に習つてゐた。Blake も兄弟の中で一番この弟を愛してゐたが、三年程経て Robert は不治の病に罹り、Blake の心を籠めた看護の效もなく、有爲の才を抱いて夭折したのであつた。其時 Blake は Robert の靈が『歡喜の餘り拍手し乍ら』("clapping its hands with joy") 天井を抜けて昇天するのを見たと言ふ。弟の死後間もなく Blake は、餘り芳ばしい成績を挙げなかつた上記の版畫店を閉ぢ、Parker と別れて、近くの Poland Street は No. 28 に轉居して一人で彫版印刷業を始めた。Robert の靈が夢に現れ Blake の "Illuminated Printing" (『光華印刷』) と云つてゐた腐蝕彫版術を教へてくれたのは其處にゐる時のことで、爾後彼の詩集は皆この方法で彼自ら製版し、印刷し、膠水に解いた繪具で手づから彩色を施して本に仕立てたものだが、Blake 夫人はよく製本や彩色の手傳をしてゐた。1789 年の *Songs of Innocence*, *The Book of Thel*, *The Ghost of Abel*, 1790 年の *The Marriage of Heaven and Hell*, 1793 年の *The Gates of Paradise*, *Visions of the Daughters of Albion*, *America: A Prophecy*, 1794 年に出た *Songs of Experience*, *Europe*, *The Book of Urizen*,

1795 年の *The Song of Los*, *The Book of Ahania*, *The Book of Los* などは皆其頃 Blake が自身 Illuminated Printing によつて作つた詩集である。但し 1791 年の *The French Revolution* だけは例外で活版印刷に付したが、これは發行を見ずに終つたらしく、先年只一部その校正刷らしいものが發見されたのみで、書冊の形で傳つて居らぬ。Blake の輸入詩集の賣價の一例を示すと、合本の *Songs of Innocence and Experience* は一磅十志乃至二磅二志位であつた。尤も後には彼の窮狀を知つてゐた友人達に五磅五志又はそれ以上の値段で買取つて貰つたこともあるが、俗受けのしない彼の詩畫はいつも勞苦に相應する報酬を彼に齎さなかつた。

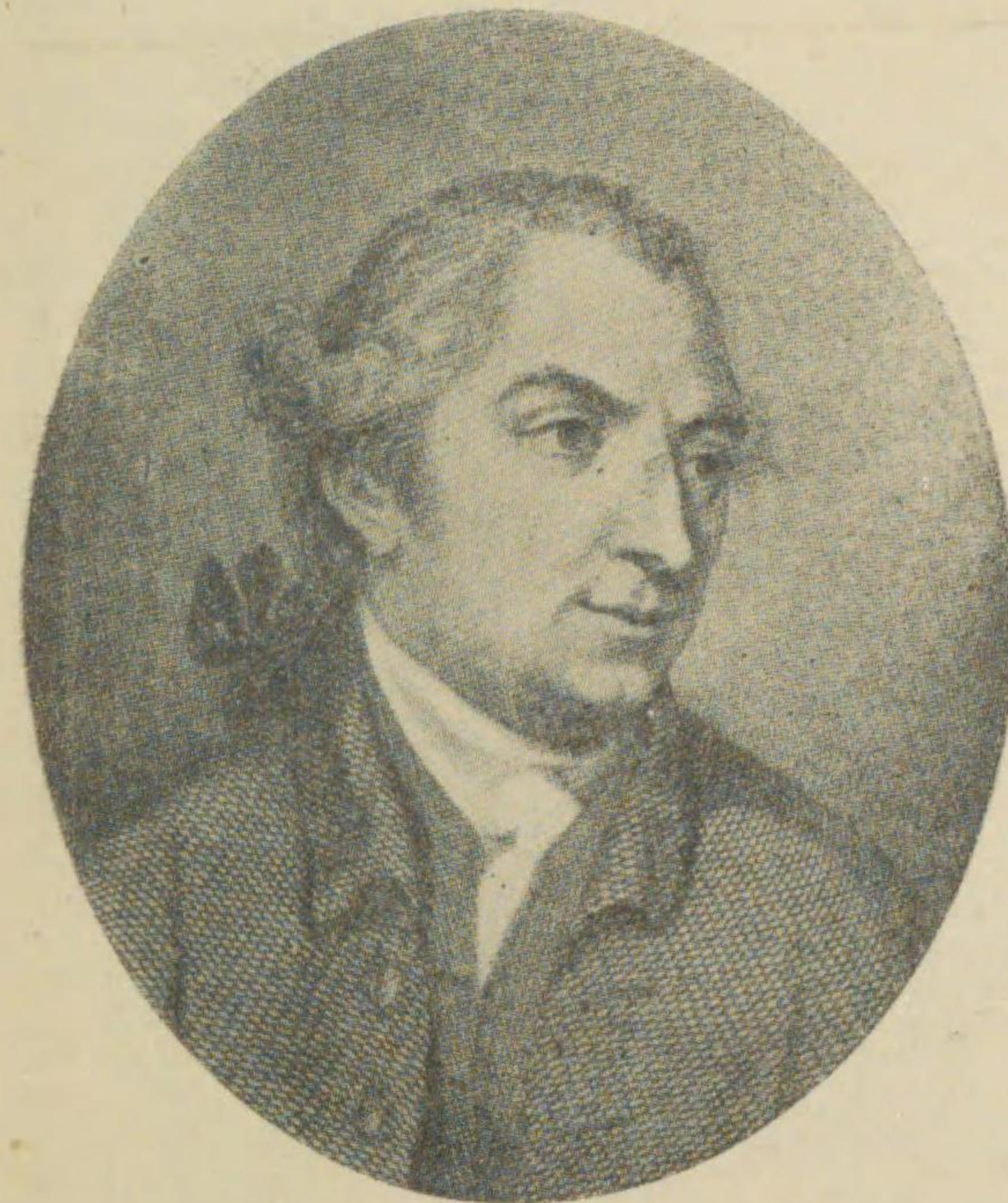
1793 年、母の死後、Blake は又 Lambeth の Hercules Building に轉じ、そこに 1800 年までゐたが、彼の著作は多くそこにゐる間に出來たのである。當時 Blake はまだ各方面に知己を多くもつてゐなかつたが、書肆の Johnson と云ふ者と懇意になり、Johnson が時々知友を招き開いてゐた晚餐會の席上で革命派の政客達や、自由思想家達と相識るやうになつた。その中には當時其方面の代表的人物と目されてゐた Price や、Priestley や、Miss Wollstonecraft や、Godwin や、Holcroft や、Paine などが居つたが、Blake は是等の政客や思想家と主張を共にし、他の者は憚つて冠らなかつた bog-net-rouge —— 佛蘭西革命派の者の冠つてゐた赤帽 —— を冠つて往來を



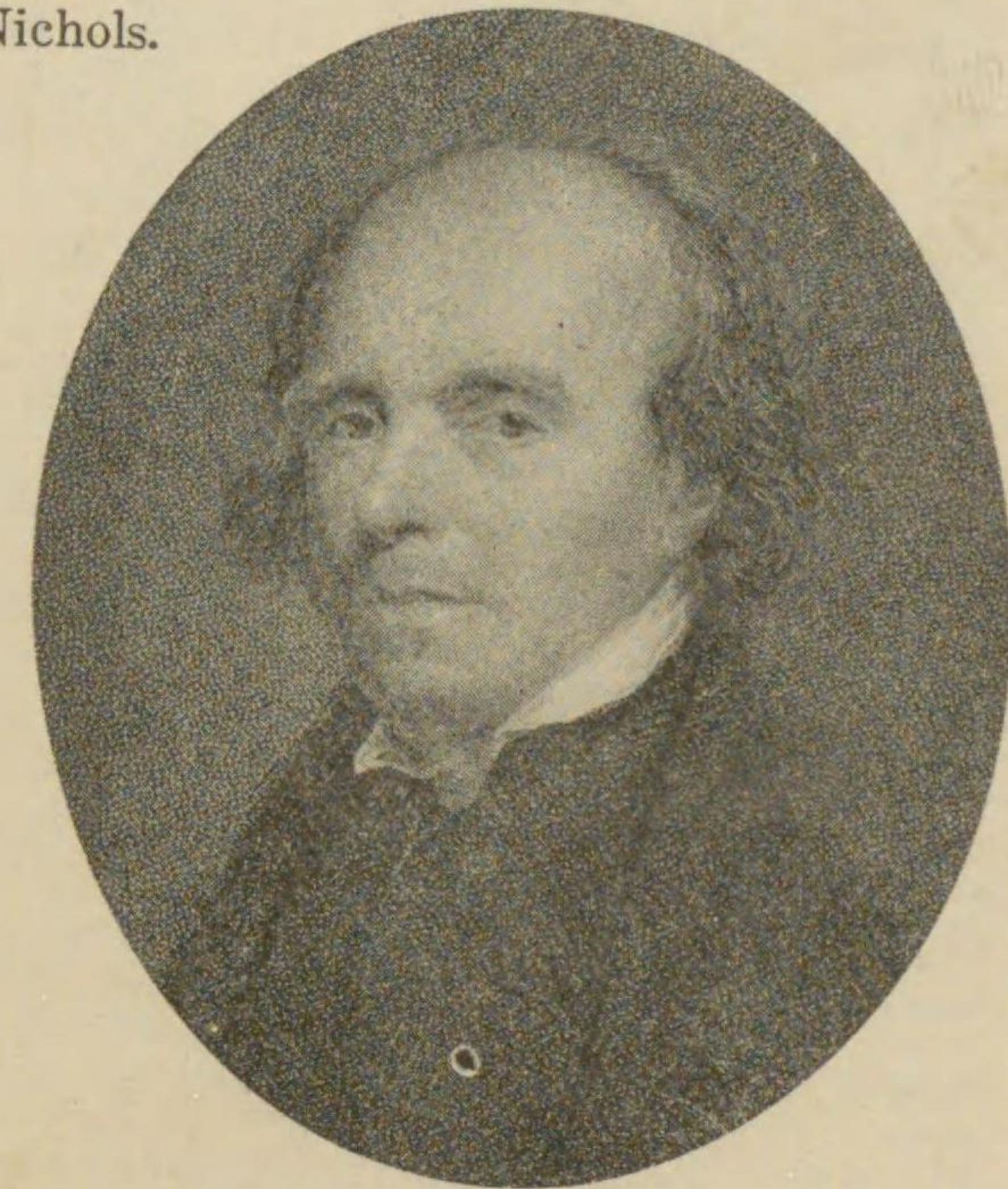
潤歩してゐたが、1792年九月の大虐殺以來赤帽を冠るのを廢めた。恰度その頃佛蘭西の國會議員に選ばれた Paine は *Rights of Man* を出して英國官憲の忌諱に觸れ、將に逮捕されようとしたが、Blake の忠告によつて佛蘭西に逃れ、危く一命をとりとめたのであつた。又 Blake が三十年の永きに亙つていつも彼の繪を喜んで買つてくれた彼の最もよき保護者の一人 Captain Butts と相識るやうになつたのもその頃であつた。

この Lambeth 時代に Blake は繪は餘り描かず、専ら詩作に耽つてゐた。尤もこの頃の作は、1797年に書き初めた *Vala* の他は、比較的短いものばかりであつた。

1800年に Blake の生涯に於ける一の重要な事件が起つた。この年 Blake は Flaxman の紹介で初て William Hayley に遭つた。當時五十六歳の Hayley は *Triumphs of Temper* 其他の著作によつて名を知られてゐた富裕な詩人で、Sussex の、Eartham に居を構へ、自ら“the Hermit of Eartham”と稱してゐた。この Hayley は詩は巧くなかつたが、親切な、氣前のいい、相當趣味教養のあつた男で、當時 1800年に死んだ彼の詞友 Cowper の傳記——この Hayley の傳記は Cowper の傳記中最も重要なものである——を書いてゐたが、Blake にその挿畫を依頼したのであつた。Blake は、Fuseli や、Johnson や、其他の友人の勧めもあり、それを引受

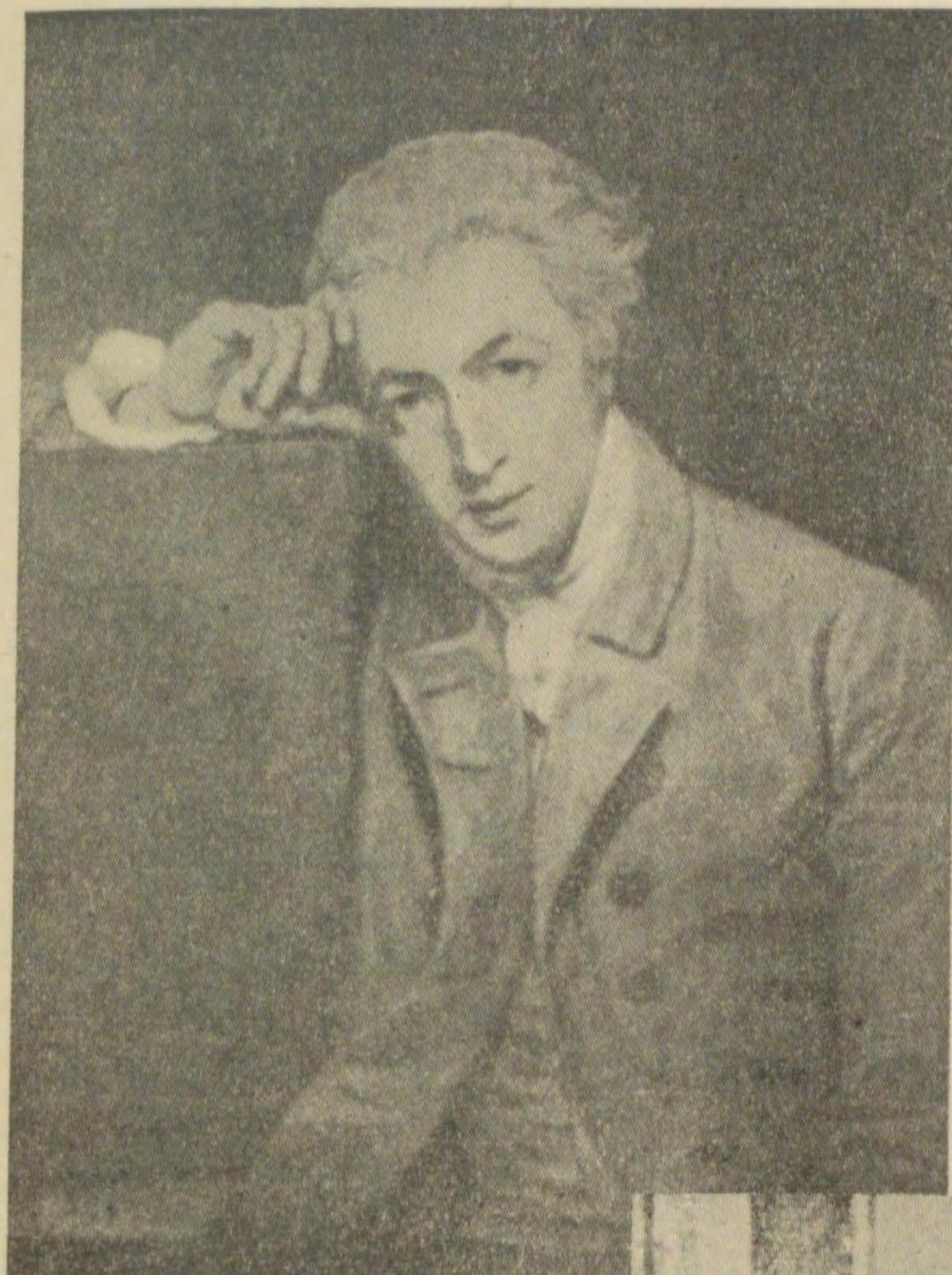


James Basire, by J. Nichols.



John Flaxman, by J. Jackson.





William Hayley,  
by Romney.



John Linnell, artist unknown.



け、Hayley の家から程遠からぬ Bognor の近くの Felpham に移轉して仕事をする事になつた。Blake は Felpham の海岸に茅葺の田舎家を年二十磅で借り、そこに三年間夫人と共に逗留した。Hayley は Blake の才能を認めて彼を招請し、Blake も Hayley を保護者と思つて彼の命ずる繪を描き、傍ら彼に希臘語などを習つて暫くの間は愉快に又無事に暮した。陰鬱な息の詰まるやうな Lambeth から Felpham の海岸に移轉して初めて田園の生活を経験した都會育ちの Blake にはその風光は非常に物珍らしく又嬉しく思はれたのであつた。彼は恰も天國に在るが如くに感じたのであつた。彼が Felpham に來て間もなく Flaxman に送つた手紙によつても當時の彼の喜悅は察するに難くない：—

“We are safe arrived at our cottage, which is more beautiful than I thought it, and more convenient. It is a perfect model for cottages, and I think for palaces of magnificence.....No other formed house can ever please me so well; nor shall I ever be persuaded, I believe, that it can be improved either in beauty or use. Mr. Hayley received us with his usual brotherly affection. I have begun to work. Felpham is a sweet place for study, because it is more spiritual than London. Heaven opens here on all sides her golden gates; her windows are not obstructed by vapours; voices of celestial inhabitants are most distinctly heard,



and their forms more distinctly seen; and my cottage is also a shadow of their houses.....And now begins a new life, because another covering of earth is shaken off" (Letter to Flaxman, dated Sept. 21, 1800).

『私共は無事に田舎家に着きましたが、この田舎家は思つたより綺麗ですし、又便利でもあります。田舎家の立派な手本になる、又華麗な宮殿の手本にもなる家と思ひます。.....此家位いと思ふ家はありません、又この家をこれ以上綺麗にし便利にすることが出来ると思ふこともありますまい。ヘイリィ氏は如例懇情を以て私共を迎へて呉れました。私は仕事を始めました。フェルパムは倫敦よりも精神的だから、研究には極いい土地です。此處では天の金門が四方に開け放たれて居り、天の窓が霧に曇つて見えなくなることがありません。天人の聲が手に取るやうに聞え、天人の姿が餘程明瞭(明瞭)見えます。そして私の田舎家も天人の家の影なのです。さうしてこれから新生活が始まるのです。何故と云ふに現世の蔽ひが又一つとれて無くなつたからです。』

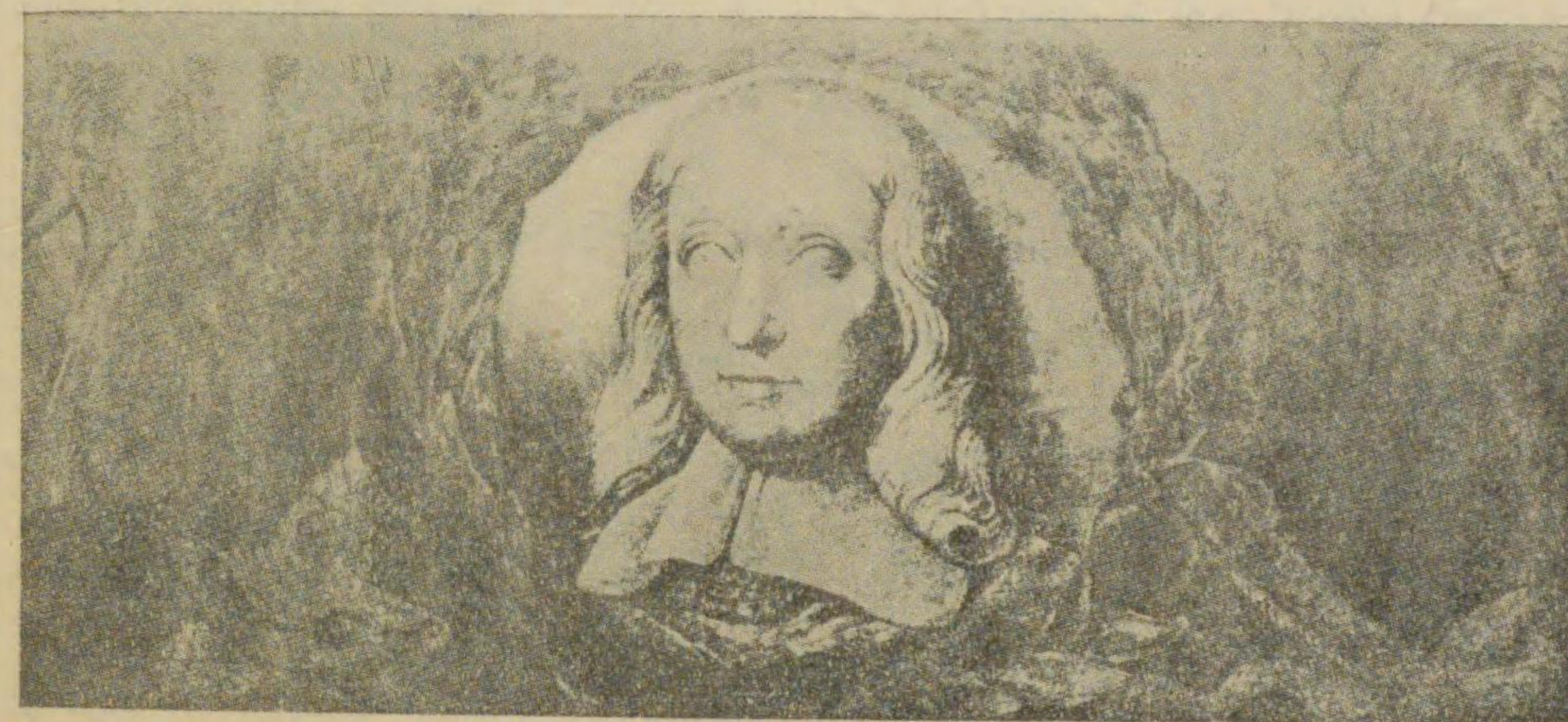
又 Butts 宛の手紙にも

"One thing of real consequence I have accomplished by coming into the country, which is to me consolation enough; namely I have recollected all my scattered thoughts on art, and resumed

my primitive and original ways of execution in both painting and engraving, which, in the confusion of London, I had very much lost and obliterated from my mind" (Letter to Thomas Butts, dated January 10, 1802).

『真に大事なことを一つ私は田舎に来て成就しましたが、それは私の大なる慰安です。即ち私は美術に關する私の散漫になつた思想を再びとり纏め、私の素樸獨特な書風並に彫版術に立返りました。それを混亂した倫敦に居る時私は大方忘れてゐたのでした。』と云つてゐる。

Blake と一緒に Felpham に移住した妻や妹も同様 Felpham の生活に満足してゐたが、Blake は何日までも保護者の許に自己を没却

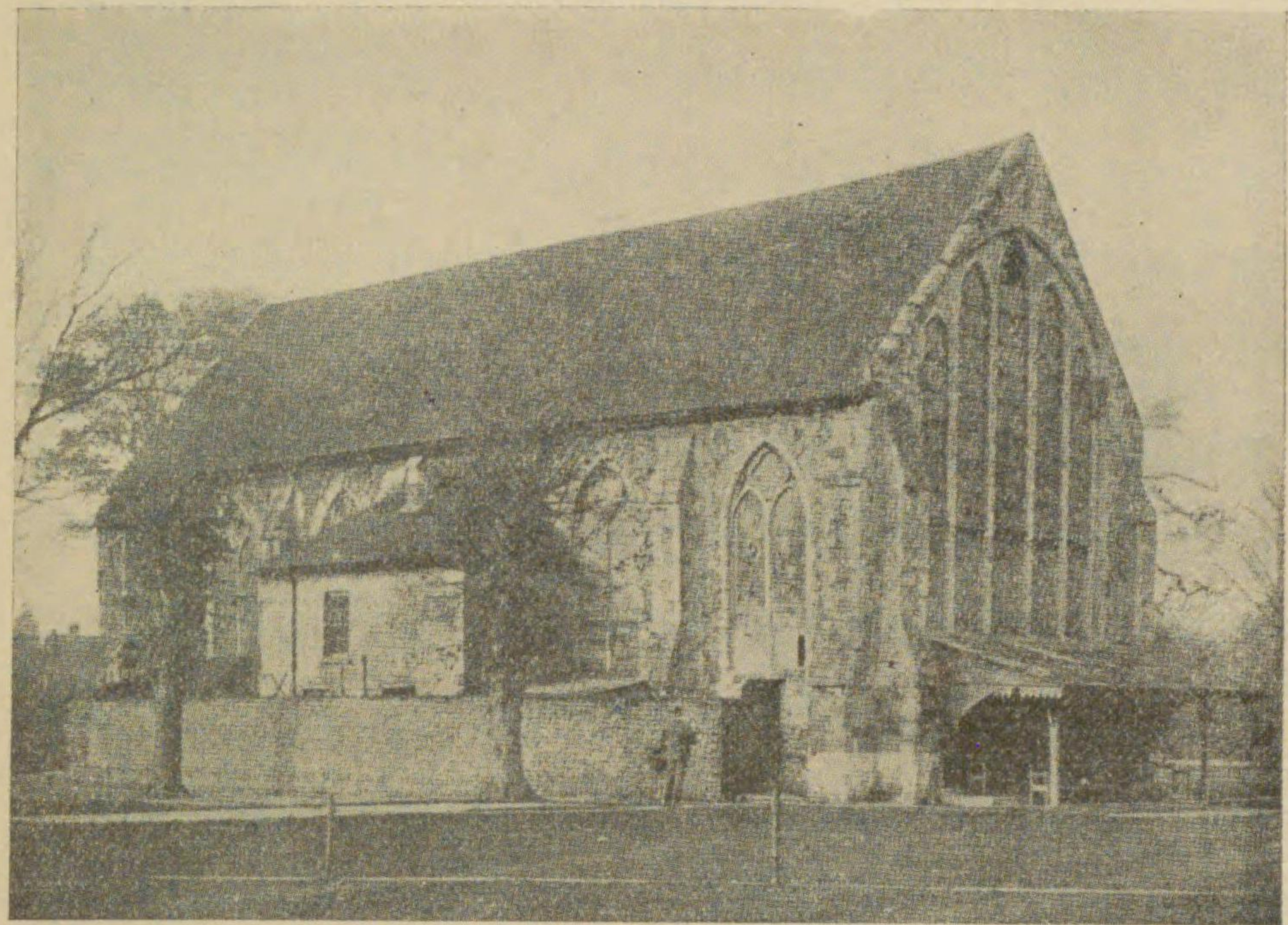


ブレイク作ミルトン像 (Felpham 滞在中 Hayley のために描いたテムペラ)



して器械的な仕事を續けてゆくことは出来なかつた。Blake は約束の Cowper 傳の挿繪の彫版を了へた後、暫くの間唯々として Hayley の命ずる種々の彫版や繪の製作に従事してゐたが、やがてかかる生活に不満を感じるやうになつたのは自由不羈の精神に生くる天才として當然のことであつた。殊に Hayley は Blake の詩や繪を理解する眼識が無く、知人の需むる儘に度々當時流行の畫風で詰らぬ繪を描くことを命じたので、Blake は Hayley と口論をするやうになり、頻りに憂しと見し London に歸りたく思ふやうになつた。

かうして Blake と Hayley との間の感情の疎隔して來た時、偶々事件に乏しかつた Blake の生涯に珍らしい裁判事件が起つた。或日 Blake の家の庭の植木の手入に來てゐた植木屋が、John Schofield と云ふ下級軍人を手傳ひに雇つて Blake の家の庭で仕事をさせてゐたが、Blake はそれとは知らずその男に出て行けと命じたが聽かなかつたので、口汚く罵り且抵抗するその男を引捕へて軍人の屯所まで連れてつ行たのであつた。處がその男は Blake が國王に對し不敬の言を吐き、Napoleon が英國に攻めて來ればいいと云つたと云ひふらしたので Blake は國事犯の嫌疑を蒙り、逮捕され、1804 年の一月十一日に裁判を受けることになつた。Blake は自身 Schofield の云ふ様なことは云つた覺はないと云つてゐるが、恐らく Blake の平素抱いてゐた進んだ思想や軍國主義反對の意見などがこ



1804 年一月國事犯事件の裁判の行はれた Chichester の Guildhall.



の軍人の反感を買ひ、さうした復讐の手段になる虚偽説を構へしめたのであらう。或は又、この軍人は Blake の思つてゐたやうに、Blake の左傾思想乃至軍國主義反對意見を危険視してゐた官憲の廻し者であつたのかも知れぬ。それは兎も角、その裁判事件は近處の人や友人の Hayley や Seagrave などが證人になつて辯護してくれたので、Blake は結局無罪の宣告を受けたが、この事件によつて單純柔和な Blake は可なり心を痛め、又色々と考へさせられたことは當時彼が Mr. Butts にこの事件の顛末を報じた手紙 (Gilchrist, Chap. xix) によつても察知するに難くない。

この裁判事件に際して Hayley が Blake に對して示した好意は兩人の間の友情を復活させたが、Blake の London に歸らうと云ふ意志を翻させるには至らなかつた。Blake はその後間もなく London に歸つて、Oxford Street の近くの South Molton Street に居をとり、數年の後又そこから Strand の Fountain Court に移つた。London に歸つた後は Blake の Hayley に對する反感は薄らぎ、Blake はただ喜びと感謝の念をもつて幸福であつた Felpham 時代の生活や Hayley の好意を想ひ出すのであつた。即ち 1804 年十二月に Hayley に送つた手紙に Blake はかう書いてゐる：—

“My wife joins me in wishing you a merry Christmas. Remembering our happy Christmas at lovely Felpham, our spirits



seem still to hover round our sweet cottage.....I have said seem, but am persuaded that distance is nothing but a phantasy. We are often sitting by our cottage fire, and often we think we hear your voice calling at the gate. Surely these things are real and eternal in our eternal mind, and can never pass away.”

[妻と一緒にクリスマスの御喜びを申し上げます。美しいフェルバムで愉快なクリスマスをしたことを想ひ出すと私共の精神(ミ)は未だにあの楽しい田舎家のあたりを飛び廻つてゐるやうに思はれます...思はれますと申しましたが、遠く離れた處にゐると思ふのは一の幻想に他ならぬと信じます。私共はよくあの田舎家の爐傍の椅子に掛けてゐるやうな気がし、又よく私共は戸口に訪(ミ)はれる貴方の聲が聞えるやうに思ふのです。かうしたことは私共の永劫の心の中では眞實永劫なものであり、消え失せることが無いに違ひありません。]

London に歸つてから Blake は Felpham 滞在中に養はれた氣力と構想とを以て専心製作に従事し、自己の稟性に忠なる、囚れざる作家の製作の喜びを楽しむことが出来るやうになつた。間もなく Felpham 滞在中に書き出した *Jerusalem* (1804) と *Milton* (1804) が完成して、前の詩集と同じやうに Blake 自身の版印刷で出版された。この二つは Blake の幻覺乃至想像の最高水準を示す神秘的な

諷諭體の詩篇で、Blake 自身靈感の刹那に supernatural being に口授されて書いた最も偉大な作品と稱してゐたものであつた。續いて *The Mental Traveller*, *The Everlasting Gospel* 其他の詩篇が出たが、此頃の作は孰れも皆神秘的な晦澁なものばかりである。

繪や版畫も多く出来、*Christ in the Sepulchre*, *The Spiritual Form of Pitt Guiding Behemoth*, *Jacob's Dream*, *The Canterbury Pilgrims*, *Nelson Guiding Leviathan*, *The Bard from Gray*, *Satan Calling up His Legions*, *The Ancient Britons* 等の重要な作品は皆この頃の作で、大部分 Broad Street の Blake の生家で開いた 1809 年の個人展覽會に出陳したのであつた。この展覽會は竟に世人の注意を牽くに至らず、失敗に終つたが、其際 Blake の書いた *Descriptive Catalogue* (「記述目錄」と *Public Address* (「公開狀」とは彼の神祕思想乃至藝術觀を熱烈な筆で叙べた興味多き文章で、W. M. Rossetti は “in truth, it cannot be said that one knows Blake thoroughly until after perusing the *Descriptive Catalogue*.”—Aldine Edition *Blake*, Introduction. (「洵に、『記述目錄』を精讀した上でなければ Blake を知り盡したものと云はれない」と云ひ、Charles Lamb は「記述目錄」の中の *Canterbury Pilgrims* の解説を Chaucer の最も優れた批評であると稱揚した。又 Blake の版畫の最大傑作と云はれてゐる Blair の



*The Grave* と *The Book of Job* の挿畫も Felpham から London に歸つてからの作で、夫々 1808 年及び 1825 年に出版された。

かくの如く次々に詩畫の力作の出來た London へ歸還後の幾年間は、併しながら、決して物質的に恵まれてゐなかつた。彼は依然として人氣の無い作者で、日々の糧さへ得難い程に窮迫してゐた。只一度 Blair の *The Grave* の挿畫の原稿及び *The Book of Job* の挿畫竝に彫版の報酬として少し纏つた金——それも兩方を合せて二百ギニにも足らぬ勞苦に不釣合な些細な金額であつた——を得ただけで、力作を僅々五志そこそこで賣つて麵麩を求めなければならぬことさへ屢々あつた。その頃 Blake 夫妻は一週半ギニで生活し、Blake 夫人が時々夫に空の皿を出して金の無くなつたことを知らせたと云はれてゐる。

かかる窮迫のただ中に Blake を苦める事件が次々に起つた。先づ彼が彫版することになつてゐた Blair の *The Grave* の挿畫を出版者の Cromeck が最初の約束を破棄して當時人氣のあつた彫版師の Schiavonetti に依頼して Blake の矜持心を傷け、収入の途を絶つたのであつた。それは、Blake が考へてゐたやうに Flaxman 及び Hayley の所爲ではなく、全然 Cromeck の方寸に出たことであつた。Cromeck は Blair の *The Grave* を出版して莫大の利益を得たのに Blake には僅か二十ギニの揮毫料を拂つただけで済ましてゐたのが

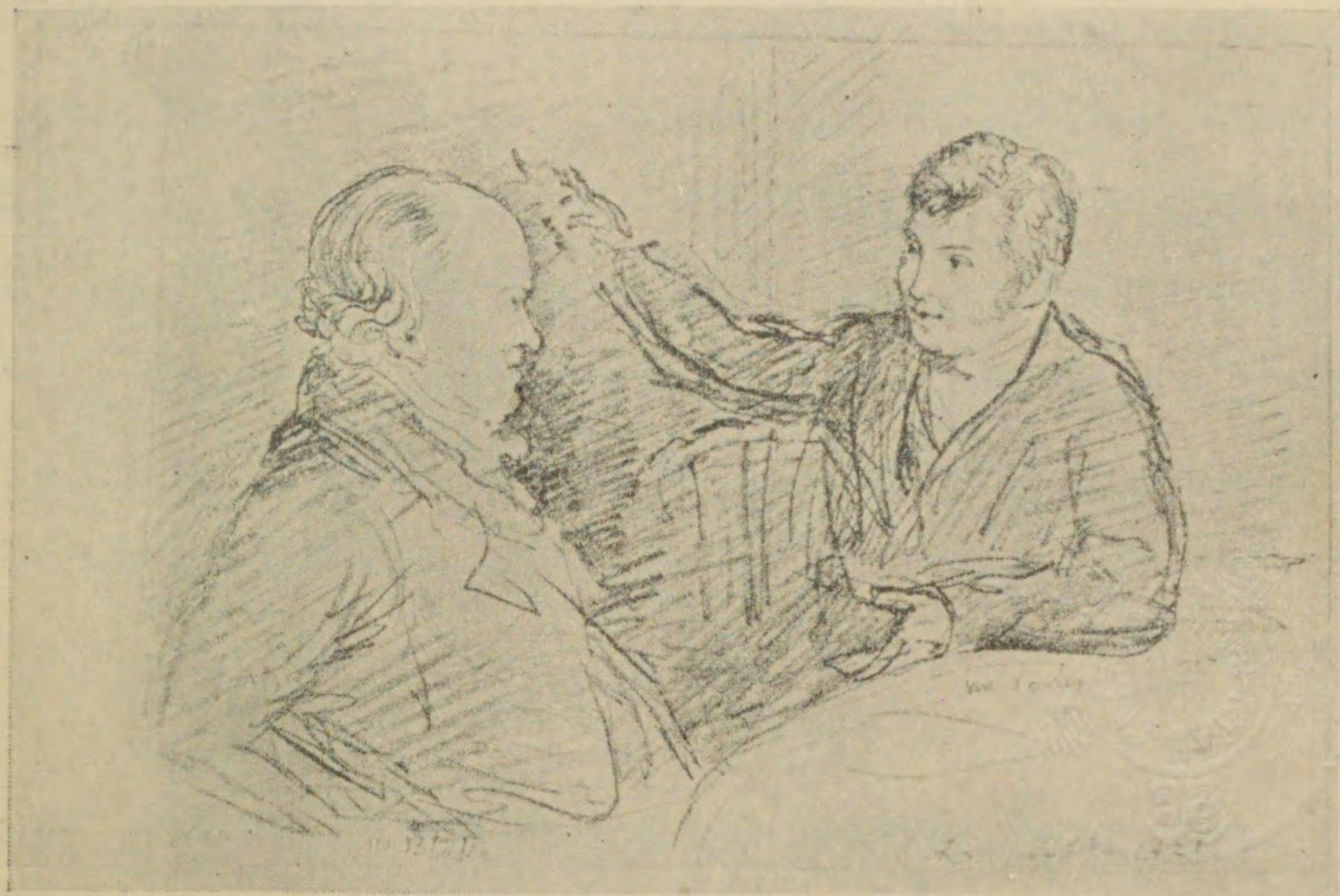
既に不徳義であるのに、其後も卑劣無禮な所業を重ねて度々 Blake を怒らせ、苦しめたのであつた。或時 Cromeck は Blake の描いてゐた *Canterbury Pilgrims* の下圖を見て、同一畫題同一圖柄の繪を Stothard に描かせ、その版畫を作つて賣り出し、Blake の繪を出されぬやうにしたことがあつた。Blake が前に述べた個人展覽會を開き、*Descriptive Catalogue* を書いて自己の立場や主張を明かにしたのは實にこの事件がもとであつた。

それのみではない、Leigh Hunt の *The Examiner* 誌上に甚だ淺薄ではあるが Blair の *Grave* の挿畫を嘲罵した批評が出た。續いて同誌に Blake の個人展覽會及び *Descriptive Catalogue* の批評が出たが、それは前よりも激しい惡評批難で、Blake は “an unfortunate lunatic, whose personal inoffensiveness secures him from confinement” (「亂暴をしないので拘禁を免れてゐる不幸な狂人」)だと云ふ人身攻撃に互る文句さへ交つてゐた。更に翌 1810 年 Schiavonetti が死んだ時、彼を讚美し、Schiavonetti の靈腕が Blake の不恰好な馬鹿氣た繪に外面的魅力を附與したと云つて三度 Blake に非常な侮辱を加へた。Blake は飢餓よりも辛いさうした無理解な批評に對する激しい憤懣を詩に洩らして僅に自ら慰めてゐたのであつた。暫くの間 Blake は殘酷な運命の試練に堪へて不滿鬱憂の日を送らねばならなかつた。



併しながらやがて幸運の見舞ふ日が来た。さうして新に得た友人や保護者によつて Blake の晩年は比較的幸福的な輝かしいものとなつた。さうした友人保護者の中特記すべきは風景畫家の John Linnell であるが、Linnell は 1818 年に初めて Blake を識つて以來 Blake の死ぬまで始終 Blake の作を買つてゐた最も大事な晩年の patron であつた。 *The Book of Job* の挿畫の版畫は Linnell の需めによつて作つたのであつた。又 *Dante* の挿畫も Linnell の依頼によつて描いたのである。又 Linnell は *Paradise Regained* の挿畫も買ひ取つた。又 Blake が Dr. Thornton の *Virgil* の英譯の木版畫を描いたのも——これは Blake の遺した唯一の木版畫である——Linnell の斡旋によるのであつた。尙 Linnell の紹介で Blake は肖像畫家の Sir Thomas Lawrence や風景畫家の John Varley などと相識り、是等の畫家にも繪を買つて貰ふやうになつたのであつた。又是等の友人を介して Blake は Blake の印象を書いて傳記作者に材料を提供した Lady Charlotte Bury や Crabb Robinson などと知合になつたのであつた。Linnell は Blake を愛するの餘り息子の一人に William と命名した。Linnell 家には出版されなかつた Blake の繪や詩の原稿が澤山保存されてゐるさうである。

かくして Blake は安らかな晩年を送つて、安らかに死んだ。平素強健であつた彼は七十の長壽を全うし、しかも何の苦悶もなく、眠



Blake and Varley Talking, by Linnell.



るが如くに大往生を遂げた。死ぬ日に彼は神を讃美する歌を作つて口誦み、夫人の sketch をして夫人は自分にとつて angel であつたと云つた。又、死ぬ少し前 Blake は美しい顔になり、眼が輝き渡り、自分の見た天國の歌をうたひ出したと Gilchrist は書いてゐる。それは Beethoven が Vienna で病歿した 1827 年の八月十二日のことであつた。Blake の骸は遺言により、Bunhill Fields Cemetery の Blake 家の墓地に葬られた。

## II. BLAKE とその時代

想像的作家の數ある中に Blake 程多分に幻覺の賦質を享け、靈感に充ち満ちてゐたものはない。彼は洵に生れながらの神秘主義者、熾なる靈感の陶醉に一生を委ねた奇特異風な作家であつた。かくて彼は、初めて神の幻像を自家の窓に見たと云ふ幼弱の頃から、天國の歌をうたつて死の到來を迎へた臨終(暁)の際(晝)に至るまで、常に「想像の世界」(world of imagination) に棲み、屢々奇異なる幻像をば靈感を以て詩畫に表現したのであつた。さうして彼の職とした彫版印刷が彼に糊口の資をすら齎さず、屢々彼を極度の窮乏に陥れたのも、又彼が永い間世人に理解されず、少數の知己以外の者には狂人の如く視なされてゐたのも、皆彼の異常な幻覺乃至靈感のためであつた。さうして又彼の外的生活が苦惱失敗の連続であつたに拘らず、



彼の内心は常に歡喜に輝き、希望に充ちてゐたのも、又彼の作物が常人の理解を超えた奇異晦澁な象徴に充ちてゐるのも、はた又最近熱心克明な研究家の努力によつて彼の作物の包藏する偉大な豫言的、啓蒙思想が闡明せられ、今や詩畫兩藝術の稀世の天才として彼の聲譽の年と共に加はりつゝあるのも亦一に彼の異常な幻覺乃至靈感のために他ならない。

洵に Blake の幻覺は異常なものであつた。彼は靈感の刹那に、恰も實在する物體を見るが如く明確に、種々の幻像を實際見たのであつた。この幻覺の強さ乃至明確さに於て Blake を凌駕する作家はない。Bunyan や Addison や、De Quincey や、Shelley や、馬琴や、幻覺を取扱つた作家は古來尠くないけれども、彼等は皆自己の腦裡に湧き起つた想像を投射し、表現したのみで、Blake の如く、實際外界に目睹した形象を描いたのではない。又 *Inferno* の Dante 乃至は *The Raven* や *Ligeia* の Poe ですらも、異常な、優れた作家ではあるが、やはり潑刺たる想像力が彼等の腦裡に催起した白日夢を叙べたに過ぎない。而もこの異常な幻覺は、Blake にあつては、熱病患者の幻覺の如き病的現象でもなく、狂氣でもなかつた。彼は心身共に強健であつた。彼はいつも平靜な状態に於て幻像を見たのであつた。さればこそ彼はさうした幻像に對つて寫生の繪筆を走らせ、その dictate したと云ふ言葉を即座に記録することも出来たのである。

この Blake の幻覺は或は想像力の逞しい愛蘭人の血が彼の血管の中を流れてゐたためであつたかも知れぬ。而もその幻覺は、前言の如く彼の全生涯を支配し、且年と共に強さを増し、明確になり、やがて彼の性格、思想、乃至藝術を形づくる基本力となつたのである。夙に四歳の時、彼は自家の窓に神の顔を見て驚きの叫びを擧げたのであつた。又その後數年彼は自家の近くの野原に豫言者 Ezekiel の休んでゐるのを見たと言つて母に打たれたことがある。又その頃彼は大勢の天使達が木蔭に集ひ、歌をうたひながら燦爛たる翼を動かしてゐるのを見た。又十四の年に彼が Ryland と云ふ彫版師の徒弟にされようとした時、彼はその彫版師が懸て絞刑に處せられる人相の男だと云つてその門に入るのを肯じなかつたが、十二年の後 Ryland は、Blake の言つた通り、重罪を犯して絞刑に處せられたと云ふ話も傳はつてゐる。又愛弟 Robert の死後彼は屢々その幻像を見、更に Robert の靈が夢に現れ、彼の“illuminated printing”と呼んでゐた腐蝕彫版術を彼に授けてくれたと云ふ。かうした幻覺は彼が成長し結婚した後にも屢々現れ、Blake を神の如くに尊敬してゐた従順貞節な Blake 夫人をして Blake の唯一の缺點は幻覺だと嘆ぜしめた程であつた。而も思想が發達し、讀書の範圍と深さとが増すにつれて、この幻覺は益々頻繁に起る様になり、又益々精細、明確なものとなつた。即ち彼の幼時に見た神其他の幻像に就ては何等精細、



明確な叙述や報道が傳はつて居らず、又初期の詩集に歌はれてゐる Phoebus や、雲間の童子や、迷ひ兒を救ひ給ふ神やが尙漠然たる幻像に過ぎないのに、*Memorable Fancies*, *Milton*, *Jerusalem* 其他後期の作品に描かれてゐる幻像は奇異ではあるが、驚くべく精細であり、明確である。思ふに Blake 天稟の ideality (想像力) が彼の知識觀念に形態を與へてかかる幻覺を現じたのであり、その幻覺が Bible や、Swedenborg や、Boehme やを読んで Blake の神秘的知識の増すと共に益々精細明確なものとなり、終に彼をば常人の追隨を許さぬ神秘主義者たらしめ、難解な象徴作家たらしめたのであらう。

Blake は觀念論の哲學者と同じく此世を幻影と觀、現象界の事物をば永劫不變不可見の力又は精神の所現であると信じた。彼は森羅萬象にこの力を見、この精神を感じた。而も彼は、哲學者とは違つて、常に之を象徴的幻像によつて見かつ感じたのである。即ち彼は孟夏の太陽に火の車に乗つて天空を驅馳する Phoebus の幻像を見、晨の星に、「約百記」の作者と共に、天使の合唱を聞いたのであつた。Blake にとつて幻影に過ぎない現世の事物に對する執着は死を意味した。而してこの果敢ない現世の事物に對する執着を斷ち、「想像」(Imagination) によつて現象の牢獄を離脱し、永劫實在の世界、神に參入し、同化するのが彼の信念に於ける永生であつた。かくて彼は

常に「想像」を讚美高調し、人間の感覺的生活の結果に過ぎない「理性」(Reason) や、自然科學や、自然宗教や、其他すべて想像の活動を阻礙し、精神の自由を束縛する物質的、具體的の思想や、法則や、制度やを非毀し排斥したのである。

この「想像」こそは Blake の性格、思想、乃至藝術の核心を作すものである。隨てこの彼の所謂「想像」を理解することは Blake 研究の全部ではないが、最も重要な部分でなければならぬ。吾々も後段之に就て若干の考察を試みるであらう。併しながらその前に Blake の幻覺の賦質を助長し、彼を異常な神秘主義者たらしめ、かの偉大な、啓蒙的、象徴的作品を成さしむるに至つた、彼の milieu 乃至時代に就き、佛蘭西の評家に倣つて、少しく叙べなければならぬ。

Blake は 1757 年に生れ 1827 年に死んだ、而して彼の主要作物は 1782 年乃至 1803 年の更に書かれた。即ち彼は十八世紀の末から十九世紀の初へかけての作家である。この時代は佛蘭西革命の起つた時代であり、自由思想の英國に復興した時代である。文學界に於ては形式的な古典主義の mannerism が行詰つて奔放な浪漫主義の運動の起り始めた時代である。要するに Blake の時代は全歐洲が人間精神を形式、因襲の專制より解放して自由の世界を回復しようともがいてゐた時代である。最も著しい知情相尅の時代、理性本能闘争の時期である。生來の浪漫主義者であり、「想像」の人であつ



た Blake がこの時代思想に共鳴し、助勢せられて、益々激しく理知や、形式や、因襲やを非毀するやうになつたのは當然のことである。次に各方面に互つて簡略にこの時代の概観を試みよう。

十七世紀以後歐洲は理性の時代となつた。十六世紀に於て頂點に達した Renaissance に顯現したやうな精神生活の光彩は最早見られなくなつた。すべてが爲し盡され、語り盡された觀があつた。かくして十八世紀は創造の時代ではなく、整理の時代であつた。さうして整理の時代の要求したものは夢でも想像でもなく、すべて理性の屬性である實際的知識、論理的精神乃至正確なる判断であつた。當時の藝術的、政治的、並に社會的生活は悉く理性に支配されるに至つた。先づ政治界に於てはルイ十四世が諸種の制度國策を確立し、各大臣を督して違算なき國內の管理を爲さしめ、英國に於ても國民は先づ君主專制の不合理を悟り、現行の憲法を制定して、徐ろに種々の改革を實現しつつあつた。宗教界に於ても同様の整理乃至改革が行はれつつあつた。最も合理的な「英國教會」(The Established Church of England) の教義は佛蘭西にも傳はり、政府は之を國民に強制し、英國に於ても同様「英國教會」派は他の總ゆる宗派を壓倒して榮えるやうになつた。

思想界も亦全然理性の支配の下にあつた。初めて十七世紀の末頃に唱道された「自然宗教」(Deism) は十八世紀に入つて益々盛にな

り、その支持者達は聖書に記されてゐる默示や奇蹟を否定し、自然界を支配する因果律に徳則を憑據せしむべしと主張した。又少しく溯つて十七世紀に Descartes や Locke は Bacon の思想を繼承して全然理性の基礎の上にその哲學組織を樹立したが、彼等の思想はまた十八世紀の哲學者に繼承された。最後に理性の無力を悟つて信仰の尊嚴を認めた Pascal も初めは熱心な理性の擁護者であつた。

次に文學界も同様の事情の下にあつた。Renaissance 時代の豊滿なる情熱、潑刺たる想像は今や全く跡を絶ち、Elizabeth 朝の詩人の快暢、素樸な聲調は最早聞かれなくなつた。理性がすべての作家の崇めかしづく守護神となり、思想様式の整頓諧和を眼目とする古典主義は總ゆる詩文より情熱と想像とをとり去つて了つた。Boileau と Pope は實にこの古典主義の代表的作家であつた。

かくして十八世紀の理性の支配は完全の域に達した。さうして理性の支配の下に發達の頂點に達した整頓と形式が、自然の理法により臆て衰頹の機運に向ふに及んで、人々は曩に完全至美のものと考へられてゐた法則や、社會制度や、政治組織や、思想やに缺陷を見出し、不満を感じ、不安の念を懐くやうになつた。人々は何とかして現在の状態を更改しなければならぬ、現在の状態を破壊してもよりよき状態を理性の基礎の上に、再建しなければならぬと思ふやうになつた。



かゝる思想の最も旺盛なのは佛蘭西であつた。哲學者は理性によつて人間の尊貴と平等とを説いた。Voltaire は迷信弊習を攻撃し、Montesquieu は總ゆる法則は論理を基礎とすと主張し、Rousseau は自然宗教の神觀を樹立し、新なる教育制度によつて人類社會を改造しようと試みた。革命を誘導した主要人物は皆論理主義者で、~~唯~~ 理的論據によつて自説を主張し擁護したのであつた。かくて佛蘭西革命は、云はば、十八世紀が、「理性」の時代が「理性」の神のために行つた最も盛んな祭典であつたのである。

英國に於ても論理精神は旺であつたが、善惡兩様の意味に於て舊家の觀ある英國の社界は Whig, Tory 二黨の政争其他些細の動搖を経験したのみで、竟に佛蘭西の如き大變動を見なかつた。

次に當時の英吉利の文壇を見れば Thomson, Gray, Collins, Crabbe, Cowper, Pope 等著名な詩人は居つたが、散文界は更に盛で、注意すべき作家が輩出した。Steele や, Addison や, Swift や, Defoe や, Richardson や, Goldsmith や, Smollett や, Sterne や, Fielding や, Sheridan や, Johnson や, 洵に多士濟々、而も世界的名聲を博した傑れた作家が尠くない。併しながら詩も散文も共に理性萬能の時代思潮に彩られて、形式の整齊、乃至機智諷刺が唯一の生命であり、二三作家を例外として、純眞や、精微幽玄な情感や、奔放な想像はどこにも見られなかつた。文學も亦邪道に陥つてゐた。

## P O E T I C A L

## S K E T C H E S.

By W. B.

L O N D O N :

Printed in the Year M D C C L X X X I I I.

*Poetical Sketches* (1783) の扉。



TO THE MUSES.

**W**HETHER on Ida's shady brow,  
Or in the chambers of the East,  
The chambers of the sun, that now  
From antient melody have ceas'd;

Whether in Heav'n ye wander fair,  
Or the green corners of the earth,  
Or the blue regions of the air,  
Where the melodious winds have birth;

Whether on chrystal rocks ye rove,  
Beneath the bosom of the sea  
Wand'ring in many a coral grove,  
Fair Nine, forsaking Poetry!

How have you left the antient love  
That bards of old enjoy'd in you!  
The languid strings do scarcely move!  
The sound is forc'd, the notes are few!

GWIN,



Blake が Elizabethan poets を思はせる優雅の調で「詩神に寄する」  
 (To the Muses) 歌を書いたのもかゝる事情の下に於ける詩歌の不  
 振を歎じたからであつた:—

“Whether on Ida’s shady brow,  
 Or in the chambers of the East,  
 The chambers of the sun, that now  
 From antient melody have ceas’d;  
 Whether in Heaven ye wander fair,  
 Or the green corners of the earth,  
 Or the blue regions of the air  
 Where the melodious winds have birth;  
 Whether on crystal rocks ye rove,  
 Beneath the bosom of the sea  
 Wand’ring in many a coral grove,  
 Fair Nine, forsaking Poetry!  
 How have you left the antient love  
 That bards of old enjoy’d in you!  
 The languid strings do scarcely move!  
 The sound is forc’d, the notes are few!”<sup>1</sup>

<sup>1</sup> Cf. *Poetical Sketches*.



『緑こきアイダの嶺を、  
 あるはまた東の國を、  
 古き日の歌の淪びし  
 打日さす東の國を、  
 また空を汝(第)さまよふか、  
 また遠き緑の野邊を、  
 颯颯と風吹きおこる  
 青空を汝さまよふか。  
 また海の底ひの岩を  
 ふみしだき、珊瑚の森を  
 さまよふか、今「詩」をすてて、  
 美しき九人の詩神(第2)。  
 なぜに汝むかし詩人の  
 汝に得し愛をば棄てし、  
 琴の糸今は緩みて、  
 歌の音苦しく乏し。』

併しながらかかる偏頗不自然な状態がいつまでも續き得よう筈はない。永く抑へられてゐた感情や想像は發現せずにはゐなかつた。

即ち文學界に於ける創造及び自由の精神は文學に於ては浪漫主義の運動に於て革命をなし遂げたのである。而して Blake は實にこの浪漫主義運動の先驅者の一人である。

併しながら、又、當時、かかる時代思潮に背反する思想や信仰の一方に行はれてゐたことを忘れてはならぬ。即ち Jansen 派の信者は頻りに奇蹟を行ひ、幻像を見、Mesmer や Cagliostro は奇術によつて一時 Paris 全市の人心を魅惑收攬し、sorcery や cabala や astrology が一般人士に信じられ、Saint Martin は Boehme を佛蘭西に紹介し、又自ら神秘的教義を説き、Swedenborg の神秘思想が英國に傳はつて屢々論議せられ多數人士は新なる福音の傳道者として彼を迎へ且尊崇した。かうした現象が理性萬能の十八世紀に生起したのは奇異なるが如くにして奇異でない。理性の専制はかかる反動的思想信仰を誘發し、想像と神秘とに飢ゑてゐた理性の時代が之を喜び迎へたのは當然である。

かかる環境が、時代精神が Blake の想像的賦質を刺戟し、助長して、彼を浪漫主義の詩人たらしめ、革命的思想家たらしめ、異常な神秘主義者たらしめたのである。さうして特に彼の賦質を助成したのは Swedenborg 及び Boehme の著作竝に聖書であり、彼の賦質に反對の刺戟を與へて之を益々助長したのは當代の唯物主義的時代精神であつた。さうして彼が屢々奇矯と思はれるまでに想像乃至本能



の讚美高調に熱心であるのも正に理性偏重の、唯物主義的時代精神に對する反動であつたことを忘れてはならぬ。

### III. BLAKE の「想像」

Blake 程矛盾の多い作家はない。彼の <sup>精神</sup>sanity を主張する人々も之を否む譯には行かない。柔和な仔羊を愛した彼はまた猛虎の威容に感歎の聲を發ち、愛を説き兵士を呪つた彼は戦争を偉大なる永劫の一部として肯定した。彼の作物は時には溪流鳥語の如く清澄可憐であり、時には又~~颯風怒濤~~の如く混亂悽愴を極めてゐる。洵に彼は大自然の如く矛盾に充ち、複雑であり、深刻である。彼を理解することは大自然を理解するに等しく困難である。殊に彼の作物の特色乃至彼の詩文に秩序次第なく象徴的に叙べられてゐる複雑深刻な思想を解明するのは猶更容易の業ではない。予は今この短い文章の中で彼の思想特色を委曲に論ずることを控へ、多くを讀者の味讀と判斷とに委せようと思ふのであるが、ただ彼の所謂「想像」(Imagination)に就て解説の數言を費したいと思ふ。何故ならばこの「想像」こそは Blake が生涯高調し、體驗し、體現した所のものであり、又實に、前言の如く、彼の思想藝術の基調をなすものだからである。

Blake の「想像」とは萬象の精神を感得することであり、<sup>物體</sup>至現象の内面の意味を讀むことであつた。古代希臘人が narcissus

に神々しい美少年を感得したのも、又 Shakespeare が “pale prim-roses, that die unmarried” (*Winter's Tale*, iv, 4) と云つたのも、又 Shelley が木枯に飛び散る枯葉を見て “pestilence-stricken multitude” (*Ode to the West Wind*) と歌つたのも、さては又 Blake が

“To see a world in a grain of sand,  
And a Heaven in a wild flower,  
Hold Infinity in the palm of your hand,  
And Eternity in an hour.”<sup>1</sup>

『砂子(さご)のうちに世界を見、  
野花のうちに天國を見る、  
掌(てのひら)のうちに無限を握り、  
一時のうちに永劫を握れ。』

と佛説に似た思想を叙べたのも皆この「想像」の所爲に他ならない。Blake はかかる「想像」をば “twofold vision” と呼び、常に自ら twofold vision の機能を失はなかつた。併しながら Blake の「想像」は往々にして threefold or fourfold vision の域に達し、物體や現象の内面的意味の中に、常人には見えない神秘の世界、神や天使の世界を見、更に之を支配する秘奥の力を見たのである。即ち彼は

<sup>1</sup> *Auguries of Innocence*, ll, 1-4.



1“ Now I a fourfold vision see,  
 And a fourfold vision is given to me;  
 'Tis fourfold in my supreme delight,  
 And threefold in soft Beulah's<sup>2</sup> night.  
 And twofold always,—May God us keep  
 From single vision, and Newton's sleep!”

[大意：—今自分には物が四通りに見え、物を四通りに見る力が自分に授けられてゐる。自分が愉悦の極に達した時物が四通りに見え、穏かなビユーラの夜半には三通りに見え、いつも二通りに見える。—願はくば神よ、吾等をして物を唯一通りに見ることからしめ、ニュートンの眠りに陥らざらしめ給へ。]

と云つて自ら彼のもつてゐた複雑な「想像」の機能を説明してゐる。さうして彼の作物の最も難解なのは彼がこの複雑な「想像」の機能を最もよく發揮した時である。

かくて彼の「想像」は吾々が同情、直覺、洞察、幻覺、理想主義と呼ぶ所のものを悉く包含する、廣汎複雑なる精神機能の謂であつた。さうしてこの「想像」を高調し、體驗し、體現した彼が之に對立する利己主義、論理的論議、具體的事實、物質主義を嫌忌し、「想

<sup>1</sup> To Thomas Butts (Oxford Blake, pp. 189-90).

<sup>2</sup> Beulah: ブレイク神話の夢の國.

像」を缺ける、彼の所謂「暗愚の人」(man of darkness) を非難し排斥したのは當然のことと云はねばならぬ。彼はまた「想像」の絶対永劫の性質を信じた。即ち彼はまた佛典の匂ひある言葉を以てかう云つてゐる：—

“The world of imagination is the ~~world of~~ eternity. It is the divine bosom into which we shall all go after the death of the vegetated body. The world of imagination is infinite and eternal, whereas the world of generation or vegetation is finite and temporal. There exist in that eternal world the eternal realities of everything which we see reflected in this vegetable glass of nature.”<sup>1</sup>

『想像の世界は永劫の世界である。それは吾々が皆肉體の滅後に歸適すべき神のみ胸である。想像の世界は無限永劫であるが生成流轉の現象の世界は有限にして束の間のものである。その永劫の世界には自然てふ現象の鏡に姿を寫してゐる總ゆるものの實體がある。』

さうして Blake の永生とは、前節にも叙べた通り、「想像」によつて現象の桎梏を逃れ、永劫不變の實在の世界、即ち神に參入し、同化することに外ならなかつた。

Boehme の思想に影響されたく思はれる彼の <sup>宇宙論</sup> cosmology に據

<sup>1</sup> Keynes, Yeats 等の Blake 集散文の部參照.



れば、宇宙は當初渾然として統一のあつたの生命の分裂して出来たものであり、人は差別を求め、一部をとつて全部と誤認し、種々の知識を個々獨立のものと思惟したがために渾然として統一ある宇宙の生命より分離し、墮落したのである。さうして自然は、即ち現在吾々の見るが如き實在精神の形式は萬物がその中心に收縮せんとする傾向、意識、乃至自我の凝縮の結果として生じたものである。*Prophetic Books* に現るる“Urizen”はかかる分離凝縮の状態、乃至理性の象徴であるが、この凝縮の結果人は個々別々の自我の殻の中に分離し、宇宙の精神と交通することが漸次困難になつて來た。かくして今日、多くの人々にあつて、最も劣等な機關である五官のみが自然界に於て役立ち、宇宙の神神に通ずる門戸として残されてゐるのである。

Blake の所信に據れば、かかる不自由暗愚の状態より人を解放するものは「想像」である。(Blake にとつて「想像」こそは至上絶對の實在であり、一切の差別を超越し、個體精神兩者の一如の體驗を得しむる偉大な力である。

この想像を完全に實現し得た時、人は固定凝結せる如き觀を呈してゐる外面的存在の蠱惑を逃れ、融通無礙の永劫の生命を感得し、總ゆる物體がその象徴として無盡の美を露し、玄奥の意義を齎すやうになつて來ると Blake は信じた。又彼の信念に従へば、人間にとつ

て肝要なのは節制、訓練、従順等の如き消極的の諸徳、乃至義務の觀念ではなくして、愛と理解とである。)人は『五慾を抑制したがために、乃至は又五慾なきがために天國に入るものではなく』(“Men are admitted into heaven, not because they have curbed and governed their passions, or have no passions,”—*Why Men Enter Heaven*),<sup>1</sup>『理解力を養へるがために』(“because they have cultivated their understandings”—*Ibid.*) 天國に入ることが出来るのである。さうして愛は理解に始まり、理解は實に想像に基く。世上屢々見る所の無慈悲、慘虐の行爲は皆想像なきに因る罪業である。さうして想像は人をして番に人間に同情を持たせるのみならず、又總ゆる動物と喜憂を分たしめる：—

“Each outcry of a hunted hare  
A fibre from the brain does tear.  
A skylark wounded in the wing,  
A cherubim does cease to sing.”<sup>2</sup>

『獵師に追はるる兎の聲に

心臓(心)の筋は張り裂く思ひ、

翼いためし空の雲雀に

天使は憂ひて歌をとどむ。』

<sup>1</sup> Keynes, Yeats 等の Blake 集散文の部参照。

<sup>2</sup> *Auguries of Innocence*, ll. 13—16.



かくてまた Blake の想像は、人をして義務心又は強制によらず内發的に病弱不幸の者の救助に赴かしむる、基督の説いた愛、同情、憐愍、慈悲の諸徳、乃至犠牲の教義と同じである。即ち彼はかう歌ふ：—

“For Mercy, Pity, Peace, and Love  
Is God, our Father dear,  
And Mercy, Pity, Peace, and Love  
Is man, his child and care.”<sup>1</sup>

.....

“Where Mercy, Love, and Pity dwell  
There God is dwelling too.”<sup>2</sup>

『それ慈悲と、憐愍と、平和と、愛は  
われらがみ父(♫)の神にして、  
慈悲と、憐愍と、平和と愛は  
神のめぐし兒、人間(♫)なるを。』

.....

『慈悲と、愛と、憐愍の棲むところ  
神もまた棲みたまふ。』

斯くの如く彼は善徳を聖視し、讚美したけれども、悪を全然排斥し、

1, 2 *Songs of Innocence, The Divine Image*, ll. 5-8, 19-20.

否定しようとはしなかつた。否彼は、他の深刻な神秘主義者と同じく、善と悪とは共に同じ神性の所顯であり、神と悪魔とは齊しく同一の力の二つの側面に過ぎぬと觀じた。茲に彼の想像の偉大さがあり、彼の思想の深刻さが見られる。曰く

“Without Contraries is no progression. Attraction and Repulsion, Reason and Energy, Love and Hate, are necessary to Human existence.

From these contraries spring what the religious call Good and Evil. Good is the passive that obeys Reason. Evil is the active springing from Energy.

Good is Heaven. Evil is Hell.”

『對立なければ進歩はない。牽引と反撥、理性と精力、愛と憎悪は人間の生存に必要である。

是等の對立から宗教家の所謂善惡が生ずる。善は理性に従ふ受動的のもの、悪は精力より生ずる能動的のものである。

善は天國。悪は地獄。』

彼の “Energy” とは本能的衝動又は情慾の意である。又曰く

“All Bibles or sacred codes have been the causes of the following Errors :—

1, 2 Cf. *The Marriage of Heaven and Hell*.



1. That Man has two real existing principles, viz. a Body and a Soul.
2. That Energy, call'd Evil, is alone from the Body; and that Reason, call'd Good, is alone from the Soul.
3. That God will torment Man in Eternity for following his Energies.

But the following Contraries to these are True:—

1. Man has no Body distinct from his Soul; for that call'd Body is a portion of Soul discern'd by the five Senses, ~~the chief inlets of Soul in this age.~~
2. Energy is the only life, and from the Body; and Reason is the bound or outward circumference of Energy.
3. Energy is Eternal Delight."

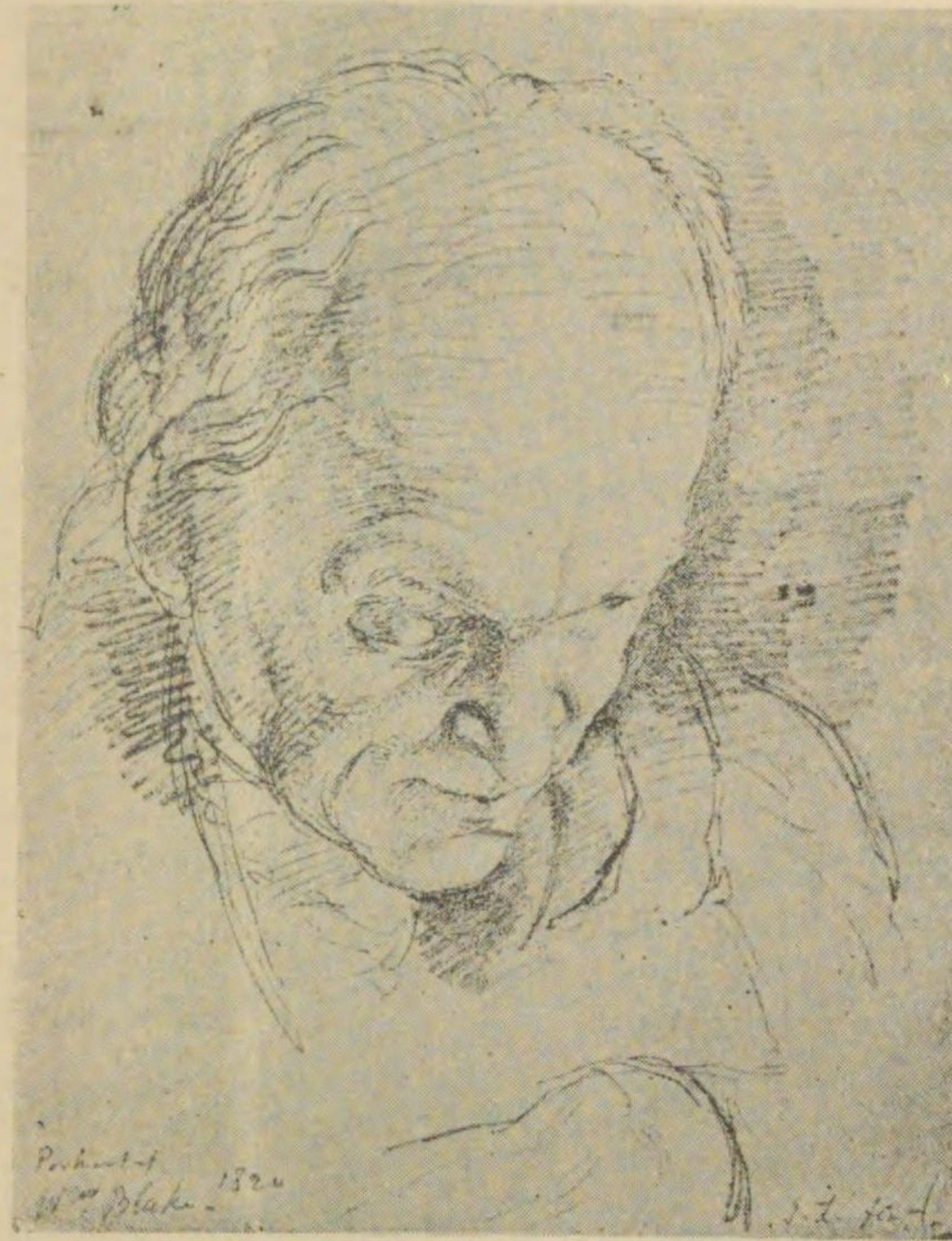
—*The Voice of the Devil.*

『總ゆる聖書聖典は次の誤謬の基(もと)となつた:—

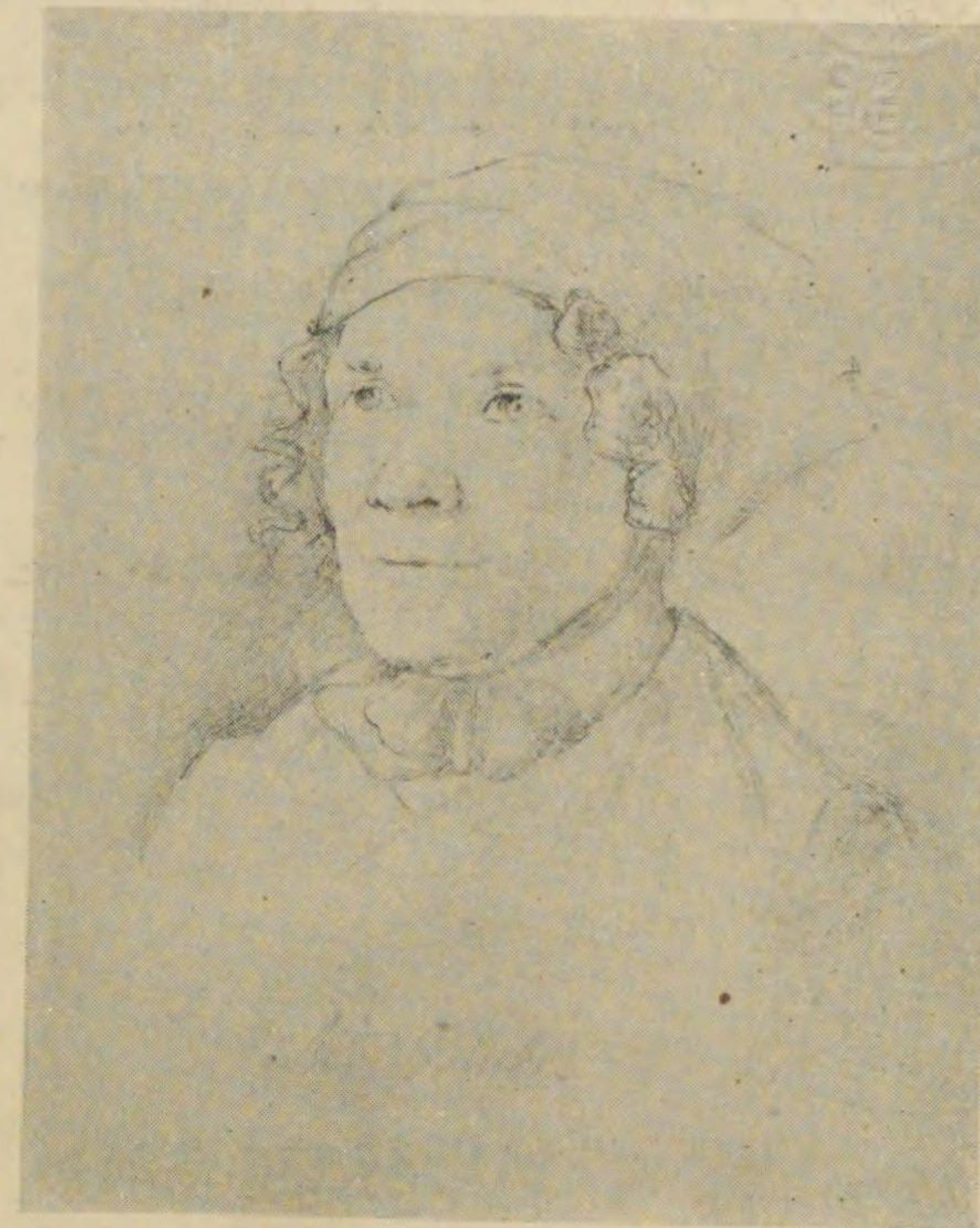
1. 人間には二つの原質、即ち肉體と靈魂とが實際あること。
2. 悪と呼ばれる精力は一に肉體に由來し、善と呼ばれる理性は靈魂に由來すること。
3. 精力を追求すれば永劫界に於て神の苛責に遭ふこと。

併しこれと反對の次のことは眞實である:—

1. 人間には靈魂と分離せる肉體はない。肉體なるものは現代に



Blake, by Linnell.



Mrs. Blake, by Tatham.



於ける靈魂の主要の入口である五官に依つて認知された靈魂の一部であるからだ。

2. 精力は唯一の生命であつて、肉體に由來する。さうして理性は精力の限界、乃至外圍である。

3. 精力は永劫の喜びである。』

是に由て之を觀れば Blake の「想像」は全き人間性を意味し、この「想像」を完全に實現し得た者は久遠永劫の人である。さうして絶えずこの意味の想像を高調した彼が屢々極端と思はるる迄に本能を讚美し、理性を非毀したのは——彼が理性を全然否定してゐたのでないことは前に引いた對立に關する文章によつても知られる——前段にも述べた通り、理性偏重の時代精神に對する反動であつたと觀なければならぬ。さうして又この意味の「想像」こそは總ゆる優れた思想藝術の精神である象徴主義の精神でなければならぬ。

#### IV. 年 表

- 1757. 十一月二十八日 William Blake 誕生。
- 1760. 三月二十日弟 John 誕生。
- 1762. 七月十一日弟 Robert 誕生。
- 1764. 一月七日妹 Catherine Elizabeth 誕生。
- 1765. 以後屢々幻像を見る。



1767. Strand の Pars' Drawing School に於て初めて繪を習ふ。
- 1768 (or 69). *Poetical Sketches* の詩を書き始む。
1771. Society of Antiquaries の engraver Basire の徒弟となる。
1773. Basire の命により Westminster Abbey の古碑を寫す。最初の版畫 'Joseph of Arimathea among the rocks of Albion' を作る。
- 1776 (or 77). *Poetical Sketches* の詩を書き終る。
- 1777 circa. 'The Passions' と題する詩他一篇を含む *Seven-Page MS.* 執筆。
1778. 徒弟期限満了。  
新に設立されたる Royal Academy の Antique School に入り Moser 指導の下に繪を學ぶ。間もなく退學。  
初めて水繪 'Penance of Jane Shore' を描く。
1779. J. Johnson 其他の書肆の需めにより版畫を作る。
1780. Stothard を識り其紹介によりて Flaxman を識る。  
同町に居住せる Fuseli に會ふ。  
初めて Royal Academy に出品。
1781. Polly (or Clara) Wood と云ふ 'a lively little girl' に戀し、棄てらる。  
Kew に行きて病を養ひ、寄寓せる植木屋 Boucher 家の娘

- Catherine に慰めらる。
1782. 八月十八日 Catherine Boucher と結婚。  
23 Green Street, Leicester Fields に初めて家を構ふ。  
Flaxman の紹介によりて Mrs. Matthew を識り、爾後暫くその「談話會」に出席す。
1783. Flaxman 及び Rev. Henry Matthew の出資によりて *Poetical Sketches* 印行。
1784. 六月父死亡。  
Mrs. Matthew の後援を得て舊の相弟子 Parker と共同にて 27 Broad Street に版畫店を開く。弟 Robert に繪及び彫版術を教ふ。
- 1784 circa. *Songs of Innocence* 中の初期の作を含む *An Island in the Moon* 執筆。
1787. 二月弟 Robert 死亡。  
版畫店を閉ぢ、Parker と別れ、28 Poland Street に轉居。
1788. 初めて腐蝕彫版術、彼の所謂 "Illuminated Printing" によりて版畫を作る。  
*There is No Natural Religion* 及び *All Religions Are One* 彫版(?)。
- 1788-9 circa. *Marginalia to Lavater's Aphorisms* (1768) 執筆。



Marginalia to Swedenborg's *Wisdom of Angels* (1788)

執筆.

*Tiriel* 執筆.

1789. *Songs of Innocence. The Book of Thel.*

1790 circa. Sketch-Book (Rossetti MS.) を用ひ始む.

1790. *The Marriage of Heaven and Hell.*

1791. *The French Revolution, Book the First* 書肆 Johnson に  
よりて製版(活字)さる.

1792. 九月母死亡. Thomas Paine に勧めて佛國に逃れしむ.

1792 circa. *A Song of Liberty.*

*Outhoun* 彫版(?).

1793. Sketch-Book を詩作用の手帳に用ひ始む.

*Visions of the Daughters of Albion.*

13 Hercules Buildings, Lambeth (今の 23 Hercules Road)  
に移轉.

繪本 *The History of England* 及び *For Children: The  
Gates of Paradise* 出版.

*America: a Prophecy.*

十月十日 Blake の店に出陳販賣中の繪の目録竝に趣意書

'To the Public' を物す.

1794 circa. 將來の patron Captain Thomas Butts を識る.

1794. *Songs of Experience. Europe: a Prophecy.*

*The [First] Book of Urizen.*

1795. *The Song of Los. The Book of Los.*

*The Book of Ahania.*

1796. Bürger の *Leonora* の挿繪を描く.

*Young's Night Thoughts* (1797) の挿繪及びその彫版に従  
事す.

1797. *The Four Zoas (Vala).*

1797-9. 版畫を依頼するもの無く、専ら水繪の製作に従ふ.

1800. Flaxman によりて Hayley に紹介さる.

九月 London より Felpham に移住す.

1800-3. Hayley のために種々の繪の製作に従事す.

*The Four Zoas* 改訂.

*Milton* 及び *Jerusalem* を書き始む.

1801-3 circa. *The Pickering MS.* 中の詩を書く.

1803. Hayley と感情の疎隔を來し、London への歸還を想ふ.

龍騎兵軍曹 Schofield と争ひ、八月國事犯の嫌疑者として逮  
捕さる.

1804. 一月上記國事犯事件の裁判あり、無罪の宣告を受く.



London に歸る。

Milton 及び Jerusalem の彫版に着手す。

1805. Blair の *The Grave* の繪を描く、之を買ひたる Cromek は約に背き Schiavonetti に彫版せしむ。

1806. 一月 Blake の記事を含む Malkin の *A Father's Memoirs of His Child* 出づ。

1806 circa. Cromek Blake の繪 'The Canterbury Pilgrims' を偷み見て類似の繪を Stothard に描かしむ。

1807. Stothard の 'Canterbury Pilgrimage' 展覽。五月 Blake 終に Cromek と絶つ。

1807-8. *Paradise Lost* の挿繪を描く。

1807-10. Rossetti MS. 中の epigrams を書く。

1808. 二月 Countess of Egremont のために水繪 'The Last Judgement' を描き上ぐ。

夏 Blair の *The Grave* の挿畫出版。その批評 Leigh Hunt の *The Examiner* 八月號に現る。

Marginalia to Reynolds' *Discourses*.

1808-9. *Barry: a Poem and Book of Moonlight* を書く (?)。

Milton の彫版完了。

1809. 五月乃至九月の更 28 Broad Street に自作繪畫の展覽會を

開く。

五月版畫 'The Canterbury Pilgrims' の解説を出す。

*Descriptive Catalogue*.

九月 *The Examiner* に展覽會の批評出づ。

1810. Rossetti MS. 中の原稿 "Advertisements to Blake's Canterbury Pilgrims from Chaucer containing anecdotes of Artists" (*Public Address*) 執筆。

十月 'The Canterbury Pilgrims' の版畫出版。

Rossetti MS. 中の原稿 'The Last Judgement' picture の解説を書く。

1810 circa. *The Everlasting Gospel. Gates of Paradise* 改版。

1811-7. 不明。

1812. *The Prologue and Characters of Chaucer's Pilgrims*.

1817 circa. *Laocoon, On Homer's Poetry [and] On Virgil* 彫版。

1818. 六月 Cumberland の紹介によりて Linnell を識る。

1819. Linnell の紹介によりて Varley を識る。

1820. 'The Last Judgement' の fresco の大作に着手す。

Thornton's *Pastorals of Virgil* の木版畫を作る。

Jerusalem の彫版完了。



1821. 3 Fountain Court, Strand に移轉。  
 1821 circa. Butts のために *The Book of Job* の挿繪(水繪)を描く。  
 1822. Royal Academy より二十五磅を寄贈さる。  
*The Ghost of Abel.*  
 1823. 三月 *The Book of Job* の寫しの水繪竝に版畫を Linnell に依頼さる。  
 1825. 三月 *The Book of Job* の彫版完了(翌年三月出版)。  
 十二月初めて Crabb Robinson に會ふ。  
 1825 circa. Tatham に會ふ。  
 1825-6. Linnell のために *Dante* の挿繪を描く。  
 1826. 二月乃至五月の更羅病。  
 1827. 八月十日歿す。  
 1831. 十月 Catherine Blake 死亡。

— 大正十四年二月 —





1821. 3 Fountain Court, Strand に移轉.

1821 circa. Butts のために *The Book of Job* の挿繪(水繪)を描く.

1822. Royal Academy より二十五磅を寄贈さる.  
*The Ghost of Abel.*

1823. 三月 *The Book of Job* の寫しの水繪並に版畫を Linnell に頼る.  
*THE MARRIAGE OF HEAVEN AND HELL, by Blake* の挿繪を依頼さる.

1825. 三月 *The Book of Job* の挿繪(水繪)を描く.  
十二月初めて Crabb Robinson に會ふ.

1825 circa. Tatham に會ふ.

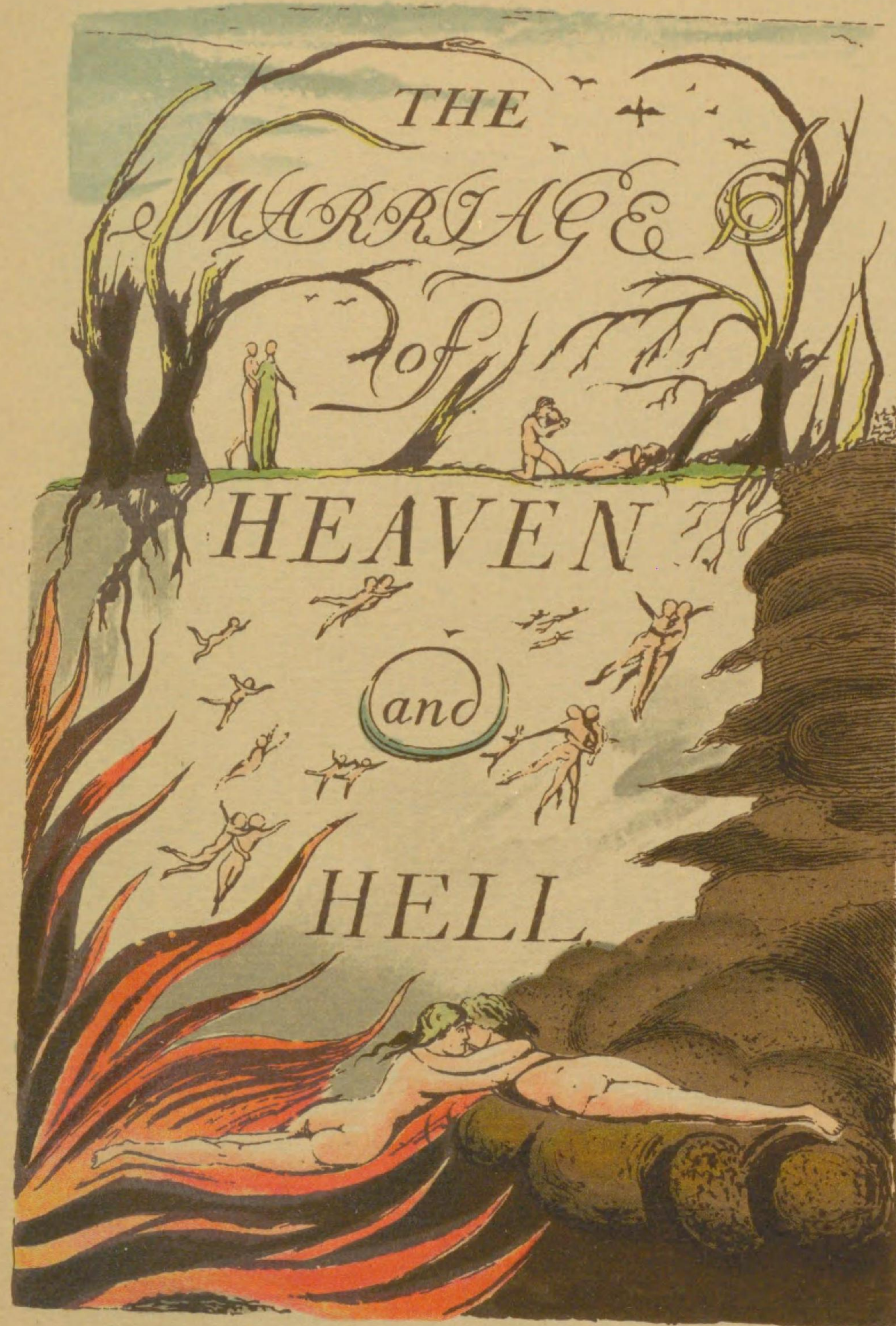
1825-6. Linnell のために *Dante* の挿繪を描く.

1826. 二月乃至五月の更羅病.

1827. 八月十日歿す.

1831. 十月 Catherine Blake 死亡.

— 大正十四年二月 —

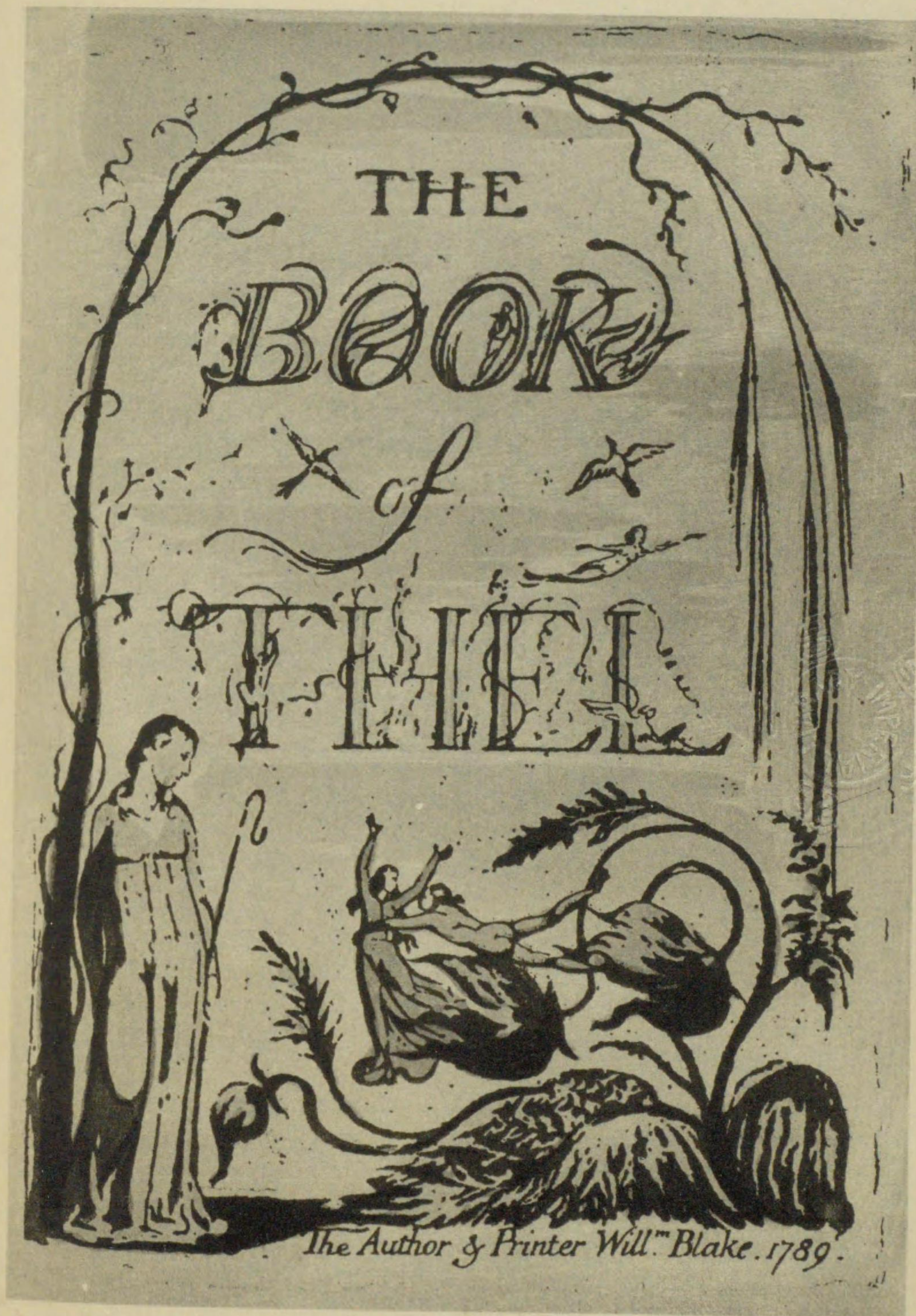








寫し參照。  
1789年の作。著者名不明。イギリスの地に  
THE BOOK OF THEE, by Blake の書。







FACSIMILE PAGE FROM JERUSALEM, by Blake.

1820年の作。浮彫刷版。Blakeの生涯及び思想並にBlakeの繪に就て参照。

Awakes me at sun-rise, then I see the Saviour over me,  
Spreading his beams of love, & dictating the words of this mild song.  
Awake! awake O sleeper of the land of shadows, wake! expand!  
I am in you and you in me, mutual in love divine;  
Fibres of love from man to man thro Albion's pleasant land,  
In all the dark Atlantic vale down from the hills of Surrey  
A black water accumulates, return Albion! return!  
Thy brethren call thee, and thy fathers, and thy sons,  
Thy nurses and thy mothers, thy sisters and thy daughters  
Tear at thy soul's disease, and the Divine Vision is darkened;  
Thy Emanation that was wont to play before thy face  
Beaming forth with her daughters into the Divine bosom,  
Where hast thou hidden, thy Emanation, lovely Jerusalem,  
From the vision and fruition of the Holy-one?  
I am not a God afar off, I am a brother and friend;  
Within your bosoms I reside, and you reside in me;  
We are one: forgiving all Evil; Not seeking recompense,  
We are my members O ye sleepers of Beulah, land of shades.  
But the perturbed Man awry turns down the valleys dark;  
Phantom of the over heated brain! shadow of immortality;  
Seeking to keep my soul a victim to thy Love, which binds  
Thou art the enemy of man into deceitful friendships;  
Jerusalem is not! her daughters are indefinite;  
By demonstration, man alone can live, and not by faith.  
My mountains are my own, and I will keep them to myself;  
The Malvern and the Cheviot, the Wolds, Pinnacles & Snowdon,  
Thy mine, here will I build my Laws of Moral Virtues;  
Humanity shall be no more; but war & principled & victory!  
So spoke Albion in jealous fears, hiding his Emanation  
From the Thames and Medway, rivers of Beulah: dissembling  
His jealousy before the throne divine, darkening cold!



1850年の作 管絃楽編曲。マンタの生涯及び  
 思想にマンタの繪に就て參照。  
 FACSIMILE PAGE FROM 'JERUSALEM', BY Blake.

4

\* Major o Jesus \*

# Jerusalem

Chap. I

*Of the Sleep of Ulro! and of the passage through  
 Eternal Death! and of the awaking to Eternal Life*

*This theme calls me in sleep night after night, & every morn  
 Awakes me at sun-rise, then I see the Saviour over me  
 Spreading his beams of love, & dictating the words of this mild song.*

*Awake! awake O sleeper of the land of shadows, wake! expand!  
 I am in you and you in me, mutual in love divine:  
 Fibres of love from man to man thro Albions pleasant land.  
 In all the dark Atlantic vale down from the hills of Surrey  
 A black water accumulates, return Albion! return!  
 Thy brethren call thee, and thy fathers, and thy sons,  
 Thy nurses and thy mothers, thy sisters and thy daughters  
 Weep at thy souls disease, and the Divine Vision is darkend;  
 Thy Emanation that was wont to play before thy face,  
 Beaming forth with her daughters into the Divine bosom,  
 Where hast thou hidden, thy Emanation lovely Jerusalem  
 From the vision and fruition of the Holy-one?  
 I am not a God afar off, I am a brother and friend;  
 Within your bosoms I reside, and you reside in me:  
 Lo, we are One; forgiving all Evil; Not seeking recompense,  
 Ye are my members O ye sleepers of Beulah, land of shades!*

*But the perturbed Man away turns down the valleys dark;  
 Phantoms of the over heated brain; shadow of immortality;  
 Seeking to keep my soul a victim to thy Love which binds  
 Man the enemy of man into deceitful friendships;  
 Jerusalem is not! her daughters are indefinite;  
 By demonstration, man alone can live, and not by faith.  
 My mountains are my own, and I will keep them to myself;  
 The Malvern and the Cheviot, the Wolds, Plunkinman & Snowdon  
 Are mine, here will I build my Laws of Moral Virtue,  
 Humanity shall be no more; but war & princedom & victory!*

*So spoke Albion in jealous fears, hiding his Emanation  
 Upon the Thames and Medway, rivers of Beulah; dissembling  
 His jealousy before the throne divine, darkening, cold!*



PITY, by Blake.

1795年頃の作。押繪。Shakespeareの次の句：

And pity, like a naked New-borne Babe,  
Striding the blast, or Heavens Cherubim, hors'd  
Upon the sightlesse Curriers of the Ayre,  
Shall blow the horrid deed in every eye,  
That teares shall drowne the winde.

—*Macbeth*, I, 7.

及び「ブレイクの繪に就て」参照。

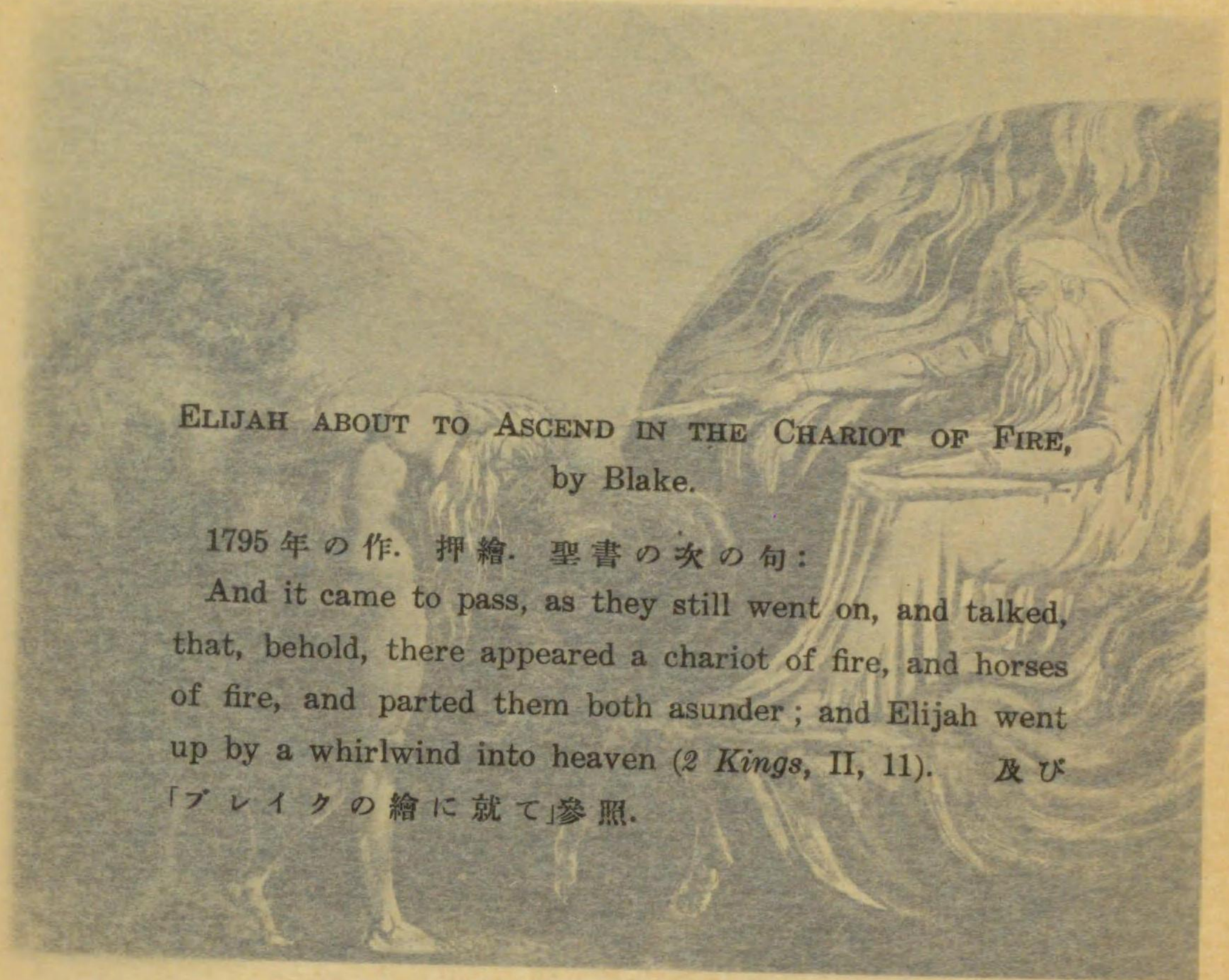
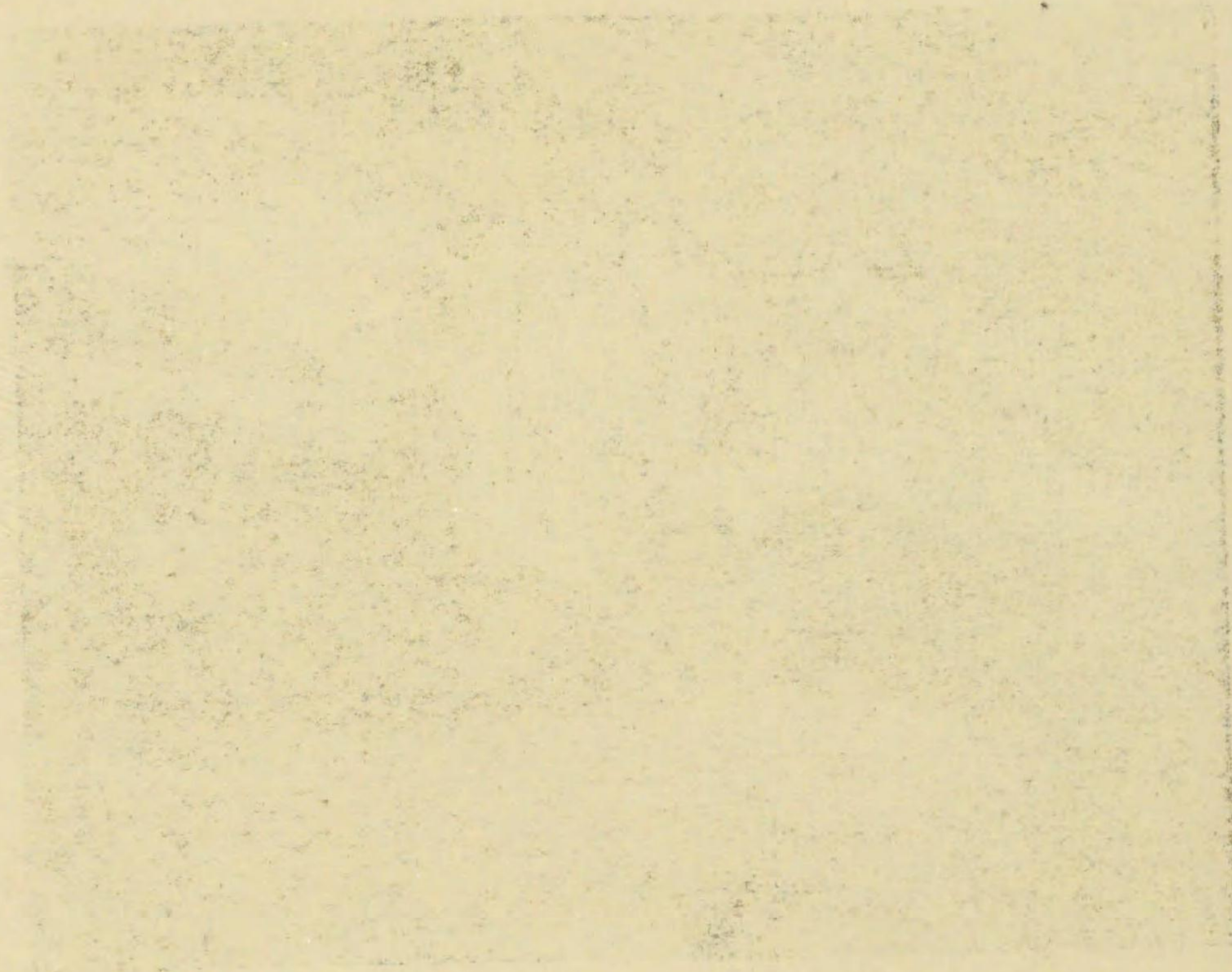


PITY, by Blake.  
 1795年頃の作。挿繪。Shakespeareの次の句：  
 And pity, like a naked New-borne Babe,  
 Striding the blast, or Heavens Cherubim, hors'd  
 Upon the sightlesse Curriers of the Ayre,  
 Shall blow the horrid deed in every eye,  
 That teares shall drowne the winde.  
 —Macbeth, I, 7.

及ウヰアソトマの繪に就テ参照。







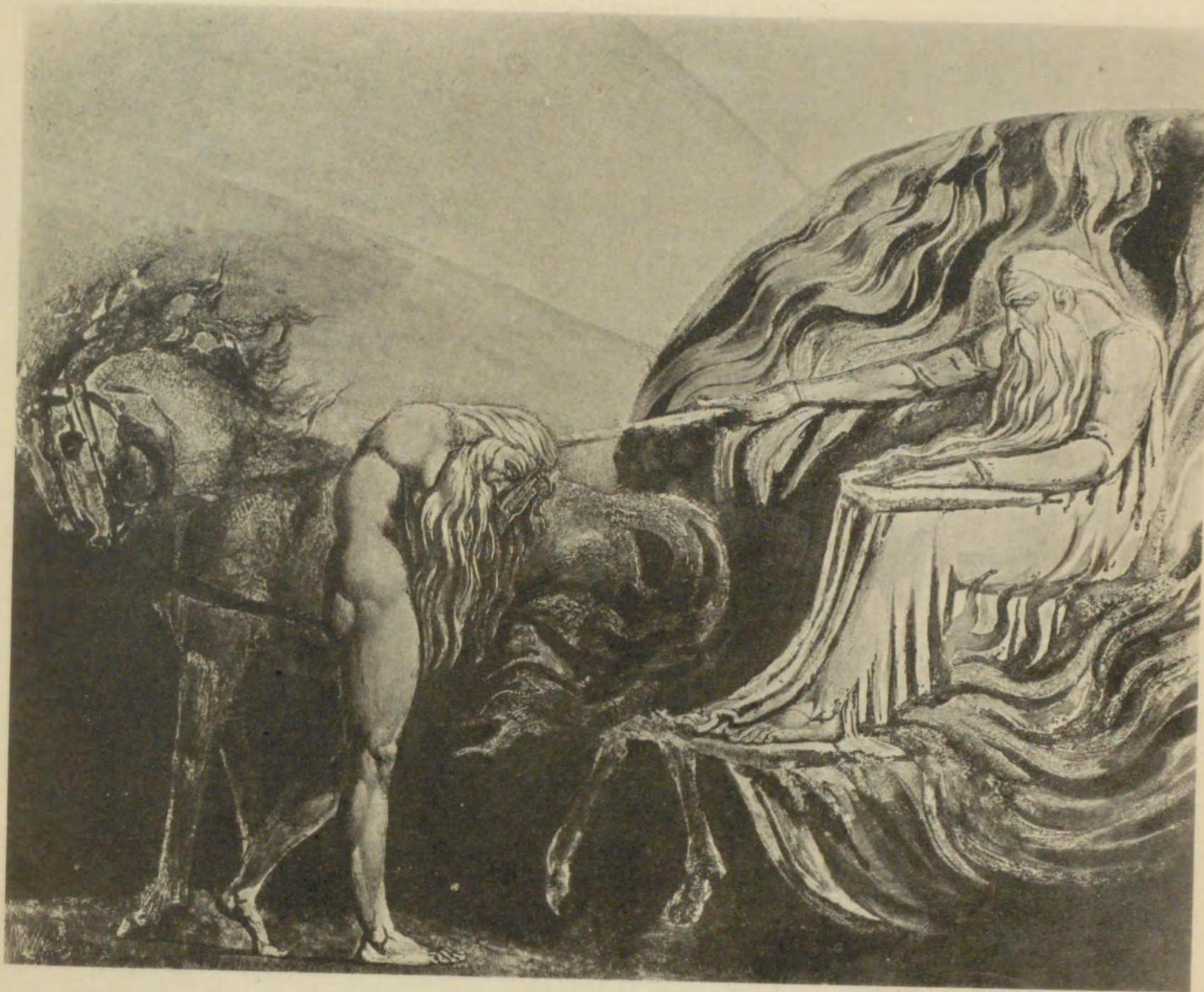
ELIJAH ABOUT TO ASCEND IN THE CHARIOT OF FIRE,  
by Blake.

1795年の作。押繪。聖書の次の句：  
And it came to pass, as they still went on, and talked,  
that, behold, there appeared a chariot of fire, and horses  
of fire, and parted them both asunder; and Elijah went  
up by a whirlwind into heaven (*2 Kings, II, 11*). 及び  
「ブレイクの繪に就て」參照。



ELIJAH ABOUT TO ASCEND IN THE CHARIOT OF FIRE,  
by Blake.

1795年の作。挿繪。聖書の次の句：  
And it came to pass, as they still went on, and talked,  
that, behold, there appeared a chariot of fire, and horses  
of fire, and parted them both asunder; and Elijah went  
up by a whirlwind into heaven (2 Kings, II, II). & c.  
ラントの繪に就て參照。





THE ANCIENT OF DAYS, by Blake.

豫言詩 *Europe: a Prophecy* (1794) の口絵、着彩浮彫腐蝕版畫。この繪の構想は舊約 *Proverbs*, VIII, 27: "When he prepared the heavens, I was there: when he set a compass upon the face of the depth," 及び Milton の次の句に由來する:

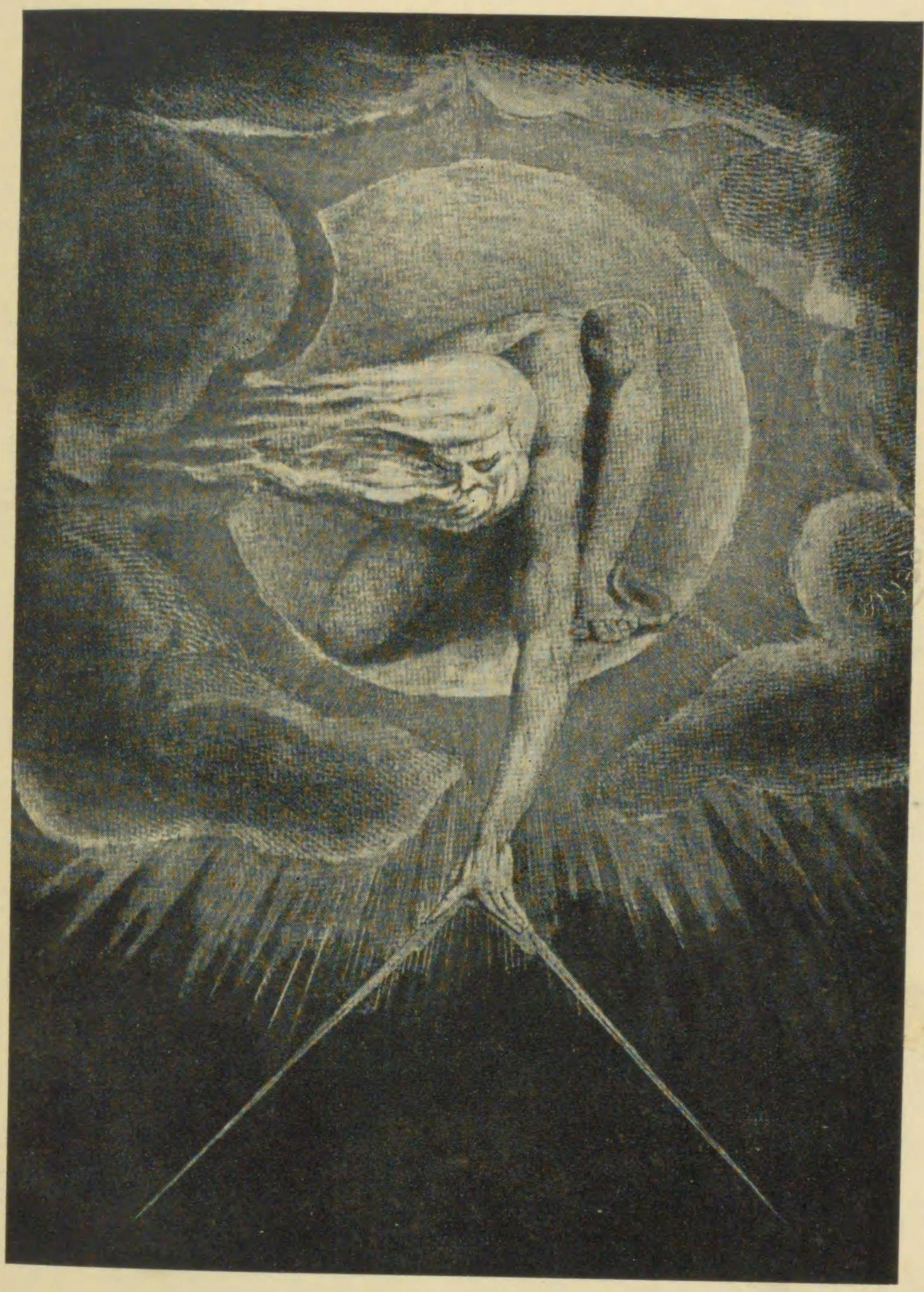
"He took the golden Compasses, prepar'd  
In God's Eternal store, to circumscribe  
This Universe, and all created things:  
One foot he center'd, and the other turn'd  
Round through the vast profunditie obscure,  
And said, thus farr extend, thus farr thy bounds,  
This be thy just Circumference, O World."

—*Paradise Lost*, Bk. VII, 225-231.

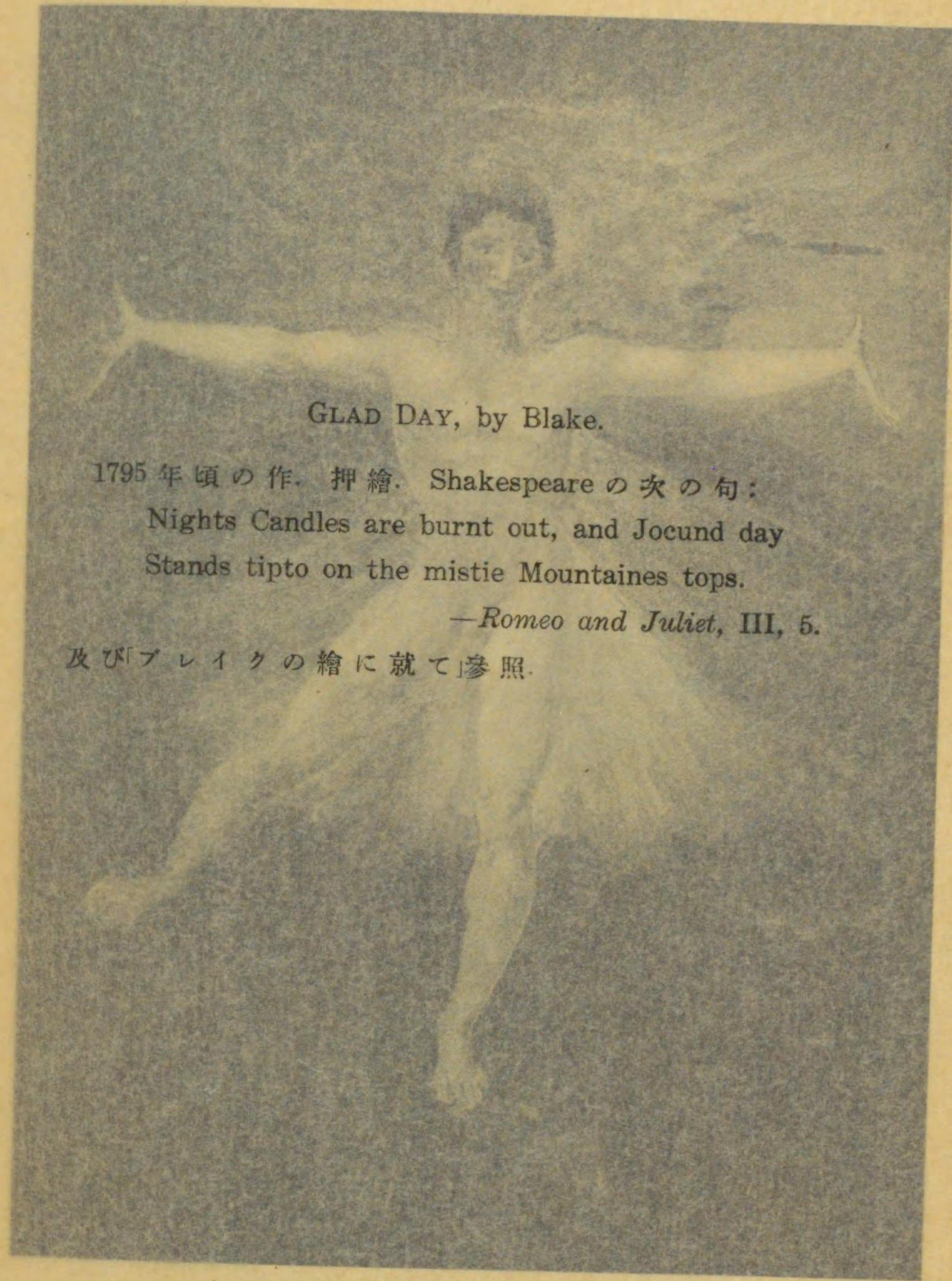
Blake は 1827 年 死の直前に同一構想同一様式の繪を物した。「ブレイクの繪に就て」参照。



事物は其の如く。1794年の繪に就て参照。  
 Blakeは1827年の直前に同一構想同一様式の繪  
 —Paradise Lost, Bk. VII, 225-231.  
 This be thy just Circumference, O World."  
 And said, thus far extend, thus far thy bounds,  
 Round through the vast profundie obscure,  
 One foot he center'd, and the other turn'd  
 This Universe, and all created things:  
 In God's Eternal store, to circumscribe  
 "He took the golden Compass, prepar'd  
 の文の如く由來する:  
 set a compass upon the face of the depth," 及び Milton  
 "When he prepar'd the heavens, I was there: when he  
 此の繪の構想は舊約 Proverbs, VIII, 27:  
 箴言詩 Ewrop: a Prophecy (1794) の口繪、蓋し容眼圖  
 THE ANCIENT OF DAYS, by Blake.







GLAD DAY, by Blake.

1795年頃の作。押繪。Shakespeareの次の句：  
Nights Candles are burnt out, and Jocund day  
Stands tipto on the mistie Mountaines tops.

—*Romeo and Juliet*, III, 5.

及び「ブレイクの繪に就て」参照。



又アノトマの繪に就て參照  
 —Romeo and Juliet, III, 5.  
 Stands tip-to on the mistie Mountaines tops.  
 Nights Candles are burnt out, and Jecund day  
 1795年頃の作. 神繪. Shakespeareの次の句:  
 GLAD DAY, by Blake.





## ブレイクの繪に就て

### I. はしがき

Blake は詩歌の世界と繪畫の世界とに同様に偉大な足跡を遺した特異な作家の一人である。彼は又、人の知る如く、自家の發明に係る Illuminated Printing (光華印刷) に依る彼の繪入詩集に於て詩畫兩藝術のいみじき結合を成就した。Rossetti や、Morris や、詩歌と繪畫とに同様に豊かな天分を馳せた優れた作家はほかにもあるが、終始一貫この二つの藝術に同様の愛と熱意とを捧げ、兩者を結合してかくも愛(め)でたき藝術の世界を創造し得た作家は Blake を措いて他にない。

Blake の繪畫は、彼の詩歌と同じく、洵に奇異であり、奔放である。彼の作物は、その構想到に於て、又運筆彫版の技巧乃至色彩に於て、常に獨創的であり、傳統に馴致された者には奇異狂暴の感を催さしめるもののみである。まつたく Blake 程傳統に係りの少い異常な作家はあるまい。寡聞な私は、數多き歐米の畫家中、僅に微かな流風の類似を認め得る Dürer, Redon, Böcklin, Moreau, Weirz, A.E., 及び晩年に於ける Blake の友人であり渴仰者であつた Calvert,



Palmer, Richmond 等一派の風景畫家以外、未だ嘗て彼に似た作家あるを知らない。まつたくかの宏莊、雄渾、深沈の風趣、乃至かの崇高靈妙の美に於て Blake を凌駕する作家は稀有である。

Blake は夙に畫才を露し、又自ら畫家 (painter) たるの志望を抱いてゐたが、1767 年十歳の時父は彼を Strand にあつた Mr. Pars の畫塾に送り、正式に畫を習はせることにした。そこで彼は頻りに古畫の臨寫をして修練を積み、傍ら當時人氣の無かつた Raphael や、Michelangelo や、Dürer や、Hemskerck などの版畫のいいのを安い値で買ひ集めた。彼の天才乃至眼識は既にこの頃から較著であつて、時代の好尚に左右される様なことは無かつたのである。併し父が彼に充分の學資を給し得なかつたため、彼は將來畫家たるの志望を棄て、金のかからぬ版畫 (engraving) の修業をすることにし、1771 年十四の年に當時名の知れてゐた James Basire と云ふ版畫家の徒弟となつた。Basire は専ら「好古家協會」(Society of Antiquaries) のために古碑や古代建築などの寫しを作つてゐた、堅い、情味の乏しい作風の版畫家であつたが、Blake は師の命により屢 London 市内及び近郊の古寺を訪ひ、古碑の彫像を寫し廻つた。Blake の繪の硬い感じ (rigidity) とゴシック趣味 (Gothicism) とは主として Basire のもとでかうして養はれたと云はれてゐる。

徒弟時代の Blake の版畫は多く Basire のために物し、Basire の

名で發表されたが、此頃の作で Blake の落款のある唯一の版畫「アルビオンの岩間に立てるアリマスニアのジョウゼフ」(Joseph of Arimathea among the Rocks of Albion, 1773) は Michelangelo の影響と Blake の Gothic 趣味の明白に表はれてゐる習作の一つではあるが、十六歳の少年の作とは思はれぬ驚くべき完成を示してゐる。

1778 年二十歳のとき徒弟期限の満了と共に Blake は永い間親切に彼を世話して呉れた Basire の許を辭し、新に設立された Royal Academy の Antique School に入り、その Keeper をしてゐた Moser と云ふ瑞西系の裝飾畫家の指導を受けて再び畫道の修業を始めたが、意に満たぬふしがあつてか、間もなく退學して了つた。Blake が畫道に於て一家を成すに至つたのは丁度此頃である。即ち 1778 年には水彩畫「ジェーン・ショーアの悔悟」*Penance of Jane Shore* を描き、翌 1779 年以後には Johnson, Harrison 等の書肆の需めにより屢々挿繪用の版畫を作り、1780 年には當時既に名の出てゐた Stothard, Flaxman 等の畫家と相識り、Royal Academy に出品もした。又想像的乃至象徴的畫家としての Blake の生涯の發端と見らるる「嬉しき日」*Glad Day* (line engraving) が出來たのも同じ 1780 年であつた。

爾後 1827 年 *Dante* 畫譜の製作半ばにして他界するまで Blake は詩作と共に版畫、水彩畫、テムペラの製作を續け、時によつて消



長はあつたけれども、絶えず新生面を開展し、完成の域に進出しつ  
つあつた。彼が油絵を試みなかつたのは恐らく経済的理由からであ  
つたらうと云はれてゐる。

最初 Blake は専ら版畫の製作に従つてゐたが、不評判に終つた  
Young の挿繪 (“Illustrations to Young's Night Thoughts”) の出版  
された 1796 年から「約百記圖説」 (“Illustrations to the Book of  
Job”) の彫版に着手した 1823 年に至るまでは目ぼしい engraving  
の作が殆どなく、専ら水彩畫の製作に従事してゐた。併し彼の所謂  
illuminated printing に依る自作詩篇の製作は始終之を續けて止め  
なかつた。以下彼の試みた種々の畫法を逐次例を擧げて説明しよう。

## II. BLAKE の 版 畫

Blake の試みた版畫は

- (a) Engraving (低彫版畫),
- (b) Relief Etching, Coloured and Plain (着色及び未着色浮彫版  
畫),
- (c) Etching, ordinary method of etching in intaglio (低彫腐蝕  
版畫),
- (d) Stamped Drawing (押繪),
- (e) Engraving on Pewter, or Pewter Woodcut (白蠟版畫),
- (f) Wood Engraving, or Woodcut (木版畫),
- (g) Lithograph (石版畫),

の七種である。

### (a) Engraving (低彫版畫).

これは銅、亜鉛、鋼鐵等の平滑な板面に油煙と瀝青とを交ぜ合せ  
たものを塗つて ground を準備し、その上に graver (or burin),  
stipplegraver 等の彫刀を用ひて intaglio (低彫)の繪を刻み、普通  
の etching を印刷する時と同じ様に彫り込まれた部分に ink をつ  
け、他の部分についた ink を綺麗に拭ひ去つてから、豫め用意して  
置いた微に濕した印刷用紙を版の上に載せ、press にかけて凹んだ  
線の中の ink を件の用紙に附着させる方法である。これは千枚、二  
千枚、若くはそれ以上の多數の印刷にも堪へる方法で、從來多く名  
畫の複寫を作るのに利用されてゐたが、Blake はこれに依つて複寫  
のみならず優れた創作版畫を物した。Blake が Basire に就て學ん  
だのはこの版畫術で、この方法に依つて彼の作つた版畫には

“Glad Day, 1st State (1780).

Job, “What is man that thou shouldst try him every  
moment” (1793).

Ezekiel, “I take away from thee the desire of thine eyes”  
(1793).

Marginal Illustrations to Young's “Night Thoughts”  
(1796).

Mirth and Her Companions (circa 1815—1820).



*Illustrations to the Book of Job* (1825).

*Illustrations to Dante's Inferno* (1825-6).

其他多くの創作や複製がある。Blake が他の作家の原畫から作った複製の例になる作は前に挙げた徒弟時代の作に係る *Joseph of Arimathea among the Rocks of Albion* である。尙此他に Blake の原畫に據つて他の作家の彫版した作も澤山あるが、Malkin: *A Father's Memoirs of His Child* の口繪がその一つである。

原畫、彫版、印刷、共に Blake の手に成る創作版畫中最大の傑作はやはり彼が晩年の作に係る「約百記圖説」(*Illustrations to the Book of Job*) である。これは彼が彼の晩年の友人であり patron であつた Linnell の薦めによつて物した二十一枚の續物で、舊約に出てゐる patriarch Job の生涯の圖説である。Blake は夙に Job の生涯に深い興味を持つてゐたと見え、之より先既に二枚の Job の繪を描いて居るから、この大作の構想は Blake の心の中で既に業に熟してゐたものと思はれる。加之 Blake はこの版畫の製作に着手する前永い間彫刻刀を棄ててゐたためにもすれば形式的、空疎の弊に陥り易い以前の手法を離れ、自由、老熟の技巧の冴えを見せることが出来たのである。構想竝に手法に於て、Ruskin が Rembrandt 以上と評した Blake のこの深沈な「約百記圖説」を凌駕する版畫は少からうと思はれる。

(b) Relief Etching, Coloured and Plain (着彩及び未着彩浮彫版畫).

これは Blake の Illuminated Printing と呼んでゐた浮彫腐蝕版で、Blake の多くの詩集は此方法によつて印刷されてゐる。Blake はこれを愛弟 Robert の靈が自分に傳へたものと稱してゐた。従つて Blake はこの Illuminated Printing なる言葉を單に、普通用ひらるる如く、裝飾文字、裝飾的圖案を用ひてある、又は彩色を施した美術的印刷と云ふだけの意味ではなく、亡弟 Robert の靈のお告げ (Illumination) に依つて知るに至つた印刷と云ふ神秘的な意味をも含めて用ひてゐたに違ひない。これは先づ銅、亜鉛、白蠟等の金屬板の上に酸に浸されない或液體で文字や圖案をかき、次に之を、普通の etching を作る場合と同じ様に一定の時間適度の濃度の硝酸の中に漬して何もかいてない部分を腐蝕させ、ステロ版や日本の普通の木版と同じ様な浮彫板を作り、高い部分に ink をつけて紙に押す方法である。かうして作つた版から Blake は多く yellow ochre, green, reddish brown, blue, grey, 若くは black の印刷 ink を用ひて一色刷を印刷し、之に一々手で彩色を施すのが常であつた。前に云うた通り Blake は多くの詩集をこの方法で手づから製作した。圖案も、詩も、彫版も、印刷も、時には又彩色も、すべて同一人の手になる Blake の初版は愛でたくもまた床しき藝術的詩集であるが、之を作つた Blake の勞苦は想像以上であつたらうと思はれる。



Blake は又この方法で繪のみを印刷し、之に手づから彩色を施して Coloured Print (着色版畫) を作り、又 Stamped Drawings (押繪) と呼ばれる版畫と繪の中間に位する様なものも作った (後段その條参照)。

この方法で作られた Blake の詩集は一色刷 (plain) のものも傳つてはゐるが、多くは上記の方法で彩色してあり、後期のもの程彩色が丁寧であり綺麗である。又この方法による版畫は詩集の様に透明色のみならず不透明色も多く用ひてあり、普通の繪と變らない出来栄えのものもある。

併し茲に今日の Blake 研究者に尙疑問として残されてゐる問題はこの relief etching の製作に際して Blake の用ひた、酸に浸されない液は何であつたか、又此方法による詩集の製版に際して Blake は如何にして negative の、裏から見た文字を書いたかと云ふことである。この二點に關し Blake の残した文書も、又是迄出版された多くの Blake 文献も吾々に何等の手懸りをも供給して居らぬ。従て種の臆測が可能であるが、私は其道の専門家で、數多の Blake の作物を見、多年の研究を積んだ Laurence Binyon 氏が近業 Blake 版畫集に添へた立派な序文の <sup>のみに引用</sup> に引用した Percy Grassby 氏の推論をば恐らく最も事實に近いものであらうと考へる。それは bitumen powder (粉末ワニス) のごときを含む、容易に乾燥しない、一種の



*Plucking the Flower of Joy, by Blake.*

1577



濃厚な、ねばり氣のある ink を作り、之を pen につけて詩や繪をかいたのであらう、そして文字の場合は先づ紙に圖案と共に詩を書き、後之を銅板其他の金屬板にゼラチン版を作るときと同じ様に寫して negative の版下を作つたのだらうと云ふのである。(Cf. Bin-yon: *The Engraved Designs of William Blake*, pp. 14—15).  
この方法による版畫及び繪入詩集の例を擧げると——

*The Approach of Doom* [originally no title; sometimes called *An Awestruck Group Standing on a Rock by the Sea*] (circa 1787),

*There is No Natural Religion* (1788),

*Songs of Innocence* (1789),

*Songs of Experience* (1794),

*The Ancient of Days* (1827),

&c., &c.

(c) Etching, ordinary method of etching in intaglio (普通の彫蝕版畫).

この普通の腐蝕版は僅に二回

*The Book of Los* (1795),

*The Book of Ahania* (1795)

の製作に用ひただけである。

(d) Stamped Drawing (押繪).



これは A. G. B. Russell が Printed Drawing と呼び、*The Paintings and Drawings of William Blake* (1925) の著者 Darrell Figgs が Colour-printed Drawing と云ふまぎらばしい名称を與へた一種の版畫で、正に版畫と普通の繪との中間に位するものであることは前に述べた通である。此方法による同じ作物が Figgis の「ブレイク繪畫集」と Binyon の「ブレイク版畫集」の双方に出てゐるのはこのためである。これは普通人々が Monotype (近頃は版畫よりは活版印刷の monotype の方が餘計人々に知られてゐるが) と呼んでゐる方法で、金屬板又は厚紙の上に油繪具、水繪具、テムペラ繪具等で繪を描き、之を乾かぬうちに紙に寫しとるのである。Blake は多く millboard (厚紙) 又は relief-etching の一色刷の版畫の上に描いたらしい。この方法による版畫は繪具のつき工合が違ふので手で着色した版畫とはすぐ區別が出来る。尤もこの方法による版畫にも仕上の着色を手でしたもののあることは云ふまでもない。この種の版畫の例を挙げると――

*Illustrations to the Book of Thel* (1789),  
*Satan Exulting over Eve* (1795),  
*Glad Day* (circa 1795)<sup>1</sup>,

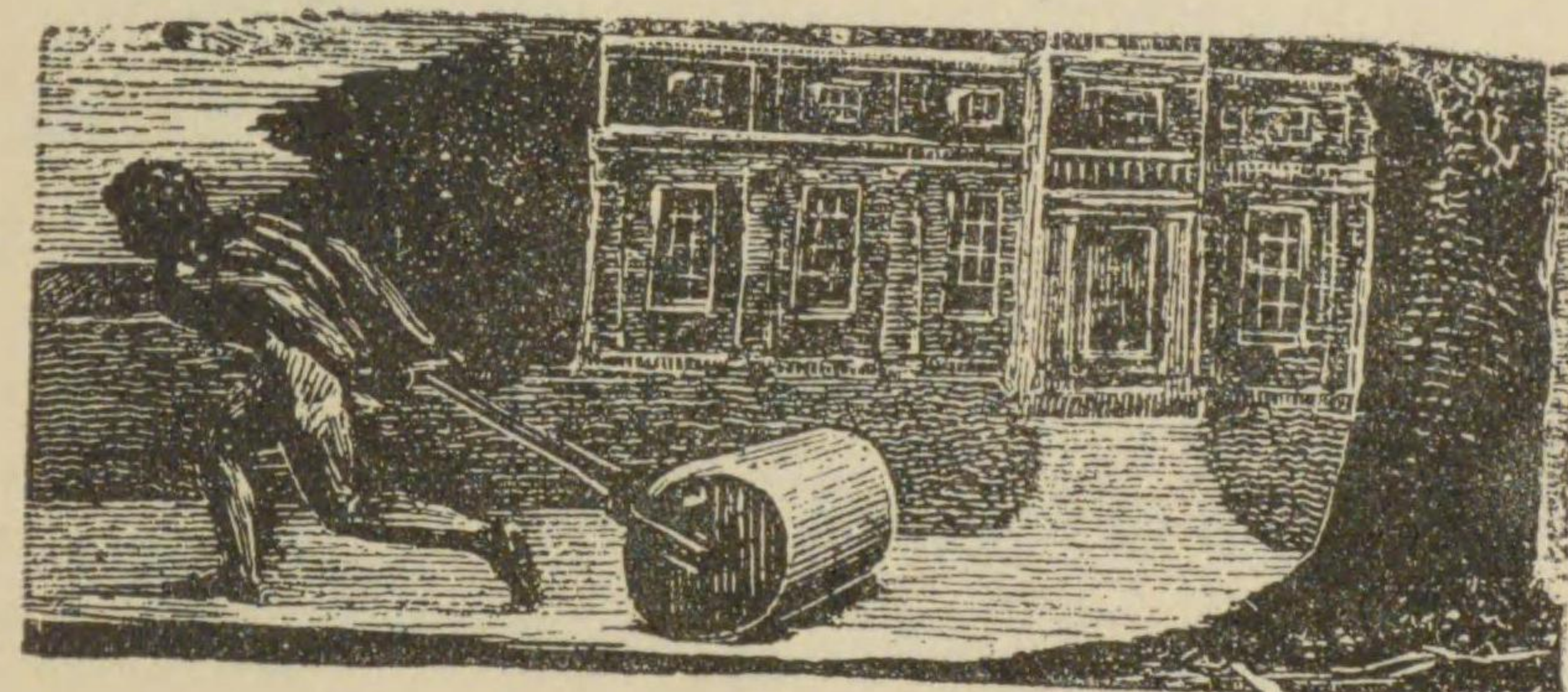
<sup>1</sup> Engraving の同じ題の作(1780)とは別に作つたものであることは Binyon の説の通りである。(Cf. Binyon: *The Engraved Designs of William Blake*, pp. 17-18).



i



ii



iii

From *XVII Designs to Thorton's Virgil*, by Blake.

- i. The Blasted Tree.
- ii. "A Rolling Stone," etc.
- iii. "For him our yearly wakes and feasts we hold."



*Elijah about to Ascend in the Chariot of Fire* (1795),  
*Pity* (circa 1795),  
*Hecate* (circa 1795),  
 &c., &c.

(e) Engraving on Pewter, or Pewter Woodcut (白蠟版畫).

これは次に述べる Wood Engraving と版の材料が違ふだけで全然同じ方法である。Pewter の板に彫刻刀で繪を刻るのであるが、print の白い部分を刻り込むのである。Blake はこれに relief-etching を加味した combined method をも時々用ひた。例：—

*The Little Tom the Sailor* (1800),  
*The Man Sweeping the Interpreter's Parlour* (originally without title; circa 1822).

(f) Wood Engraving, or Woodcut (木版畫).

これは (e) と同じ様に木板に彫刻刀で print の白い部分を刻り込む低彫版畫である。此方法を用ひたのは

*Illustrations to Thornton's Virgil* (1820)

だけである。Calvert, Palmer, Richmond 等 Blake 晩年の渴仰者は多くこの愛すべき木版に牽きつけられ、影響されたのである。

(g) Lithograph (石版畫).

Blake は唯一度

*Job in Prosperity* (1807)



に於て之を試みてゐるだけである。1798年に石版術を發明した獨逸人 Aloys Senefelder が1800年に英國に來てこの印刷術を傳へたが、1803年その partner の P. André なるものが英國作家の石版畫を集めた *Specimens of Polyautography*<sup>1</sup> なる畫集を出版した。上記 Blake の石版畫はその中に入つてゐる。

以上の略解によつて讀者は Blake の試みた西洋版畫の種々の方法が版下かき、彫工、刷工の共同の仕事である我邦に榮えた浮世繪其他の普通の木版畫とは、製作の方法に於て、又出來榮えに於て、全然趣を異にするものなることを會得されたであらうと思ふ。色の印刷、殊に多くの ~~block (版)~~ によつて色を印刷することは、佛蘭西では可成古くから試みられてゐたが、Blake 時代の英國には未だ行はれてゐなかつた。従て、Blake はその版畫の製作に際して人の氣づかぬ苦心をし、種々工夫を凝らしたに違ひないと想はれる。

### III. BLAKE の繪畫

Blake が版畫と共に (a) 水彩畫、(b) テムペラ等を屢々試みたことは既に述べた通りである。尙 Blake の作の中に鉛筆畫や、鉛筆着色等もあることは云ふ迄もないが、其等零細の作は茲には省略し、

<sup>1</sup> 當時石版印刷術のことをかう云つてゐた。

彼が傑作を物した水彩畫とテムペラに就て少しく叙べて見よう。

(a) Water Colour (水彩畫)。

製作の方法は吾々の間に行はれてゐる水彩畫と變りはないから絮説を須ひない。Blake は (i) 種々の色を用ひた普通の水彩畫と (ii) sepia 其他單一の色で描く monochrome (單色畫) の兩者を試みてゐるが、*Dante* 畫譜 (版畫のための原圖) や、*Milton* 畫譜など多くの重要な作品は (i) の範疇に屬する。Blake の此種の繪畫の技巧的特色は神秘、莊嚴、宏大、深沈の風趣を強める blue, brown, yellow, orange, red 等の單色がいつも基調をなしてゐること<sup>1</sup>と、精神的な、鋭い、力の籠つた筆勢とである。

Blake の水彩畫の例を擧げると――

(i) *Jacob's Ladder* (circa 1800),

*The River of Life* (circa 1805),

'*Paradise Regained*' Series (1807 or 1808),

'*Paradise Lost*' Series (1808),

'*Hymn on the Nativity*' Series (1809),

'*Comus*' Series (1810),

*The Wise and Foolish Virgins* (1822),

*Paolo and Francesca in the Whirlwind of Lovers* (circa 1825), &c., &c.

<sup>1</sup> これは Redon や A. E. の繪も同じである。



- (ii) *The Death of Ezekiel's Wife* (circa 1792),  
*The Complaint of Job* (circa 1792),  
 &c., &c.

(b) Tempera or Tempora (テムペラ又はテムボラ)。

Blake は fresco painting の復活を企圖し、Tempera を屢々試み、多くの佳作を残した。Tempera は不透明の顔料に chalk (白堊)又は clay (粘土)を交ぜ合せたものを size (膠水)に溶き、之を用ひて描く一種の畫法で、fresco に似て居る。Fresco は濕つた mortar (塗灰)か plaster (石膏)の地の上に描くが、Tempera は乾いた地の上に描く。兩者の相違はただそれだけである。この畫法による作の例を擧げると――

- Eve Tempted by the Serpent*, tempera on copper (circa 1799),  
*Satan Smiting Job with Sore Boils*, tempera on mahogany panel (circa 1799),  
*The Nativity*, tempera on copper (circa 1800),  
*The Infant Jesus Riding on a Lamb*, tempera on canvas (1800),  
*Satan Calling up his Legions*, tempera on canvas (circa 1808),  
*Nelson Guiding Leviathan*, tempera on canvas (before 1809),

- The Ghost of a Flea*, tempera on panel (circa 1820),  
 etc., etc.

最後に別項「Blake 研究圖書解題」には漏れてゐるが Blake の版畫の研究に際して有益な Hind の著書を附記してこの稿の筆を措く――

Arthur M. Hind: *A History of Engraving & Etching from The 15th Century to the Year 1914*, being the third and fully revised edition of "A Short History of Engraving and Etching." Constable and Co., London, Bombay, Sydney. 1923. (Price £2-2-0).

―― 昭和二年十一月 ――



## ブレイクの片影

### I

想像的作家の數ある中に我が William Blake 程多分に幻覺の賦質を享け、靈感に充ち満ちてゐたものはあるまい。彼は洵に生れながらの神祕主義者、熾なる靈感の陶醉に一生を委ねた奇特異風な作家であつた。初て神の顔を幻に見たと云ふ幼弱の頃から天國の歌をうたつて死の到來を迎へた臨終(臨終)の際(終)に至るまで、彼は常に靈感の世界、「永劫の榮光」のなかに生きてゐた。彼は彫版を職とし、傍ら詩と繪とをかいたが、彼の外的生活は失敗の連続であつた。彼は常に貧窮に苦しみ、時世の容るる所とならず、憐人知友にさへも誤解され、狂人の如く視なされてゐた。而も尙彼は内心常に光明に充ち、窮乏の中にあつてなほ幸福であつた。蓋し彼は天稟の想像的賦質によつて普通人の知らない「永劫の歡喜」に參ずることを得たのである。

彼もまた Swedenborg や Boehme の如く、云はば天界高く昂揚して、下界よりの架梯を取り去つて了つた神祕主義者、Emerson の所謂「永久に自然界に降下することを禁じられてゐる人々」の一人であつた。生時及び死後永い間彼を眞に理解する者のなかつたのは、

彼の高调し、生棲してゐた世界が、常人の知らない、遠離特異の世界であつたからである。而も彼は、かくの如き孤獨と窮乏の中にあつて、尙、彼に憐愍慰藉の言葉をかけてくれたロレンス等の通俗畫家を嗤笑して昂然として云ふのであつた、「彼等は私に同情を寄せてくれるが、當に憐れむべきは彼等だ。私には幻覺と平和とがある。併し彼等は天賦の財産を一食の肉羹と交換した」と。彼は屢々靈感に酔うて歡喜し、歡喜の中にその作をものしたのであつた。彼の作品は零細なる「無心の歌」の小曲より「豫言書」の長篇に至るまで、又簡単な線描より精細な大作の版畫に至るまで、すべて皆かかる靈感の刹那にかき、又はかき續けた彼の精神生活の記録に他ならない。彼はその傑作「ジェルーサレム」(Jerusalem) についてみづからかう云つてゐる、「私はこの詩を一氣に十二行、また或時には二十行乃至三十行づつ何等の豫定もなく、意の赴くが儘にすぐ書きとつて書いた。だからそれを書くのにかかつた時間と云ふものはないことになる。かくして永い間かかつて書かれた様に見える長詩が、全く努力又は研究なしに出來たのだ。」洵に彼は常に靈感に生き、靈感を歌つた純正の詩人である。

### II

ここに Blake の詩及び散文について彼の思想一斑を考察するに

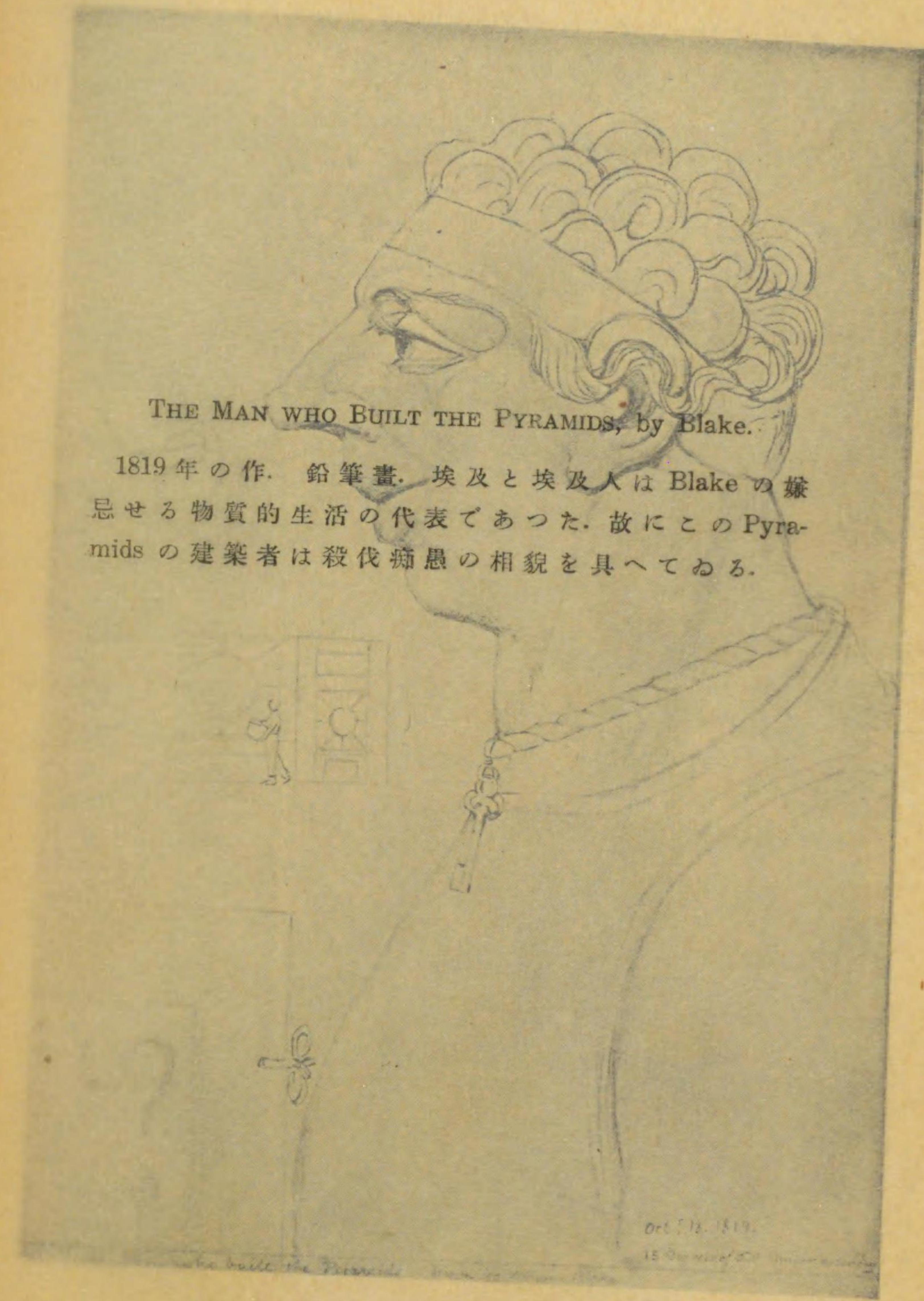


方り、彼の「想像」の教義より始めるのが適當であらうと思ふ。何故なればこれは彼の常に高調し、體驗し、體現したところのものであり、またこれこそは彼の思想藝術の源泉であり、基調をなすものだからである。

彼の「想像」(Imagination)とは吾々が同情、直覺、洞察、幻覺、理想主義と呼ぶものを悉く包含する廣汎なる精神機能の謂であつた。従つて之を信じ之を高調した彼がその對立たる利己主義、論理的論議、具體的事實、物質主義を嫌忌し、無視したことは云ふまでもない。彼の生涯は實に「想像」の讚美と俗人(俗人)即ち「想像」なき「暗愚の人」(man of darkness)<sup>1</sup>に對する嘲罵挑戰の生涯であつた。彼は「想像」の至上を信じ、「想像的藝術」は神の默示中最も偉大なものであると稱へた。彼はまた「想像の世界」は「吾々がうつせみの肉體の滅後に歸適すべき神のみ胸」であり、「現實の世界は有限束の間のものであるが、想像の世界は無限永劫である」ことを信じ、Platoと同じくこの「永劫の世界には現象の世界の鏡に姿をうつしてゐる總ゆるものの實體がある」<sup>2</sup>と信じてゐた。

Blakeの哲學に従へば、宇宙は統一ある生命の分裂したものである。彼は Boehme と共に信じた、人は差別を求め、一部をとつて

1, 2 及びその間の括弧内の引用句は Keynes, Yeats 等の Blake 集散文の部を参照せよ。



THE MAN WHO BUILT THE PYRAMIDS, by Blake.

1819年の作。鉛筆畫。埃及と埃及人は Blake の嫌忌せる物質的生活の代表であつた。故にこの Pyramids の建築者は殺伐痴愚の相貌を具へてゐる。



方り、彼の「想像」の教義より始めるのが適當であらうと思ふ。何故なればこれは彼の常に高調し、體驗し、體現したところのものであり、またこれこそは彼の思想藝術の源泉であり、基調をなすものだからである。

彼の「想像」(Imagination)とは吾々が同情、直覺、洞察、幻覺、理想主義と稱する、<sup>THE MAN WHO BUILT THE PYRAMIDS BY BLAKE</sup> 彼がその對立たる利己主義、論理的論議、具體的事實、物質主義を諷刺し、<sup>1819年</sup> 兼て其の對立たる利己主義、論理的論議、具體的事實、物質主義を諷刺し、<sup>1819年</sup> もない。彼の生涯は實に「想像」の讚美と俗人(俗人)の「想像」なき「暗愚の人」(man of darkness)<sup>1</sup>に對する嘲罵挑戰の生涯であつた。彼は「想像」の至上を信じ、「想像的藝術」は神の默示中最も偉大なものであると稱へた。彼はまた「想像の世界」は「吾々がうつせみの肉體の滅後に歸適すべき神のみ胸」であり、「現實の世界は有限束の間のものであるが、想像の世界は無限永劫である」ことを信じ、Platoと同じくこの「永劫の世界には現象の世界の鏡に姿をうつしてゐる總ゆるものの實體がある」<sup>2</sup>と信じてゐた。

Blakeの哲學に従へば、宇宙は統一ある生命の分裂したものである。彼は Boehme と共に信じた、人は差別を求め、一部をとつて

1, 2 及びその間の括弧内の引用句は Keynes, Yeats 等の Blake 集註文の部を参照せよ。





全部と誤認し、種々の知識を個々獨立のものと思惟したがために統一ある宇宙の生命より分離し、墮落したのであると。即ち「自然」は、現在吾々の見るが如き精神的存在の形式は萬物がその中心に收縮せんとする傾向、「意識」又は「自我」の凝縮の結果として生じたものであると彼は信じた。「豫言書」(The Prophetic Books) 中に現る「理性」(ウリゼン) 'Urizen' は Blake がかかる分離凝縮の状態を擬人したものであつて、常に物質、不透明、凝縮の性質を帯びもつてゐる。さうしてこの凝縮の結果、人は個々別々の「自我」の殻の中に分離し、宇宙の精神と交通することが困難になつてきた。かくして今日多くの人にあつて最も劣等な機能である五官のみが自然界に於て役立ち、宇宙の精神に通ずる門戸として残されてゐるのであると彼は信じてゐた。

Blake の所信によれば人をしてかかる不自由暗愚の状態を免るるを得しむるものは「想像」である。Blake にとつて「想像」は偉大至上の實在であり、差別を超越し、個體精神兩者の一如の體驗を得しむる力である。

かかる「想像」を完全に實現し得たとき人は一見固定せるが如き観ある外面的實在の蠱惑をのがれ、融通無礙の生命を感得し、總ゆる物體がその象徴として不盡の美と深甚の意義とを齎らすやうになつて來る。又彼の信念に従へば、人間に取つて最も肝要なのは、節



制、訓練、従順等の諸徳、乃至義務の觀念ではなくして、愛と理解とである。<sup>1</sup>「人はその情慾を抑制せるが故に、乃至は情慾を持たざるが故に天國に入るものではなくして、理解を養へるがために天國に入る」のである。而して愛は理解に基き、理解は想像によつてのみ得られる。世上屢々見る所の無慈悲残酷の行爲は皆「想像」無きに因る罪業である。即ち彼はかう歌ふ——

Each outcry of the hunted hare  
A fibre from the brain does tear.  
A skylark wounded on the wing,  
A cherubim does cease to sing.<sup>2</sup>

獵師に追はるる兎の聲に  
心の筋ははり裂く思ひ、  
翼いためし空の雲雀に  
天使はうれひて歌をとどむ。

かくて又彼の「想像」は人をして義務心又は強制によらず、内發的に弱者の救助に赴かしむる、基督の説いた愛、同情、憐愍、慈悲

<sup>1</sup> Keynes, Yeats 等の Blake 集散文の部参照。

<sup>2</sup> *Auguries of Innocence*, ll. 13-16.

の諸徳乃至犠牲の教義と同一物である。彼は更に是等の諸徳を聖視して次の様に歌つてゐる——

For Mercy, Pity, Peace, and Love  
Is God, our Father dear,  
And Mercy, Pity Peace, and Love  
Is man, His child and care.

Where Mercy, Love, and Pity dwell  
There God is dwelling too.

それ慈悲と憐愍と平和と愛は  
われ等のみ父(神)の神にして、  
慈悲と憐愍と平和と愛は  
神の愛兒(人)なるを。」

慈悲と愛と憐愍のすむところ  
神もまた棲みたまふ。

かくの如く彼は善徳を聖視し、讚美したけれども、「悪」をば全然棄捨排斥しやうとはしなかつた。否彼は、總ゆる深刻な神秘思想家と同じく、「善」と「悪」とは共に神聖な「神」の所顯であり、「神」と「悪魔」とは共に同一の「力」の異なる側面に過ぎないと考へた。



曰く——

Attraction and Repulsion, Reason and Energy, Love and Hate, are necessary to Human existence.

From these contraries spring what the religious call Good and Evil. Good is the passive that obeys Reason. Evil is the active springing from Energy.

Good is Heaven. Evil is Hell.<sup>1</sup>

「牽引」と「反撥」, 「理性」と「精力」, 「愛」と「憎悪」は人間の生存に必要である。

是等の對立から宗教家の所謂「善悪」が生じる。「善」は理性に従ふ受動的のもの, 「悪」は「精力」より生ずる能働的のものである。

「善」は天國, 「悪」は「地獄」。

彼の所謂「精力」とは恐らく情慾の意であらう。又曰く——

All Bibles or Sacred codes have been the causes of the following Errors:—

1. The Man has two real existing principles, viz. a Body and a Soul.
2. That Energy, call'd Evil, is alone from the Body; and that Reason, call'd Good, is alone from the Soul.
3. That God will torment Man in Eternity for following his Energies.

But the following Contraries to these are True:—

1. Man has no Body distinct from his Soul; for that call'd Body is a portion of Soul discern'd by the five Senses, the chief inlets of Soul in this age.
2. Energy is the only life, and is from the Body; and Reason is the bound or outward circumference of Energy.
3. Energy is Eternal Delight.<sup>1</sup>

總ゆる聖書聖典は次の誤謬の因(きん)となつた:—

1. 人には二つの實存の原質, 即ち「肉體」と「靈魂」とがあること。
  2. 「悪」と呼ばれる「精力」は一に「肉體」に由來すること。而して「善」と呼ばれる「理性」は一に「靈魂」に由來すること。
  3. 「精力」を追求する者は永劫の世界に於て神の苛責に遭ふこと。
- 併しながらこれと反對の次のことは眞實である:—

1. 人は「靈魂」と分離せる「肉體」を持たぬ。「肉體」は五官に依つて識別される「靈魂」の一部, 現代に於ける「靈魂」の容器であるから。
2. 「精神」は唯一の生命であり「肉體」に由來するものだ。而して「理性」は「精力」の限界即ち外圍だ。
3. 「精力」は「永劫の喜」だ。

<sup>1</sup> The Voice of the Devil.



これが彼の作品のすべてを貫いてゐる力強い思想であり、又ここに彼の作品の深さ乃至偉大さが見られる。

## III

次に吾々は Blake の藝術観を見よう。彼は實に、Yeats の云うた通り、總ゆる偉大な藝術と象徴との離るべからざる關係を闡明せる近代最初の作家であつた。彼は一度も「象徴」なる言葉を用ひたことはないけれども、彼の常に力説し、自らの作品に體現した「想像」の教義こそは正に吾々の象徴主義に他ならない。彼より前既に「譬話(77)」、「諷諭(77)」等の象徴的作品は澤山あつたが、是等は知の所産であつて、知性に訴へて初て理解し得る、種々可能な表現の一つである。然るに彼の「幻覺即ち想像」は精神的乃至具體的事物の唯一最後の表現であり、「想像」の全き活動によつて生れ、本能に訴へて理解することの出来るものである。即ち彼の高調せる

「砂(77)のなかに世界を見、  
 野花のなかに天國を見る、  
 たなごころのなかに無限を握り、  
 ひと時のなかに永劫を握」<sup>1</sup>

<sup>1</sup> *Auguries of Innocence*, ll. 1—4 参照.

る「想像」の教義は畢竟近代象徴主義とその精神に於て變りはない。永い間無視されてゐた彼が近時藝苑に思想界に迎へ入れられ日増その聲譽を高めつつある所以のものは正にその象徴主義のためでなければならぬ。

彼はまた、總ゆる神秘主義者と同じく、藝術に於ける「明晰」の重要を力説した。「限界線が明晰鋭利で針金の如くなればなる程藝術作品は完全であり、鈍ければ鈍い程力無き模倣、剽竊、及び拙劣の證據が著しい」と云ふのが彼の「藝術に人生の黄金律」であつた。茲に「限界線」とは恐らく輪廓の意であらう。又彼はかう唱へた、「プロトジニス及びアピリーズは彼等の線で五に理解してゐた。ラファエル及びマイケル・アンジェロ及びアルバート・デイウラーは之により、而も之のみによつて人々に知られてゐる。限界線に依らずして如何にして吾々は梟と獸とを區別し、馬と牛とを區別するか。限界線及びその無限の屈曲によらずして如何にして吾々は顔と顔を區別するか。家を建て庭園に植ゑるものは明瞭確固たるものでなくて何か。正不正を別つものは行爲及び意志の堅い針金の様な線であつて何か。この線を取り去れば生命そのものを取り去ることになる。さうして萬物は再び混沌に歸し、萬能の神の線は人及び獸

<sup>1</sup> 以下各所に散在する括弧内の Blake の所論の引用句は Keynes, Yeats 等の Blake 集散文の部参照のこと。



の存せざるに先だちその上に引かれなければならぬ」と。是等の朦朧たる言葉によつて彼の説かうとしたのは恐らく繪畫に於ける明晰と確實性とであつたであらう。又彼は「彩色は色の所在によらずして明暗の所在により、總ゆるものは形又は輪廓による」と主張した。思ふに色は日向にあるか日陰にあるかによつて光度又は濃度が定ると云ふ意味であらう。さうして彼の輪廓又は限界線とは物體を背景と區別する輪廓の意味ではなくして、物體を周圍の空間と區別する界線のことであつたことは云ふまでもなからう。

彼はまた形式と内容とは一なること、即ち技巧即内容であり、技巧を離れて藝術の存在し得ざることを主張した。曰く「何人も獨創的作品を改善することは出来ない。又獨創的作品は、神又は人の孰れかに依つて組織せられ、調節せられた運技なしには存在しない。私はマイケランジェロ、シェイクスピア、及びミルトンの如き截然確乎たる手で一氣にかかれたものを云ふのだ。「思想さへあれば之に配する言葉はどうでもいい」と云ふ人がよくある。又「圖案(デザイン)さへあれば技巧はどうでもいい」と云ふ人がある。是等の人々は製作と云ふことは解つてゐるが藝術といふものは少しも知らないのだ。思想は之に伴ふ適確な言葉によらなければ現すことが出来ず、圖案は之に伴ふ適確な技巧なしには出来ないものだ」。

## IV

以上吾々は Blake の詩文に現れてゐる思想乃至哲學の概觀を得やうと試みた。併しながら、具象は抽象を暗示する微妙な象徴であり、抽象は具象の衣を纏うて始めてその完全なる表白を得る藝術作品に就き作者の思想を抽出論議するのは、恰も花の美を探ぬるに解剖若しくは顯微鏡検査を以てするのと同じく、無謀無効の企でなければならぬ。如何に巧な祖述者と雖も原作と同じ力を以て作者の思想を再現することは出来ず、原作に接せずして真に精細に作者の精神を了得することの不可能なのは云ふ迄もないことである。吾々は今吾々の描き得た Blake の神秘思想の粗雑なる輪廓に満足しなければならぬ。最後に吾々は彼の作品の二三を引いて如上の記述を確め、上記の觀察の不備を補ふことにする。

Blake の「想像」が「慈悲」、「憐愍」、「平和」、及び「愛」の源泉であることは既に述べた。彼は「慈悲」、「憐愍」、「平和」、「愛」そのものである「われらが御父(神)の神」の支配の下に萬物の睦み合ふ愛の世界の實現を望み且つ信じて「夜」'Night' と題する莊重な詩の中でかう歌つた——

And there the lion's ruddy eyes,  
Shall flow with tears of gold,



And pitying the tender cries,  
 And walking round the fold,  
 Saying ' Wrath, ~~by~~ His meekness,  
 And by His health, sickness  
 Is driven away  
 From our immortal day.

' And now beside thee, bleating lamb,  
 I can lie down and sleep ;  
 Or think on Him who bore my name,  
 Graze after thee and weep.  
 For, wash'd in life's river,  
 My bright mane for ever  
 Shall shine like the gold  
 As I guard o'er the fold.'<sup>1</sup>

かくしてそこに煌々たる獅子の眼に、  
 金色(金色)の涙みちあふれ、  
 柔しい聲に憐れを催し、  
 圍ひのまはりを歩みつつ云うであらう——  
 「柔和な神のために怒りは失せ、  
 健かな神のために

<sup>1</sup> *Songs of Innocence, Night*, ll. 33—48.

病は癒えて、  
 もはやわが世になくなつた。

「さうして、仔羊よ、  
 今私はお前の側に横はつて眠り、  
 お前の名をもつ神をおもひ、  
 お前に従いて草を食ひ泣くことも出来るぞ。  
 即ち、生命の河に袂(たもと)せしゆゑ、  
 お前の圍ひを護るとき、  
 私の立派な鬘は  
 黄金(きん)に輝く」と。

又同じ思想を「黒ん坊の子供」‘The Little Black Boy’ と題する  
 詩に歌つてゐる。その全章を掲げよう——

My mother bore me in the southern wild,  
 And I am black, but O! ~~my~~ soul is white;  
 White as an angel is the English child,  
 But I am black, as if bereaved of light.  
 My mother taught me underneath a tree,  
 And, sitting down before the heat of day,  
 She took me on her lap and kissèd me,  
 And pointing to the east, began to say:



'Look on the rising sun,—there God does live,  
And gives His light, and gives His heat away ;  
And flowers and trees and beasts and men receive  
Comfort in morning, joy in the noonday.

'And we are put on earth a little space,  
That we may learn to bear the beams of love ;  
And these black bodies and this sunburnt face  
Is but a cloud, and like a shady grove.

'For when our souls have learn'd the heat to bear,  
The cloud will vanish ; we shall hear His voice,  
Saying : "Come out from the grove, My love and care,  
And round My golden tent like lambs rejoice."

Thus did my mother say, and kiss'd me ;  
And thus I say to little English boy,  
When I from black and he from white cloud free,  
And round the tent of God like lambs we joy,  
I'll shade him from the heat till he can bear  
To lean in joy upon our father's knee ;  
And then I'll stand and stroke his silver hair,  
And be like him, and he will then love me.<sup>1</sup>

<sup>1</sup> Cf. *Songs of Innocence*.

母は私を南方の遠い荒野で生みました、  
それで私は黒い色、けれど魂(ミ)は眞白です。  
天使のやうに英吉利の子供は色が白いです、  
けれど私は色黒く、日の目も見ないもののやう。

私の母は木の下で私に教へてくれました、  
朝まだあつくならぬとき腰うちかけて泌々と、  
私を膝の上ののせ私に接吻(キ)をしてからに、  
東の方(東)を指さして次の如くに云ひました——

「昇る朝日をあれご覽、——あすこに神がましまして、  
光と熱を萬物にさづけ與へて下さるの、  
さうして花や木や獸、それから吾々人間も、  
朝は慰め、また晝は喜びをうけさづかるの。

「さうしてほんの東の間の人の生涯(シ)も結局は  
愛の光に堪へること習ふがためにほかならず、  
またこの黒いわが身體(カラダ)日やけた黒いわが顔も  
ただむら雲のやうなもの、をぐらき森も變りない。

「ほら吾々の魂が熱に堪へ得るそのときは  
雲は散じてありがたい神の御聲(ミコトノコエ)が聞えます、



「わが愛ぐし子よ、森を出でわが金色(きんいろ)の神座(かみ)の  
周囲(まわり)に羊の群のごと喜びつどへ」と云ふ御聲。

私の母はさう云つて私の顔に接吻(くち)をした。  
さうして私は英吉利の子供に左様申します。  
私が黒雲英吉利の子供は白雲うちらはひ、  
羊のごとく神様の周囲(まわり)に喜びつどふとき、

私は彼が喜んで神のみ膝に倚るやうに  
なるまで庇つて英吉利の子供を熱にあてませぬ。  
そこで私は英吉利の子供の髪をすいてやり、  
彼と變りはなくなつて彼も私を愛しませう。

是等の詩もその一例であるが、Blake の作品は、他の總ゆる偉大なる作品と同じく、微妙なる對照によつていみじき効果を収めてゐる場合が多い、獅子と羊、黒人と白人、天使と悪魔、虎と羊又は天使、老人と子供、かかる對照は彼の作品にしばしば見るところである。

彼は柔和な羊と無心の子供とを好み幾度となく詩に歌ひ繪に描いた。さうして彼は之を神性の權化であると考へた——

Little Lamb, who made thee?  
Dost thou know who made thee?  
Gave thee life, and bid thee feed,  
By the stream and o'er the mead;

Gave thee clothing of delight,  
Softest clothing, woolly, bright;  
Gave thee such a tender voice,  
Making all the vales rejoice?  
Little Lamb, who made thee?  
Dost thou know who made thee?

Little Lamb, I'll tell thee,  
Little Lamb, I'll tell thee:  
He is called by thy name,  
For He calls Himself a Lamb.  
He is meek, and He is mild;  
He became a little child.  
I a child, and thou a lamb,  
We are called by His name.

Little Lamb, God bless thee!  
Little Lamb, God bless thee!<sup>1</sup>

仔羊よ、お前は誰の子だ、  
一體お前は誰の子か、  
お前に命をさづけ、  
川のほとりや牧場の上で草を食はせ、

<sup>1</sup> Songs of Innocence, The Lamb.



びかびかする羊毛(羊毛)の着物をさづけ、  
 谷中を喜ばしくする、  
 かやうな柔しい聲をさづけたのは誰か  
 お前は知つてるか。

仔羊よお前は誰の子だ、  
 お前は誰の子か知つてるか。

仔羊よ、云うてきかさう、  
 仔羊よ、云うてきかさう——

神のおん名はお前の名、  
 神はみづから「仔羊」と名告(名)られる。  
 神は柔和でおとなしい。  
 神は子供に化身(身)られた。  
 私は子供、お前は仔羊、  
 吾々の名は神のお名。

仔羊よ、お前の上に祝福あれ。

仔羊よ、お前の上に祝福あれ。

最後に思想的ではないが Blake の快暢な一面を示す「春」*Spring*  
 と題する短唱を引いて此の稿を結ぼう——

Sound the flute!

Now it's mute.

Birds delight  
 Day and night;  
 Nightingale  
 In the dale,  
 Lark in sky,  
 Merrily,

Merrily, merrily, to welcome in the year.

Little boy,  
 Full of joy;  
 Little girl,  
 Sweet and small;  
 Cock does crow,  
 So do you;  
 Merry voice,  
 Infant noise,

Merrily, merrily, to welcome in the year.

Little lamb,  
 Here I am;  
 Come and lick  
 My white neck;  
 Let me pull



Your soft wool;  
 Let me kiss  
 Your soft face;  
 Merrily, merrily, we welcome in the year.<sup>1</sup>

笛をならせ。  
 もう音がしない。  
 晝も夜も  
 鳥はよろこぶ、  
 鶯は  
 谷に、  
 雲雀は空に、  
 たのしく、  
 たのしく、たのしく、年を迎へて。

嬉々たる  
 小兒、  
 可憐の  
 少女、  
 鶏(けい)なき、

<sup>1</sup> Cf. *Songs of Innocence*.

人うたふ、  
 たのしい聲音(おん)  
 幼兒(こども)のさはめき、  
 たのしく、たのしく、年を迎へて。

仔羊よ、  
 私はここだよ、  
 私の白い頸を  
 さあお甜め、  
 おまへの柔かな毛を  
 ひつばらしてごらん、  
 おまへの柔かな顔に  
 接吻(くちづけ)さしてごらん、  
 たのしく、たのしく、吾等は年を迎へる。

—— 大正八年九月 ——



## ブレイクの影響

特殊な作家の數ある中にわが Blake 程傳統と交渉の尠い人物は無からうと思ふ。まつたく彼は傳統を守り又傳統を造るには異常に過ぐる天才であつた。

Gilchrist 及び Crabb Robinson に據れば彼は幼少の頃より屢々奇異なる幻覺を経験し、之を等しく奇異なる詩や畫に體現した精神的作家であり、柔和端正の美德を具へ圓滿な生活を送つた善良なる市民であつたが、彼は又同時に太古の民の如き素樸敬虔な心を持ち、峻嚴神の如き善惡の批判を以て生活に面し、深刻な思想藝術の哲學を完成した驚異すべき人物であつた。かくの如き稀有なる性格を持ち、狂氣に隣してゐた異常な天才が他人の影響を受けることが尠かつたと共に他人に及す影響の範圍の極めて狭小であつたのは素よりその所であると云はねばならぬ。又かかる異常な孤立せる作家を理解するには、他の作家の場合と異り、外的證左や比較推論によるよりも内的證左乃至同情により作家の異常な世界に沈潜する鑑賞の態度の肝要であることも云ふ迄もなからう。“I must Create a System, or be enslav'd by another Man's”<sup>1</sup> (『私は一の世界を造らな

<sup>1</sup> Cf. *Jerusalem*, p. 10, ll. 20-21.

ければならぬ、さもないと必ず他人の世界に隷屬させられる』と云つた Blake は事實一の驚くべき思想藝術の世界を創造したけれども、その世界が餘りに異常であつたがために、多くの作家の精神に深甚の感銘を與へ、多數人士の靈感を刺戟したに拘らず、彼の影響が、他の偉大な作家に於けるが如く、顯著な傳統又は流派となつて外に現るるに到らなかつたのは又當然であると云はねばならぬ。

もとより、かかる異常な作家にも、他の總ゆる作家と同じく、模倣の時代、傳統乃至他人の影響の下に詩畫を物した習作時代が無かつた譯ではない。それは彼が Pars' Drawing School に入つて初て畫を習ひ傍ら興に任せて詩作の筆も執つた十一二歳の頃から徒弟の期限が満ちて彼の師事した版畫家 Basire の許を辭した二十二歳の頃までであるが、その時代の作に係る *Poetical Sketches* や *Joseph of Arimathea among the Rocks of Albion* には、獨創の閃きは隨所に見えながらも、作者の傾倒してゐた先代の古典作家や、Gothic 建築や、Basire の歴然たる影響は何人も之を見遁さぬであらう。併しながらそれら習作時代の重要ならざる少數の作品を除き Blake の詩や繪が孰れも皆獨創に輝く異常な作物であることも萬人の齊しく認むる所である。彼は洵に Yeats の云うた通り、表現のモデルを周圍の世界に見出し得なかつた異常な思想を表現した爲に一般人士



の理解し難い晦澁な作家となつたのである<sup>1</sup>。Blake の存命中彼を師と仰ぎ彼の周囲に集つた少数の青年畫家や彼の死後年と共にその數を増して行く彼の讚美者さへも、彼に靈感を見出し、深刻な精神的感化を蒙りながらも尙皆彼の思想作風の一部を高調し傳承したに過ぎないのは Blake が善惡兩様の意味に於て常人の追隨を許さぬ異常な作家であつたがために他ならない。Swinburne, Rossetti 兄弟, Yeats, Binyon の如き Blake の讚美者や、晩年に於ける Blake の渴仰者であり門弟であつた Edward Calvert や, Samuel Palmer や, George Richmond の如き畫家達に於てすら、Blake の影響は内面的若くは部分的に止り、其等作家の個性を壓倒し不明にするに到らなかつたことは皆人の認むる所である。

Blake が存命中多少の影響を及した作家は詩人ではなく、Flaxman, Fuseli, Hood, Palmer, Calvert, Richmond 等の畫家達であつた。John Flaxman (1755-1826) と Hans Rudolf Fuseli (1737-1806) とは共に、Blake よりは年上の、當代著名の畫家であつたが、彼等は畫家及び詩人としての Blake の天才を認め、Blake も亦彼等を敬愛し、最後まで親密な交情を續けたのであつた。さうして彼等は、云ふ迄もなく、互に影響し影響されてゐた。Flaxman は Blake と

<sup>1</sup> Cf. W. B. Yeats: *William Blake and the Imagination* (included in *Ideas of Good and Evil*).



*Creation of Light*, by George Richmond.



同じ様に空中の浮動せる人體を描き、Fuseli は構想の Blake と酷似せる奔放な繪を描いた。若い頃版畫を習つた詩人の Tom Hood (1799-1845) にも Blake の影響の明かに認めらるる繪のあることを Laurence Binyon はその近業 *The Followers of William Blake* (1925) の中に叙べてゐる。

Edward Calvert (1799-1883), Samuel Palmer (1805-1881), George Richmond (1809-1896) 等三人の年少畫家は Linnell と共に Blake の晩年を明るくした親友であり渴仰者であつたが、彼等は正しく Blake 派と呼び得る程に較著な影響を受けた Blake の亞流であつた。その中 Calvert 及び Palmer は Blake の *Virgil* の挿繪<sup>1</sup> の牧歌的風趣に深い興味を覚え、共に此種の風景畫の製作を續けて立派な繪を描いたが、Calvert は沈靜、典雅、繊細の趣に於て優り、Palmer は Blake の箴言 “*Exuberance is Beauty*” (『豊満は美なり』) を體し華麗と情熱とを特色とした作家であつた。Palmer は又 Blake に倣つて *Milton* の挿畫 (*L'Allegro* 及び *Il Penseroso* の水繪の挿畫) も描いた。三人の中最も若齡且 Blake に接すること最も遅かつた Richmond は Blake の感化影響を受くること最も多く、構想技巧共に Blake に酷似せる作が頗る多い。併し彼は後には人

<sup>1</sup> *XVII Designs to Thornton's Virgil* (Woodcuts), 1820-21.



氣ある肖像畫に轉じ、Wilberforce, Keble, Macaulay 等の優れた肖像によつて専ら肖像畫家として一般人士に知られてゐる。是等の畫家は孰れも皆英國當代の多くの畫家と同じく版畫家を兼ねた作家である。

私は是等 Blake の影響を受けた作家の作の中から Richmond の *The Creation of Light* (tempera, 1826) と Laurence Binyon の *A Song* とをその最も顯著な例として挙げたいと思ふ。前者は Richmond が年少の頃の作であるが、その構想、色彩、技巧一見して Blake の亞流の作であるとなづかれる。併しそれは全然の模倣ではなく、又僅か十七の少年作家の作とは思はれぬ技巧の熟達が見られる佳作である。又 Binyon の

## A SONG

For Mercy, Courage, Kindness, Mirth,  
There is no measure upon earth.  
Nay, they wither, root and stem,  
If an end be set to them.  
Overbrim and overflow,  
If your own heart you would know;  
For the spirit born to bless  
Lives but in its own excess.

## 小 曲

慈悲と勇氣と仁愛と怡樂の  
限り定めは世にあらず、  
さなり、そをしも止めなば、  
枯れ萎むべし、根も幹も。  
充ちあふらせよなみなみと、  
己がこころを知らまくば。  
榮えの神の生命こそ  
充ちあふれさきはふものを。

も氏の初期の作であるが、夙に熱心な Blake 讚美者の一人であつた氏にこの作あるは敢て異とするに足らぬ。この詩はその格調、その思想まがふ方なく Blake school である。この詩は吾々に *The Divine Image* を思はせ、*Proverbs of Hell* の箴言 “The road of excess leads to the palace of wisdom” (『過剰の道を辿れば叡知の宮殿に行く』)、“Exuberance is beauty” (『豊満は美なり』)、“Enough or Too much” (『充分然らざれば過多』)及び Blake の屢々説いた生命及び自由の母としての歡喜の教義を想ひ起させる。



## ブレイク研究圖書解題

数多き Blake books 中最も重要にして今日尙一般讀者の近づき易いものを列挙し、簡単な解説を試みようと思ふ。稀書中の稀書として一部数千金若くは数万金の市價を稱へらるる Blake 自身の印行頒布した詩集や版畫や、本國に於てすら容易に手にし得ぬやうな古い文献や複寫本は茲に除外する。次に列挙する圖書の中にも既に絶版になり珍本として取扱はれてゐる數十年前の出版物や、最近のものでも限定版であるために早くも珍本になり又ならうとしてゐるものが尠くないが、それでも、尙それらの文献は今日の讀者の手にする望みの全然無いものではない。日本で出版された Blake 文献に就ては別項に叙べてあるから茲には省く。尙悉くしは驚くべく綿密で立派な書史 *A Bibliography of William Blake*, by Geoffrey Keynes (1921) を参照されたい。

### A. TYPOGRAPHICAL EDITIONS OF BLAKE'S WRITINGS

1. *The Poetical Works of William Blake, Lyrical and Miscellaneous*. Edited with a Prefatory Memoir by William

Michael Rossetti (The Aldine Edition). George Bell and Sons, London. 1874.

Blake の作を可成よく集めた、最も古い、詩集らしい詩集であるが、text は完全と云ひ得ない。併し巻頭百二十五頁の Prefatory Memoir と *The Mental Traveller* の解説とは有益の文字で、その爲に永く珍重されてゐる本である。度々改版され、最近 'Bohn's Library' の一冊として出たから誰でも容易に求められる。

2. *The Works of William Blake, Poetic, Symbolic, and Critical*. Edited with Lithographs of the Illustrated 'Prophetic Books,' and a Memoir and Interpretation by Edwin John Ellis and William Butler Yeats. In three volumes. Bernard Quaritch, London. 1893.

最初の大きな翻刻著作集で、第一卷には傳記及び象徴藝術の解説を、第二卷には主として抒情詩を、第三卷には「豫言書」の複寫を収めてある。これは Blake の思想藝術を始めてよく世人に紹介した Blake 研究に於ける monumental な pioneer works の一つであることは周知の事實であるが、遺憾ながら誤讀誤植が多く詩の配列も妥當を缺いてゐると思はれるふしが少ない。併し第一卷の傳記解説は今日尙 Blake 研究者を裨益する有益の文字たるを失はぬ。絶版。時價二十五乃至三十磅。



3. (i) *The Poems of William Blake*. Edited with an Introduction by William Butler Yeats. (The Muses' Library). Lawrence and Bullen, London. 1893. (ii) The same (The Muses' Library) reprinted by Routledge, London, 1905 (and after). (iii) The same reprinted by Boni and Liveright, New York. [N. D.]

Yeats 編纂の小形の詩集で Prophetic Books 及び散文の抜萃が入つてゐて便利だが、text は完全とは云ひ難い。初版 (1893) は立派な本である。亞米利加版は 'The Modern Library' 中の一冊である。

4. *Selections from the Writings of William Blake*. Edited with an Introductory Essay by Laurence Housman. Kegan Paul, Trench, Trübner, & Co., London. 1893.

これは収録原稿の分量に於ては前著 A, 3 と大差はないが編者 Housman が原稿をもつてゐた *An Island in the Moon* の散文の一部が入つてゐる。これは Ellis の *Real Blake* (B, 3) 及び Keynes の Blake 著作集 (A, 10) 以外のどの本にも入つてゐないものである。巻頭の序文も簡単ではあるが参考になる。絶版。

5. (a) *The Prophetic Books of William Blake*. Jerusalem (1904). (b) *The Prophetic Books of William Blake*. Milton (1907). Both edited with Prefaces, Introductions and Notes by E. R. D. Maclagan and A. G. B. Russell. A. H. Bullen, London.

Blake の豫言書の代表的大作の翻刻で、是等詩篇の神話の結構乃至由來を説明した序文及び註解を添へてある有益な出版。編者は本来豫言書の全部を逐次翻刻する計畫であつたらしいが、この二冊しか出なかつたのは遺憾である。絶版。

6. *The Poetical Works of William Blake*. A New and Verbatim Text from the Manuscript, Engraved and Letter-press Originals, with Variorum Readings and Bibliographical Notes and Prefaces by John Sampson. The Clarendon Press, Oxford. 1905.

Sampson の文献學的才能乃至學者的良心のいみじき現れであるこの本は Blake 研究者の必ず一本を備ふべき立派な信頼し得る編著の一つである。Blake の writings の全部を網羅してゐる譯ではなく、Prophetic Books の如きは僅に一小部分を掲げてゐるに過ぎないけれども、text の正確な點に於て、各詩篇の詳密な書史的解説や諸家の異訓を照合してゐる點に於て永く珍重さるべき、有益な、價値ある著述である。

7. *The Poetical Works of William Blake*. Edited and Annotated by Edwin J. Ellis. In two volumes. Chatto and Windus, London. 1906.

最初に出た Blake の詩の全集、最近 Keynes の全集が出るまでは *The Four Zoas* (Vala) の全篇は此本以外に求め得なかつたの



で多くの誤植にも拘らず珍重されてゐた。各詩篇の説明乃至註解が参考になる。絶版。

8. *The Letters of William Blake, together with a Life by Frederick Tatham.* Edited from the Original Manuscript with an Introduction and Notes by Archibald G. B. Russell. With Illustrations. Methuen & Co., London. 1906.

本文は Tatham の書いた四十九頁の Blake 傳 (*The Life of William Blake*) 及び手紙七十五、それに三十一頁の序文と詳しい註が添へてある。十二葉の挿繪もよく出来てゐる。Blake 研究者必携の好著であるが、遺憾ながら絶版になつてゐる。

9. *The Poetical Works of William Blake, including the unpublished French Revolution together with the Minor Prophetic Books and Selections from the Four Zoas, Milton & Jerusalem.* Edited with an Introduction and Textual Notes by John Sampson. (Oxford Edition). Oxford University Press. 1913 (& later).

これは Sampson が前著 (A, 6) の多少の誤謬を訂正し、前著に漏れてゐる短豫言書の全部と長豫言書 *The Four Zoas, Milton,* 及び *Jerusalem* の抜萃と、*Descriptive Catalogue* 中の *Chaucer's Canterbury Pilgrims* の項を補ひ、新に執筆した三十七頁の *Bibliographical Introduction*, 年表, 脚註, 及び挿繪十六枚を添へ、普

及版として出版したもので、今の處一般讀者に一番便利な信頼し得る Blake 詩集である。

10. *The Writings of William Blake.* Edited by Geoffrey Keynes. In three volumes. The Nonesuch Press, London. 1925.

これ迄出た總ゆる Blake 著作集の中總ゆる點で最も定全なものである。編者 Keynes 氏は曩に Sir Thomas Browne, John Donne, 及び Blake の立派な著作目録を出し、Blake 其他の古典作家の作の翻刻や複寫本を出して Sampson と共に非凡なる書史學乃至編纂の才能を認められてゐる人、text の正確な點に於て、印刷、用紙、挿繪、装幀の立派な點に於て、又収録材料の exhaustive な點に於て、此本の右に出づるものはない。ただ遺憾な事には此本は割合に高價な限定出版で、早くも絶版になり、古本も日に日に高値を呼び、讀者の手に入り難くなりつつある。

11. *The Prophetic Writings of William Blake.* Edited with a General Introduction, Glossarial Index of Symbols, Commentary and Appendices by D. G. Sloss and J. P. R. Wallis. In two volumes. The Clarendon Press, Oxford. 1926.

これは 1905 年に Clarendon Press から出版された Sampson の Blake 詩集 (既出 A, 6) の補遺として編纂したもので、*Prophetic Books* の全部を網羅し、Sampson の詩集同様詳細な解説と註解を



添へた學究的編著、信頼し得る text でもあり、又有益な参考書でもある。Vol. I には主要豫言書の texts とその解説を、Vol. II には *General Introduction* (pp. 1-121), *Index of Symbols* (pp. 123-263) のほかに Vol. I に漏れた小豫言書、Index to Foot-notes &c. 等を含む *Appendices* を収めてある。價二磅二志。

12. *Poems & Prophecies of William Blake*. Edited with an Introduction by Max Plowman. (Everyman's Library). J. M. Dent & Sons, London. 1927.

これは Everyman's Library の No. 792, Pp. xxxii+439, その中二十一頁は *The Gates of Paradise* の fascimile になつてゐる。書翰を除く Blake の Writings をば I. Works printed and illustrated by Blake, II. Fragments from Blake's MSS., III. Poetical Sketches (最後に 'Song by a Shepherd,' 'Song by an Old Shepherd' をも附加してある)の三類に分ち、年代順に配列し、二十六頁の Introduction と五頁の Textual notes とを添へたもの。本書の編者は Keynes までの standard editions を一々元版又は原稿と照し合せて Text を確定したと云ふことであるから、textual correctness の點に於ては是迄出た Blake 集の中最も信頼し得るものであらう。巻首の Introduction は詩人としての Blake の、簡にして要を得た批評的紹介で、Blakean students にとつて有益の文字

であり、最後に重要な Blake 文献の目録も掲げてある。

#### B. BIOGRAPHIES, CRITICAL ESSAYS, AND COMMENTARIES.

1. (i) *Life of William Blake, "Pictor Ignotus," with Selections from His Poems and Other Writings* by the Late Alexander Gilchrist.....Illustrated from Blake's Own Works in Facsimile by W.J. Linton and in Photolithography; with a Few of Blake's Original Plates. In two volumes. Macmillan and Co., London and Cambridge. 1863. (ii) *A New and Enlarged Edition*, illustrated from Blake's Own Works, with Additional Letters and a Memoir of the Author. In two volumes. Macmillan and Co., London. 1880. (iii) *A New Popular Edition*, edited with an Introduction by W. Graham Robertson. John Lane the Bodley Head, London. 1907.

總ゆる Blake 評傳中最も詳細なもの。Blake の友人達の存命中著者 Gilchrist が起稿し、稿半にして病歿したが、寡婦 Anne Gilchrist が夫の素志を繼承し D.G. Rossetti, 及び W.M. Rossetti の助力を得てこの傳記を完成したのである。三度版を重ねたが、1880年の改訂第二版が一番いい。第一版第二版は各二冊より成り、第一卷は挿繪入りの傳記、第二卷は Blake の詩、散文、及び書翰の重要なもの(但し *Prophetic Books* は大部分除外されてゐる)を掲げ、



卷末に W.M. Rossetti の編纂に係る *Annotated Lists of Blake's Paintings, Drawings, and Engravings* と *The Book of Job* の挿繪の複寫と Blake の作った原版から印刷した *Songs of Innocence, Songs of Experience* の十六頁が添へてある。記事、挿繪、用紙、印刷、装幀等總ての點で第二版は初版とは比較にならぬ程立派な出来栄である。1907 の普及版は一冊で詩、散文、及び書翰の拔萃を省き、挿繪も少く、且粗末な網目版である。研究の進んだ今から見て記事に多少の誤謬がないではないが、これが一番詳しい行届いた Blake 傳で Blake 研究者の是非讀まなければならぬ文献の一つである。事實後に出た傳記や評論は殆ど皆この本の恩恵を蒙つてゐる。第一版、第二版は勿論絶版で時價第一版四磅内外、第二版十二磅内外、一冊の新版(1907)は發行當時の價格十二志六片だつたと記憶する。新版は今でも容易に手に入る。

2. (i) *William Blake: A Critical Essay*. By Algernon Charles Swinburne. With illustrations from Blake's designs in facsimile, coloured and plain. J. C. Hotten. London. 1868. (ii) The Second Edition of the same. J. C. Hotten, London. 1868. (iii) A New Edition of the same. Chatto & Windus. London. 1906.

Gilchrist の *Life*, (B, 1), W. M. Rossetti の詩集 (A, 1), Ellis

& Yeats の詩集並に解説 (A, 2) と共に Blake の天才を紹介するに與つて力あつた Blake 研究の pioneer works の一つ。I. *Life and Designs*, II. *Lyrical Poems*, III. *The Prophetic Books* の三章に分ち、詩人的洞察及び同感を以て Blake の生涯及び藝術を闡明せる好著、但し Swinburne の文章は洵に立派な詩的文章ではあるが處々 Blake 以上に難解である。初版に二種類あつて最初に製本された分は Title-page に *Zamiel* と云ふ銘 (legend) があり、後に製本された second issue ではその銘が *Going to and fro in the Earth* となつてゐる。第二版 (ii) は第一版の second issue と title-page の銘が同じで Second Edition と記してある。第一版第二版には Blake に倣つて印刷した素畫に筆で彩色を施した七枚の畫と一色刷の Blake の複寫が二枚入つてゐる。新版 (iii) には私の知つてゐる所では二種類あつて最初に製本した first issue には second issue に入つてゐない Blake の肖像が入つて居り、second issue は plain top で、first issue は gilt top である。初版は絶版、時價四五磅、新版は發行當時の價格六志位であつたと思ふ。

3. *The Real Blake, a Portrait Biography, with Illustrations*. By Edwin J. Ellis. Chatto & Windus. 1907.

Ellis 編纂の Blake 詩集 (A, 7) の companion volume として書かれたもの、誤植が多く、記事に不満に思はれるふしがあるけれど



も、他の多くの著作に漏れた散文や書翰を拾集した、Gilchrist に亞ぐ詳細な傳記で参照の價值がある。絶版。

4. *William Blake*. By Arthur Symons. Archibald Constable, London. 1907.

優れた評傳の一つ、殊に Blake の系圖に關する著者の新發見と卷末に添へてある Blake に關する當時の記録や文献の寫しは研究者に多大の光明と便宜とを與へる。

5. *William Blake, Poet and Mystic*. An Authorized Translation from the French of P. Berger by Daniel H. Connoe. Chapman & Hall, London. 1914.

これは Bordeaux 大學の Professeur Pierre Berger の *William Blake, Mysticism et Poesie* (1907) の英譯。佛蘭人の明晰な頭腦を以て Blake の生活と藝術とを論評闡明せる優れた評傳である。聞けば本書の原文は Berger 教授の學位論文であつたと云ふ。原書は僅々二百部許の限定出版で今日容易に手に入らない。卷末に可成詳しい Bibliography も添へてある。(但しこの目録には誤謬や誤植が尠くない。)

6. *William Blake, His Philosophy and Symbols*. By S. Foster Damon, Constable and Company, London, Bombay, Sydney. 1924.

Blake の難解な思想と象徴とを解明するために書かれた研究、Blake students の好個の参考書である。初めに Blake の思想の一般的解説があり、終に各詩篇の語句の可成詳しい註解がある。著者は Cambridge, Mass. の Blake 學者、この本の完成に前後十年を費し、英米兩國の殆ど總ゆる關係文献を涉獵したと云つてゐる。出版當時の賣價二ギ=許であつたと思ふ。米國版もある。絶版。

7. *Blake*. By Ernest Short. Philip Allan & Co., London. 1925.

英國畫家評傳叢書 (British Artists) 中の一編、卷末に掲げてある英國美術館所藏の Blake の繪の目録が便利である。價五志。

8. *William Blake, Studies of His Life and Personality*. By Herbert Jenkins. Herbert Jenkins, London. 1925.

古くから Blake を研究してゐる著者の文献學的研を究發表したもの、この著者の丹念な研究によつて初て Bunhill Fields の Blake の墓の位置が明かになつた。小冊子ではあるが重要な参考書の一つである。

9. *William Blake*, by Osbert Burdett. The Macmillan Co., London and New York. 1926.

‘English Men of Letters’ 新輯中の一冊。小冊子ではあるが可成よく書かれてゐる。Idolatry に非ざる著者の批評の態度が此評傳の特色である。



## C. REPRODUCTIONS AND CATALOGUES.

1. *William Blake. Vol. I. Illustrations of the Book of Job, with a General Introduction* by Laurence Binyon. Methuen & Co., London. 1906.

Blake 晩年の傑作「約百紀圖説」の立派な大判の複製である。Blake の爲人、詩、並に繪を論じた Introduction は暗示に富む文章である。

2. *Blake's Vision of the Book of Job, with Reproductions of the Illustrations, a Study.* By Joseph H. Wicksteed. J. M. Dent & Sons, London, and E.P. Dutton & Co., New York. 1910.

「約百紀圖説」の研究、複製は前書 (C, 1) よりは小さいが、コロタイプでよく出来てゐる。

3. *William Blake, Mystic, a Study.* By Adeline M. Butterworth. Together with Young's Night Thoughts, Night I & II, with Illustrations by William Blake and Frontispiece Death's Door, from Blair's 'The Grave.' The Liverpool Booksellers Co., Liverpool, and Simpkin, Marshall, Hamilton, Kent & Co., London. 1911.

評論は簡単なものだが、珍しい *Night Thoughts* の複製はこの本と Hollyer の Platinotype 版以外に求められない。

4. *The Engravings of William Blake.* By Archibald G. B. Russell. Grant Richards, London. 1912.

Blake の版畫の目録。三十二枚の網目版の複製も入つてゐる。記述は綿密で行届いてゐる。巻頭三十四頁の評論 *The Engravings of William Blake* も有益の文字である。限定出版。絶版。

5. *The Drawings and Engravings of William Blake.* By Laurence Binyon. The Studio, London. 1922.

色彩及び単色の複製百四枚を収めてある大判の立派な畫集。巻頭二十九頁の Introduction がある。上製と並製の二種類ある。限定出版。絶版。

6. *The Paintings of William Blake.* By Darrell Figgis. Ernest Benn, London. 1925.

愛蘭の詩人並に評論家故 Darrell Figgis の編著。Blake の paintings 百種の複製を集め、巻頭に評論 *William Blake in the Plan of His Days* を添へてある。立派な複製である。上製と並製とある。限定出版。絶版。

7. *The Engraved Designs of William Blake.* By Laurence Binyon. Ernest Benn, London, & Charles Scribner's Sons, New York. 1926.

前著 (C, 6) の姉妹篇として出版されたもの、主として前著に省



かれた版畫を収めてある。複寫畫數八十二、卷頭百四十頁の Blake 版畫の解説は専門家の筆に成る有益の文字である。Binyon 氏はこの本の編纂を企圖し果さずして世を去つた Figgis の素志を繼承してこの著作を成したのである。やはり並製上製の二種ある限定版である。

8. *Hollyer's Reproductions of Blake's Works.*

倫敦の複寫版畫家 Frederick Hollyer は colour print や platinotype の精巧な複寫を澤山出版してゐる。Colour prints は各百五十部の限定版で、高價ではあるが版畫の調子をよく出した藝術的な複寫で、之に優る Blake の複寫は他に求められない。一枚賣である。目録<sup>1</sup>は F. Hollyer, 9, Pembroke Square, Kensington, London, W. 8 へ照會すれば送つて呉れる。

【附記】 上記文献の分類 (A, B, C) は勿論嚴密な類別ではない。多くの場合一つの item が二つ又は三つの分類に跨つてゐるが、その主要な部分によつて便宜如上の分類をしたものであることを諒知せられたい。

— 昭和二年八月 —

<sup>1</sup> 1926 年迄に出版された Hollyer の複製の目録は本書 158-9 頁に掲げてある。

追 補

次表は昭和二年 (1927) 乃至昭和四年 (1929) の出版に係る Blake 文献中最も重要な單行參考圖書の目録である——

A. TYPOGRAPHICAL EDITIONS OF BLAKES WRITINGS.

13. *Poetry and Prose of William Blake*, edited by Geoffrey Keynes, complete in one volume. The Nonesuch Press, London. 1927.

B. BIOGRAPHIES, CRITICAL ESSAYS AND COMMENTARIES.

10. *The Life of William Blake*, by Mona Wilson. The Nonesuch Press, London. 1927.

11. *Blake's Innocence and Experience, a Study of the Songs and Manuscripts*, "shewing the two contrary states of the human soul," by Joseph H. Wicksteed. J. M. Dent and Sons, London & Toronto, E.P. Dutton & Co., New York. 1928.

12. *The Life of William Blake*, by Thomas Wright. In two volumes. Thomas Wright, Olney, Bucks. 1929.

C. REPRODUCTIONS AND CATALOGUES.

9. *The Marriage of Heaven and Hell*, by William Blake, *Reproduced in Facsimile from an Original Copy of the Work*

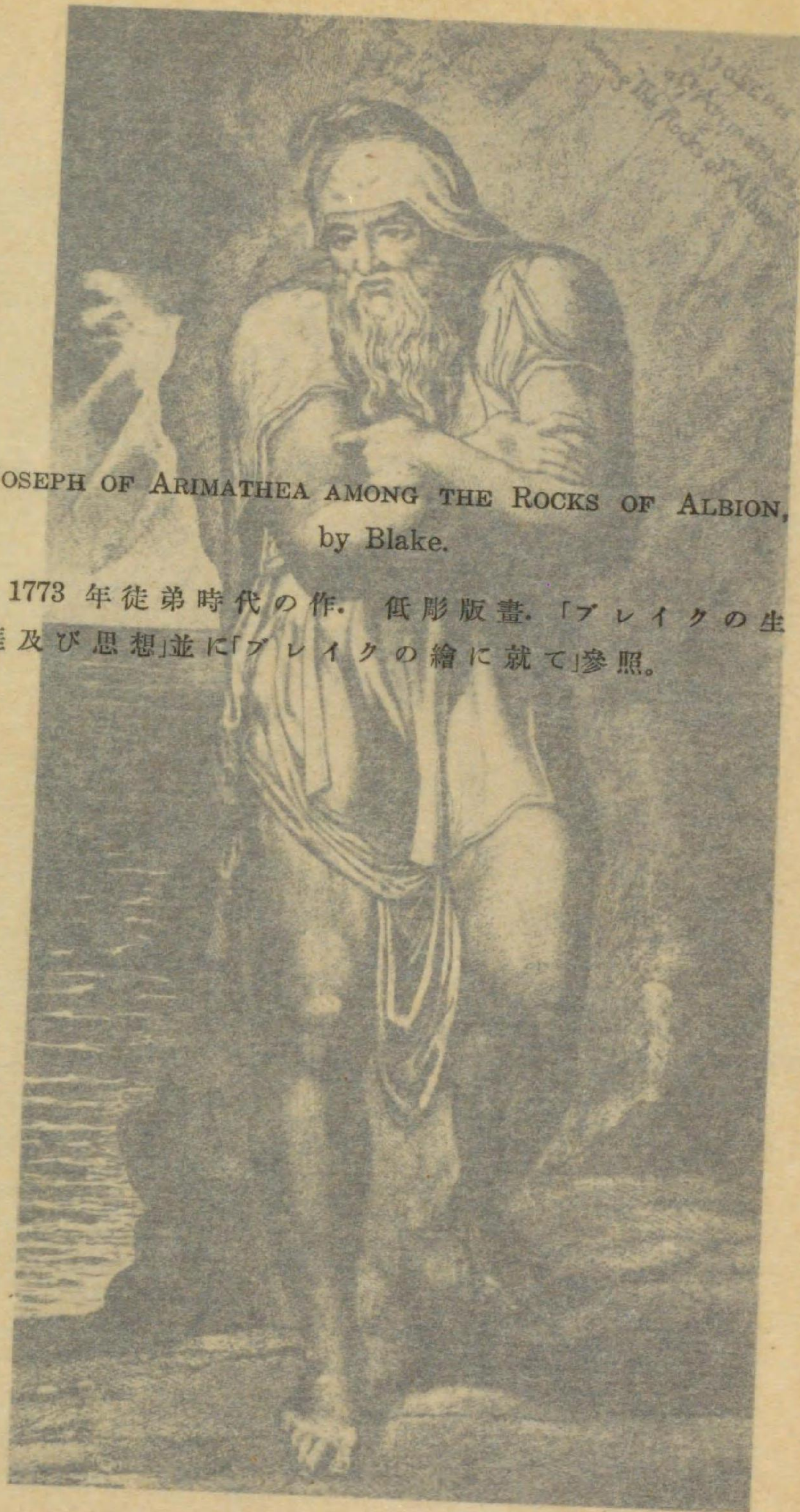


*Printed and Illuminated by the Author between the Years 1825-1827 and Now in the Fitzwilliam Museum, Cambridge, with a Note by Max Plowman. J. M. Dent and Sons, London & Toronto, E. P. Dutton & Co., New York. 1927.*

10. *Pencil Drawings by William Blake*, edited by Geoffrey Keynes for The Nonesuch Press. 1927.

11. 「キリアム・ブレイク書誌」。東京，京都，神戸，ぐろりあそ さえて。1929 (昭和四年)。

— 昭和四年八月 —



JOSEPH OF ARIMATHEA AMONG THE ROCKS OF ALBION,  
by Blake.

1773年徒弟時代の作。低彫版畫。「ブレイクの生涯及び思想」並に「ブレイクの繪に就て」參照。



Printed and Illuminated by the Author between the years  
1825-1827 and Now in the Fitzwilliam Museum, Cambridge  
with a Note by Max Plowman. J. M. Dent and Sons, London  
& Toronto, E. P. Dutton & Co., New York. 1927.

10. Pencil Drawings by William Blake, edited by Geoffrey  
Keynes for The Nonesuch Press. 1927.

JOSEPH OF ARIMATHEA AMONG THE ROCKS OF ALBION  
11. 「キリアム・ブレイク書誌」東京、京都、神戸、くろしや  
by Blake.

1773年能楽時代の作。版権者、ロンドン、イギリス  
主として、1929年（昭和四年）  
一、原画はロンドン、イギリスの版権者、イギリス





LIBRARY  
UNIVERSITY OF TORONTO



FOR THE SEXES THE GATES OF PARADISE, by Blake.

1793年頃の作。低彫腐蝕版畫。四大を巧に描き表してゐる。「ブレイクの繪に就て」参照。

- i. Air.
- ii. Earth. ii
- iii. Fire.
- iv. Water.



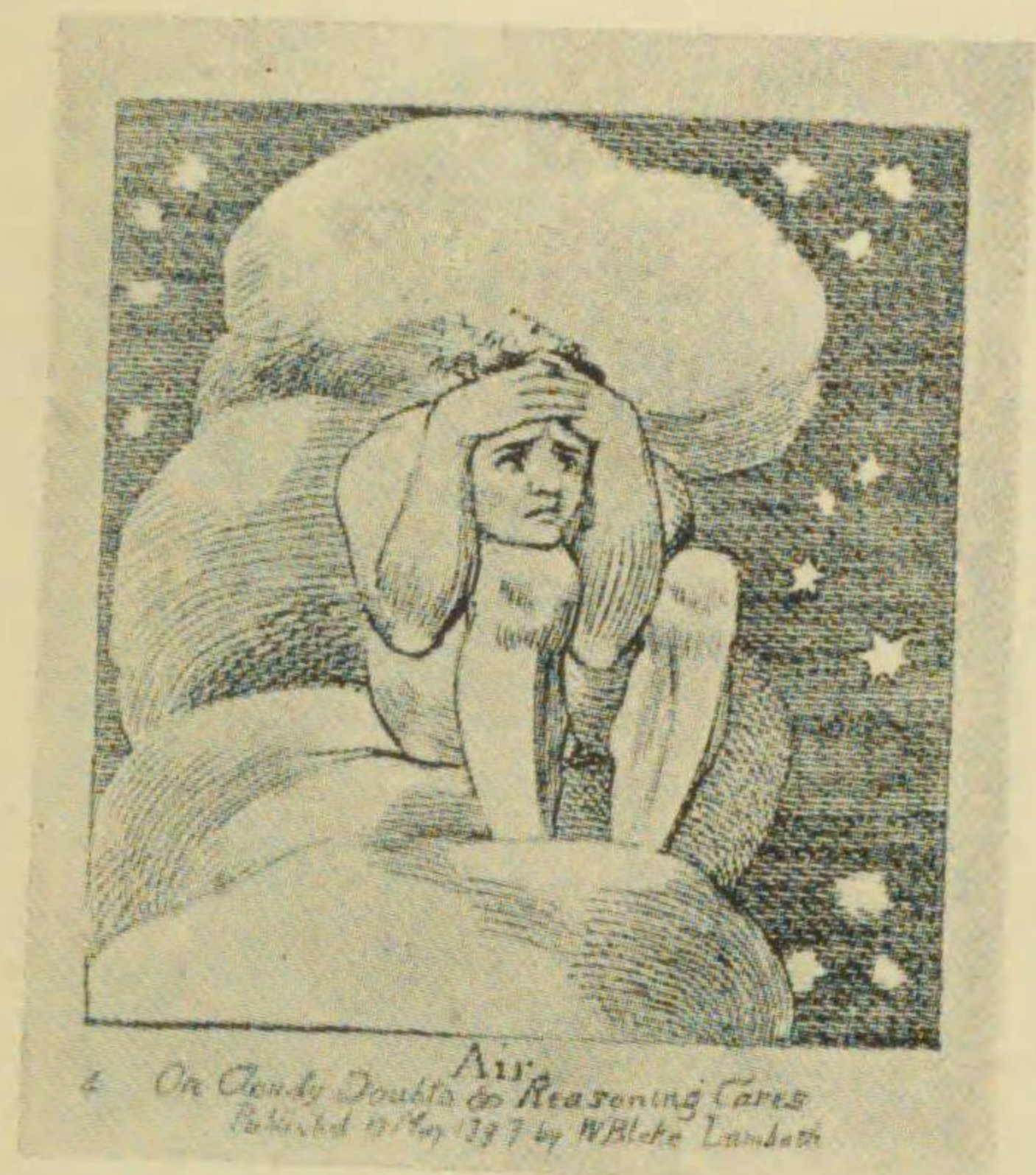
iii

iv



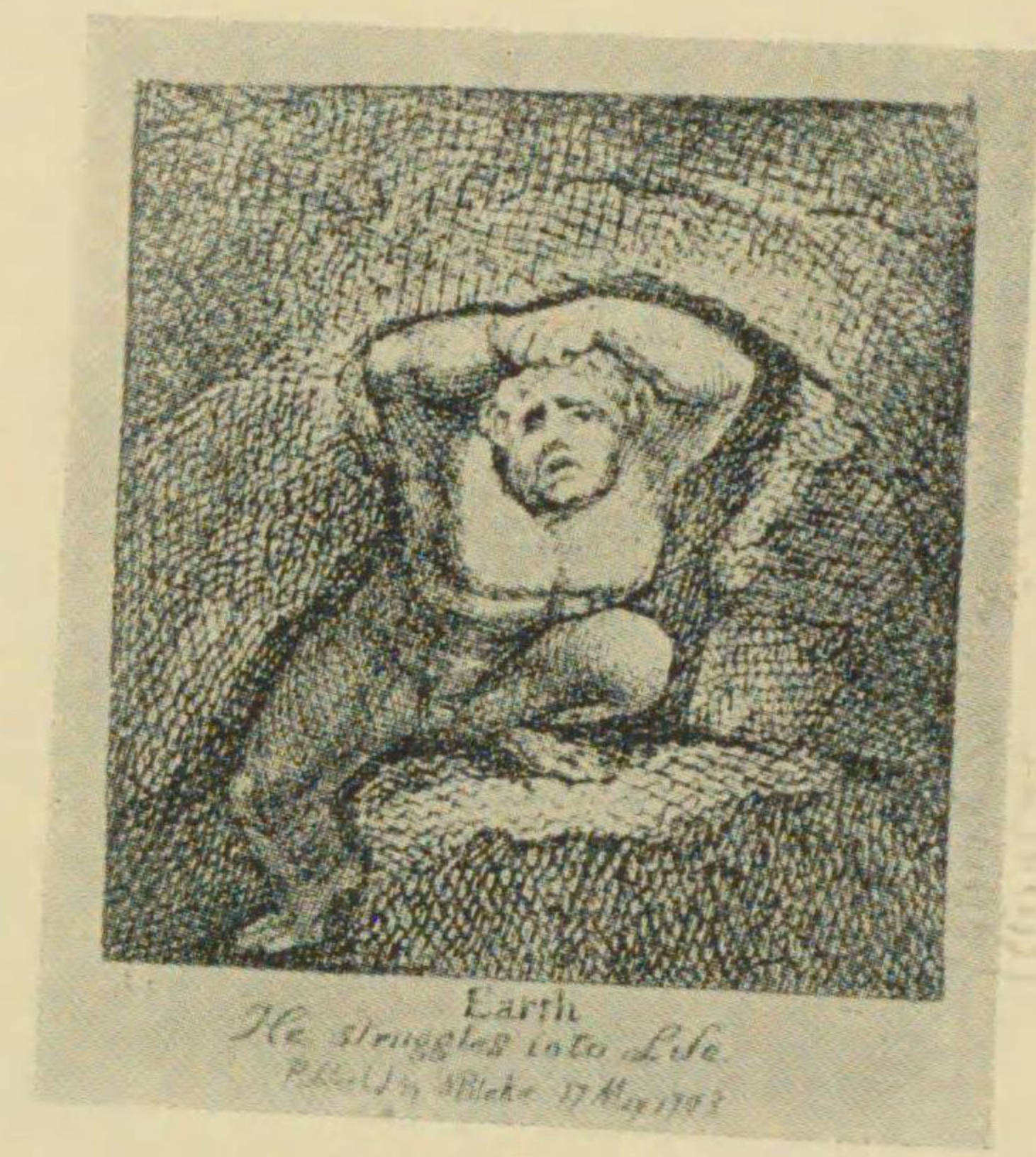
FOR THE SEXES THE GATES OF PARADISE, by Blake.  
 1793 年頃の作。低彫版銅版畫。四大部分に分けられ  
 表してゐる。ラノマの繪に就て參照。

- i. Air.
- ii. Earth.
- iii. Fire.
- iv. Water.



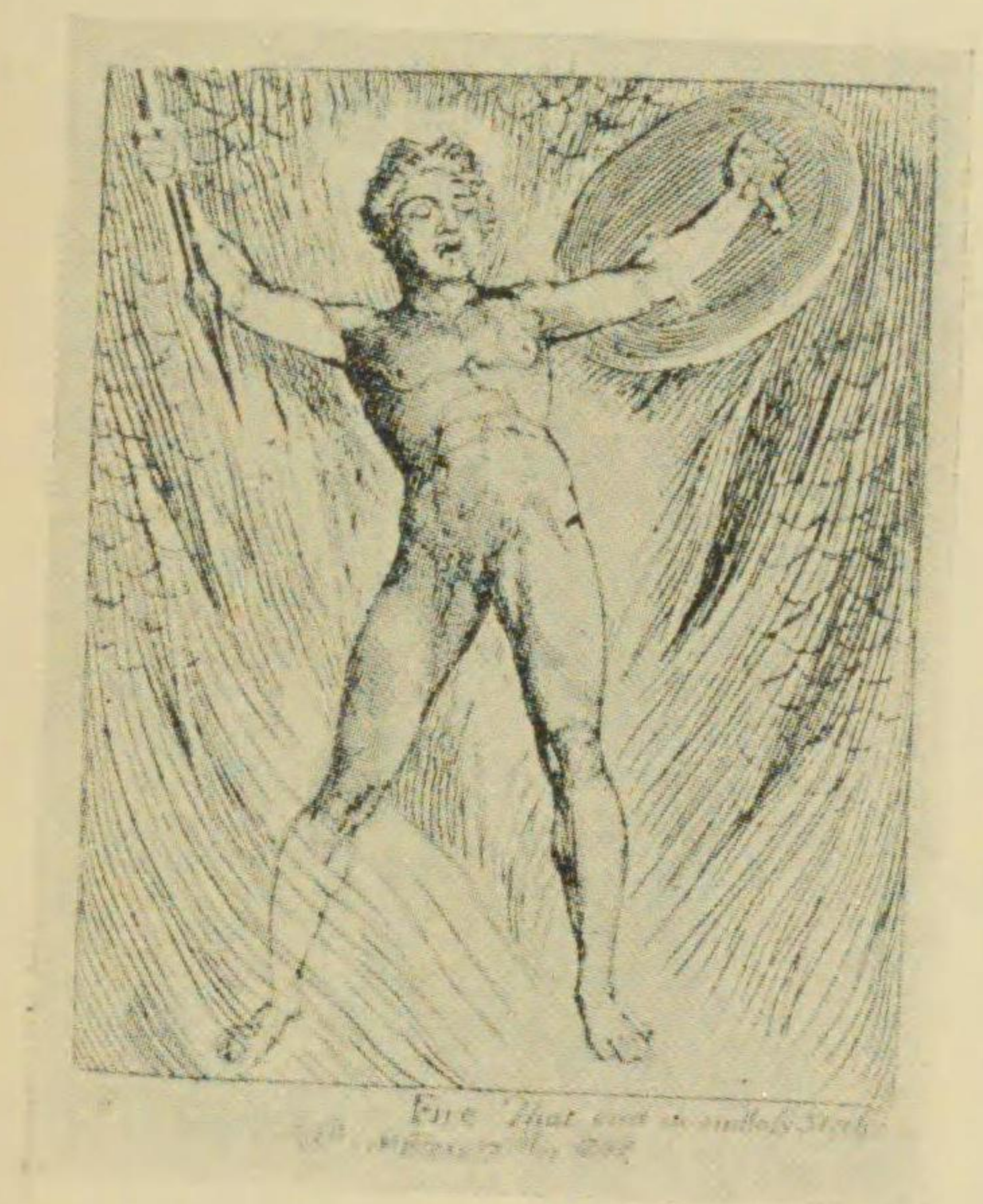
Air  
 On Cloudy Joules do Reasoning Care  
 Published by W. Blake London

i



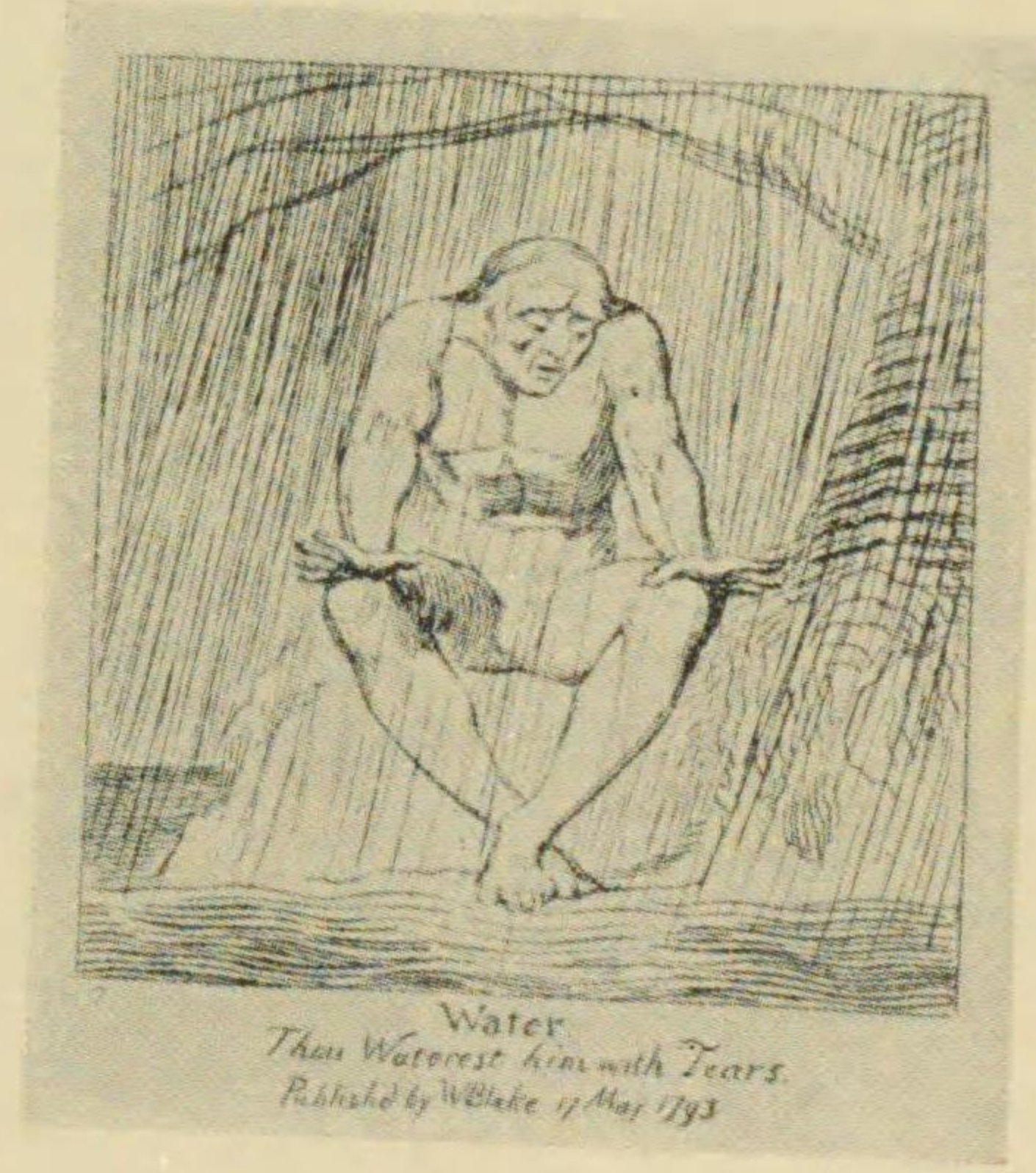
Earth  
 He struggles into Life  
 Published by W. Blake 1793

ii



Fire  
 That ever is and is not  
 Published by W. Blake 1793

iii



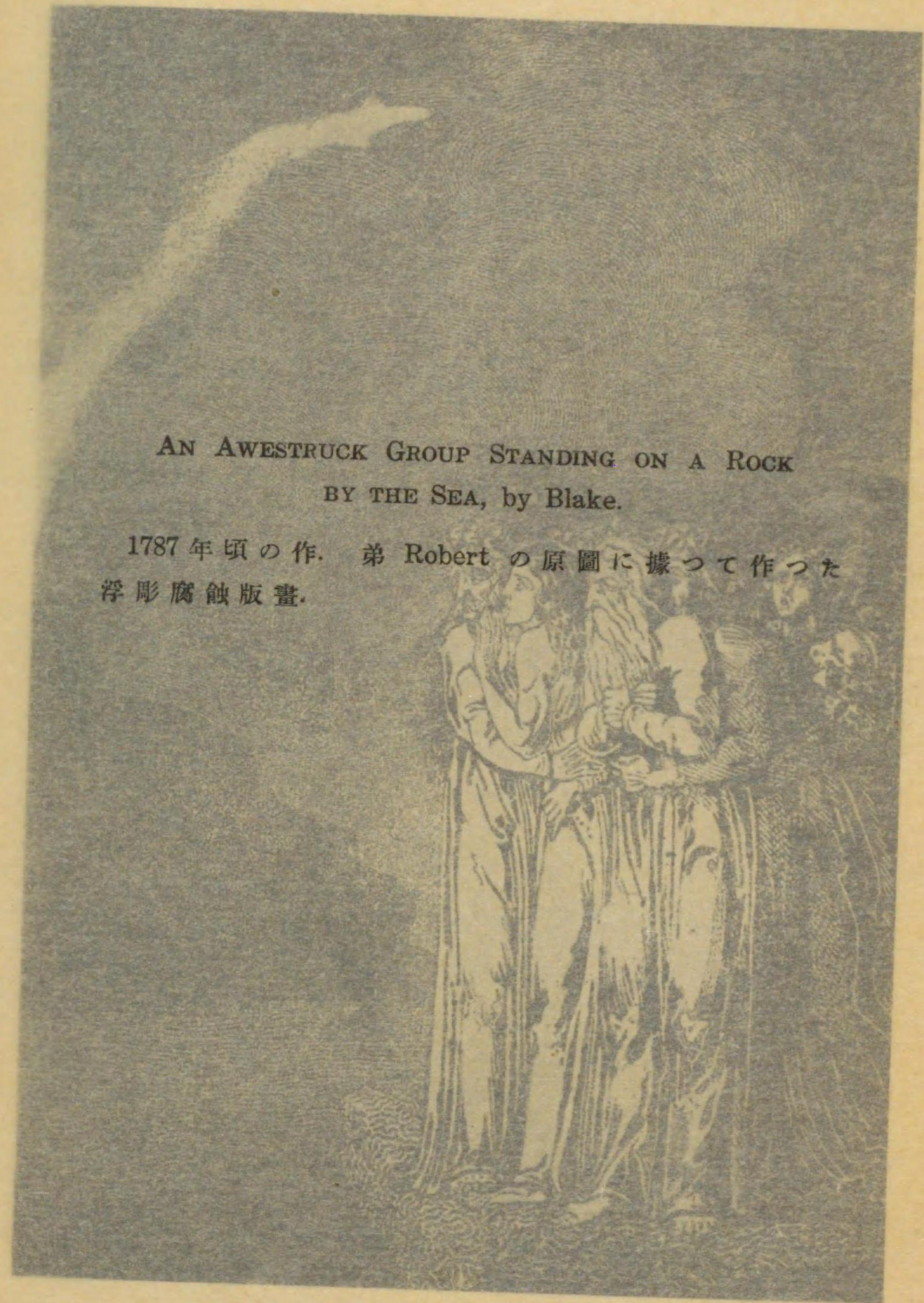
Water  
 Than Waterest him with Tears  
 Published by W. Blake 1793

iv



AN AWESTRUCK GROUP STANDING ON A ROCK  
BY THE SEA, by Blake.

1787年頃の作。弟 Robert の原圖に據つて作つた  
浮彫腐蝕版畫。





各版複製畫.  
1787年頃の作. 弟 Robert の原圖に據つて作つた  
BY THE SEA, by Blake.  
AN AWESTRUCK GROUP STANDING ON A ROCK







TWO ENGRAVED DESIGNS, by Blake.

i. THE MAN SWEEPING THE INTERPRETER'S PARLOUR,  
by Blake.

1822年頃の作. 白蠟版畫. 「ブレイクの繪に就て」参照.

ii. LITTLE TOM THE SAILOR, by Blake.

1800年の作. 着彩白蠟版畫. Hayley の Ballad  
*Little Tom the Sailor* (1800) の Tailpiece. 「ブレイクの  
繪に就て」参照.

